

川柳塔

昭和六十二年十月一日発行
創刊大正十三年 通卷七二六号



日川協加盟

No. 7 2 6

十一月号

菊正宗

伝統の味を贈りものに……



料理がいきる
辛口の本格派

日本酒で乾杯！

神戸・灘
菊正宗酒造株式会社

昭和62年度 大阪文化祭 第39回 川柳大会

日時	会場	宿題	席題	賞	会費
昭和62年11月14日(土) 午前11時開場 午後1時締切 午後2時批評及び表彰	大阪市中央公会堂(中集公室) 地下鉄・京阪「淀屋橋」下車	「切符」 「時事雑詠」 「黒」 「専科」 「横」 「門」	当日2題 各題2句 出句は出席者に限る 賞題・席題とも秀句に大阪府知事・大阪市長、大阪府・市教育委員会長から「川柳賞」を贈呈	五百円(作品集代を含む)	主催 大阪府・大阪市 大阪府教育委員会 大阪市教育委員会

繪 皿

西 尾 葉

朝日新聞の折々のうたに、

いつもだと一言三言 私語を交わす

君がいないのは今日は君の葬式だからだ

市 木 勉

「短歌周辺」(昭五九・六)所収。

ある年齢に達すると、このような経験

もまれてなくなる。ただそれをこんな形

で詠んだ人はまれだろう。作者は昭和初

年吉井勇に師事して以来、文語定型短歌

に五十年以上親しんだが、七十を過ぎて

から「短歌自由詩」と名づける自由律に

転じた。しかしこの転身は少くとも作者

に関する限り、ごく自然だったようだ。

文語定型ではこの歌の感じは出せまいと

大岡信は言っている。この歌を読んで、

最近売れに売れている「サラダ記念日」の歌を思い出した。市木さんの歌は昭和五九年、俵万智さんの歌は昭和六二年、既に三年も前に、サラダ記念日式の歌は詠まれている。

七十を過ぎた男が詠んだ歌は騒がずに二十四歳の女性が詠んだ歌が百万部も売れるとは、どういうこっちゃ、女ならでは夜が明けぬ国の神話であるか。

俵とは大へんいい姓である。ニンベンに表の文字通り、自己を表現することが巧みな人である。しかも他人に嫌われたいのは大切なお米を与えるからである。

昔、藤原秀郷という武將は近江の三上山の百足を退治して有名になった。山の主はお札に米俵を贈った。この俵はいくら使ってもお米はへらない、という。秀郷は以来、俵藤太秀郷と言われた。この子孫が増えにふえて、秀郷流という言葉も出来た。中でも俵さんは代表格で運が強い。

今度小社の同人で路郎賞をとった高橋

千万子さんが句集「繪皿」を発刊する。序文を書く都合上、一句一句入念に読んだ。立派な佳吟秀句がひしめいている。一句たりともおろそかな句がない。こんな立派な句集を著者はタダで貰ってもらったと謙遜している。この句集なら三千円でも高くない。

サラダ記念日の俵万智さんを俵無智さんとしやれているが、つまり素人は怖いということになる。歌集を読んでいると「フン、フン阿呆かいな」という笑いが浮かんできく。つまり今の世に笑いが不足しているからだろう。

千万子さんの句にもユーモアの句が沢山ある。

失職をしてから一番風呂に行く 千万子

散髪代一日百円ずつ伸びる

昂奮の意見に入歯だとわかり

十年のへそくり入歯になろうとは

まだまだ沢山あるが、あとの楽しみに

残しておく。

座右の句

浮き草は浮き草なりに花が咲き

(生々庵)

私の句

とりどりの花それぞれに台詞持つ

三宅 保

川柳塔 十一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

絵 皿

川柳大会への旅

西尾 葉 (1)

川柳塔 (同人吟)

橘高 薫風 (2)

自選集

西尾 葉選 (4)

■川柳太平記 (114) 川柳の群像 大井正夫

東野 大八 (32)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (三十三丁)

俚諺的川柳 (1)

阿達 義雄 (36)

青森の三日

西尾 葉 (37)

水煙抄

黒川 紫香選 (40)

秀句鑑賞

「同人吟」

水煙抄

松川 杜的選 (39)

有働 芳仙選 (61)

川柳大会への旅

橘高 薫風

今年によく旅に出た。川柳大会への旅も多かった。

六月には日本川柳協会主催の札幌大会があった。斎藤大雄氏の熱情あふれる挨拶に参会者は感銘を深くしたが、それは札幌川柳社三十年来、氏の口癖の、「北海道の急行の止る駅の町に川柳会をつくる」指針や、それ以前の先覚者の活動が結実したもので、記録的な六百七十五名出席の一大ページェントとなった。私は寺尾俊平さんと弥次喜多を決め込み、小樽・余市から神威岬を回り、函館を見物、連絡船大雪丸に乗り、旅愁に浸ることが出来た。川柳仲間との交歓に余韻が残った。

七月は言うまでもなく、本社の高野山での追悼川柳大会。百二十名の宿泊と二百五十名のご参会を得て、久しぶりの充実感を抱いたが、いささか疲れもした。

八月は「川柳展望」50号の記念の大会が福岡で行われた。地元在住の数名の女性会員中心の奮闘ぶりに、和やかな百七十名の会となった。充実した作品が発表になり、各地の好作家と久闊を叙した。

九月は、秋田県川柳大会に選者で招かれた。講演の「これからの川柳」で、若者にアピ

愛染帖

女性コーナー 茴香の花

初歩教室

「狙 う」

一路集「争 う」

「家族」

柳界展望

62年度川柳塔社同人総会

62年度二賞表彰本社十月句会

各地柳壇（佳句地10選／赤川菊野）

■11月各地句会案内

91

■編集後記

93

橘高薫風選

小出智子選

阿萬萬的

西村早苗選

野田素身郎選

赤川菊野選

(77)

(72)

(70)

(68)

(67)

(66)

(66)

(64)

(62)

(58)

座右の句

人恋し人わずらわし波の音

私の句

泣きにきて赤い夕陽を見て帰る

（葉）

木本朱夏

ールするには、新しい形のユーモアが一番ではないかという主旨を話した。豆萩・耕花のユーモアを一部剝く作者を川柳界は育てなければならぬと思ふ。宿泊した五城目町からは、川柳誌「すずむし」が発刊されているが、それは鈴虫の北限地に由来すること、ホテルの三階で爽やかな声を聞いた。大会出席者は百名足らずだが投句者が多く、参加者は百五十名を越えた。手応えのある作品多く個性的な作者と懇意に話し合えた収穫は大であった。栗主幹・夫妻と青森で合流、甲吉・五楽庵・叶の同人諸氏の案内で津軽の旅を楽しんだ。

十月は熊本での第二回国民文化祭文芸大会、菊池市文化会館で短歌・俳句・川柳部門合同で開催された。菊池市は、菊池一族が「菊池万句」という連歌会を開いた由緒ある土地柄で「ひのくに一万吟」と銘打って行われた。短歌や俳句の選評担当者の短詩文芸に対する確固とした信念、素養に基づく発言に感銘を新たにする。唐津の同人久保正敏氏の文芸大会賞受賞を祝福し、翌日、有働芳仙氏の句集と永田俊子さんの歌集の出版祝賀句会に出て、熊本本の川柳人と交歓出来た喜びはまだ胸にある。

未知の土地を知り、川柳仲間と交歓出来る旅のたのしさは、私の財産。あと一つ十月の中旬に出雲への旅が残っている。



西尾 葉選

松原市 谷垣史好
行く末を問うても無駄な水すまし
鐘撞けば天地和合の音で鳴り

幻想の卑弥乎豊かな胸を持ち
おんな一人加わり形而下的話題

老碌という字にひそむしたたかさ
小説が書けそう有馬へ来ています

魚屋で蝶の動悸見ていたり

岡山県 土居耕花

歩道橋尿を飛ばしてみたくなる
紅つけて欺すでないぞトンガラシ

シグナルの赤よお前は母がない
食うて寝て死ぬ筋書が出来ている

消しゴムよ今消した名は言うまいぞ
眼のゴミを取っておくれと好いチャンス

八尾市 高杉鬼遊
人を恋うときめきなりや秋ざくら

天皇も芭蕉もばくも腸を病み
パーティーをして生活費を稼ぐ
年金のくらしへ金のいる話

仏飯へ信士信女居士大姉
叫んでも泣いても逢えぬ彼岸花

熊本市 有働芳仙

待ちました伝言板の恨み節

子沢山一人足りないエレベーター
保険屋にパチパチ生命弾かれて

友人はあの世の方が多くなりつる
こんな時威張って欲しいお父さん

眼鏡外すと貴方案外可愛いネ

倉敷市 野田素身郎

親子連れの後に親子連れが乗り
結局は素うどん注文するメニュー

宅配便で土産を送り飲みに出る
病院で会っては困る人に会い

県外ナンバーの車が減って秋の風
温度だけ書いて残暑の日記帳

京都市 都倉求芽

秋めいてからの日記が長くなる

笹舟が秋の速さで流れゆく

雑草の背のび見つけた秋の風

肝心なことは言い忘れる作戦で

失意の日平岩弓枝の恋に痴れ

祝・杜的さん路郎賞

銀髪の輝き秋の陽が匂う

兵庫県 遠山可住

良薬は口当りよしワンカップ

百階に住んで自殺は考えず

ランニングシャツで頑固な父になる

落着いている根回しが出来ている

ラブレターやさしいお方やと思う

残り火にあなたと違う人が住み

桜井市 岩本雀踊子

かりそめの情に泣いた小糠雨

朗らかに別れてくれたのが演技

忘却の旅に疲れた寒い町

握り拳の中でもだえている私

コメカミに残る昨夜の別れ酒

寝返りを打った夫婦の隙間かな

伊丹市 榎谷寿馬

七十年の感懐新国劇と分け

シンナーもパソコンもあり子供部屋
ワープロに愛の熟語を入れてみる

国会も馴れるとゴルフ場に見え

居直りのパフォーマンスカタイガース

西行の心になって秋に住む

平田市 久家代仕男

刈り干しが農夫の鼻にあたたかし

フランスパンがとても手ごわい総入歯

おんぶされ渡った橋を父背負い

こだわりを捨てて話せばいい人で

丘に腰おろす親子に海が風ぎ

鳩の絵が画ける政治家なら許す

弘前市 波多野五楽庵

泣き真似がめつばううまいカラスの子

蛇の胃の中で不運を嘆く餌

鯰から予言を聞いてしまふ沼

碁を打ちに行った与作が帰らない

灰皿がないと話をしてくれぬ

ネクタイのお人が今の城主さま

岡山県 嘉数兆代賀

冷戦の朝も味噌汁湯氣を立て

萩の径おんな多弁になりたがる

流行を着ても土の香消えません

芒いっぱん風に揺らいているいのち

ゼニを追いつづけて侘びしい落日よ

沈む陽へきょうの命をありがと

倉敷市

小野克枝

信じたら信じてはずむ夫婦毬

胃薬をくれて友達酒が好き

或る日或る人の情に泣きました

本心は白く咲きたい曼珠沙華

説教が止まぬ長生きするだろう

良いこともある人生の耳掃除

和歌山市

西山幸

秋が来て泣くことが多くなる

清物石の重さも自戒だとおもつ

この傷も自業自得と言ひ聞かす

旅に出たいと思ひはじめた座りだこ

吊革がどれも私に高すぎる

自販機のうすら笑ひを買いにゆく

島根県

小砂白汀

月煌々こぼれあしたの霜になる

神でさえうつかり人間など創り

木枯らしがセミの抜け殻まで集め

ひと区切りつけたる彩のいわし雲

ぶどう熟れむらさきの色窮まれり

ここからが儲けの菜っ葉売れ残り

島根県

堀江正朗

空想の歩幅で続く秋の道

掌に触れるものみな信じたい盲人

輪の外で一人四股踏む面白さ

紅葉と書いて美しさが見えぬ

一杯で男はいいな眠くなる
序の口と七十五歳の誕生日

米子市

林瑞枝

三本の矢となれ屋根に虹がたつ

傷癒えて今順風の音となる

戦させぬ法を化石にせぬように

幾千の味方に勝る友ひとり

貧しさの中でも千の絵は描ける

あの頃の匂いが今もある故郷

大阪市

西出楓楽

杓子定規の位置をずらしたとてひとり

私の強い味方でないわたし

サンチョパンサに徹し切れない自尊心

年輪のドラマは持たぬラワン材

カタカナの仕事何するお方やら

ビジネス書ばかり売れてる不況風

八尾市

宮西弥生

八分目に箸おくにくい秋の膳

松茸のにおい嗅いだだけの秋

お隣と干渉もたず肥り気味

一刻千金秋のソナタの独り酒

プロだからいつも奥の手は笑顔

肉身に見せない笑顔もつノルマ

大阪市

津守柳伸

ひと夏の想いに耽る損保の糸

子を産まぬ女が強い均等法

しあわせが素直にさせる十三夜
割り勘へついでく下戸の泣き黒子
美しいはなしが好きなコマの芯
軽快なショット歪める政治記者

和歌山市

福本英子

自画自讃へ話の接ぎ穂見つからぬ
算盤をはじくと神が遠去かる
俎に乗るのも乗せるのも女
線曲げてまで付き合う程の仲でなし
鮎届く虫喰た蓼が嬉しくて
人事課を素通りしてきた美人秘書

名古屋

越村 枯梢

一杯の水割に酔うあかたれ
離縁状ハンコ注文して来ます
夏ばての神に柏手聞こえない
漫画向きの顔で政治の渦に揺れ
昼下りマドンナに遭う珈琲館
住みにくい街になったね旧人類

米子市

林 荒介

山からの葉書は霧に濡れて着く
夏草の枯れて羅漢の甦る
命令のままに進んだ傭の馬
円陣を組めば歌声たかくなる
見詰められ愛想笑いをしてしまふ
隣から塀の高さの話など

和歌山市

垂井 千寿子

赤とんぼ古里は何処母は何処
天主閣雷雨の中に毅然たり
舌足らずに騙されるのも親か
古里の話題に似合うところてん
味方にも敵にもなつて血の絆
一人居の窓辺に虫の相聞譜

唐津市

久保正敏

目の悪いキュービットにばかり逢う
親も子も孫も祭りのハッピー好き
橋脚の隠忍無冠の父でよし
実年の序章に炎える明日の地図
人倫も政治倫理も無く平和
もういいかいあの娘が言わぬもういいよ

高知県

赤川 菊野

一筋に生きる女に火のドラマ
幕のない舞台を一人で舞い続け
アングルを変えてのぞけば唯の男
何時の日か返す切り札温める
経本を友に一人の灯を守る

竹原市

小島 蘭幸

電話ボックスおんながひとりいて秋に
ヘルメットの傷よ妻には言わずおく
朝の私にまず号令をかけておく
釣り竿を妻も一本持っている
赤鬼のニツクネームをもつ父よ

下関市

石川 侃流洞

美しく老いたし髭を剃りながら

ストレスが抜けず風鈴やかましい

いいことがありそう窓を開けておく

二匹目の泥鰌は柳の下を避け

ワープロで墨のかすれは打てません

東大阪市

森 下 愛 論

反抗期黙々とめしを喰い

世渡りのコツを教える酒を酌ぎ

いやしい酒で終電にまた遅れ

母さんのヘソクリ当てに里帰り

他人事と思えぬ人生欄を読み

呉 市

林 野 甦 光

時差ぼけのホテルで含むレモンティ

パロディは風の心をわきまえる

秋思や尼僧の裾のシルエツト

テレパシーとは雨男雨女

不用意な言葉に出合う通夜の席

倉吉市

奥 谷 弘 朗

ドン底を耐えた笑顔が頼母しい

不器用な父が持つてる温かさ

魂胆があつて言訳引つ込める

くちなしの青虫殺す役は僕

責任の無い足並みがよく揃い

米子市

小 西 雄 々

若僧と思えどプロの水およく

お人好し褒めると安来節唄う

雑草の芽もアメリカへ向いて伸び

ガラス越しレーザー光線嫁姑

ライバルへ修羅場を抜けてきた自信

高槻市

辻 白 溪 子

影を踏みふまれて犬と散歩する

体育祭手描きの楽しいピラを貼る

安産の祈願へ年寄だけで来る

似顔絵がそっくりだから気に入らず

香水の匂いおしやれの度をはずし

京都市

松 川 杜 的

吉報の朝も朝顔二つ三つ

家柄を知ってか朝顔も小柄です

鳳仙花島倉千代子の顔で咲き

止るなら笑い羅漢へ赤トンボ

青墨で字を書いてみる嬉しい日

柳井市

弘 津 柳 慶

孫をだしにおじいちゃんの機嫌取り

仏壇からお酒ほどほどにしなはれや

ゾロゾロと団体客のWC

畳もう箒のはき目忘れられ

空の青知らず塾へ通いつめ

島根県

堀 江 芳 子

産声も七十五歳菊の宴

夫婦善哉こんな暮らしに胸張って

ほろ苦い想い結婚記念日よ

感受性みずみずしさをこぼす秋

こんな時正直すぎて邪魔をする

今治市 越智一水

白を白と言えない暗い風が吹き

嘘などをつくなどソバの花は咲き

幸せな老いへ無策の茶がうまい

清貧を愛して足袋のつぎをあて

たしなみを大切ににする老いの坂

鳥取県 川崎秋女

神さまは悲劇喜劇が好きらしい

極楽に行く約束を妻とする

妻がいるただそれだけで足る余生

すばらしい余生だったナザ・センリユウ

川柳の絆で一〇〇人友がいる
松原市 玉置重人

家計簿に孫の支出が多すぎる

号令がとっても好きなフラミンゴ

快食快眠鬼門は清潔に

廻り椅子鬼も時々疲れます

無精髭生やした鬼はお人好し

松江市 恒松町紅

玄関に桐下駄明治まだ達者

年金の欲が出て来て騙される

隙みせぬ女盛りのイヤリング

割り算のようにはいかぬ会議室

喪の席で親しい程を疑われ

松江市 柳楽鶴丸

我が家では敗戦記念日と教え

政治がお手本迷路大流行

セミプロですかPL野球部殿

地蔵さん描いたら僕によく似てた

還暦やこれから僕の青春さ

米価審にもアメリカの手を借りる

町内が元肩書を外させぬ

脇役の演技が光るのは家系

サングラス濃い目は少し自閉症

握手とは別にながれる静電気

島根県 西村早苗

新聞の折込み鶴がまた折れる

押花を添えて返った文学書

彼岸花昔まんまの地蔵顔

トンネルを出ると秋の葉が落ちる

秋らしい雲を見つけた遠まわり

美禰市 安平次弘道

薬づけ神も寿命を考える

合い鍵の罫が見抜けぬ有頂天

椅子一つ空いて小さな渦になる

匿名の善意へ風はお喋りで

必要論脈の尻尾は考える

奈良市 天正千梢

柿の葉が小判に化ける夏の夜

ホーラクで豆いる暮らし米俵

神か仏か三味の糸切ってくれ
ロマン求めて丸太小屋にとりかかり
地方色ゆたかな回覧廻って来

島根県

榊原秀子

嫌いだとはつきりいうとうとまれる
ひまわりの高すぎまぶしい眼で仰ぐ
慰めか一緒に歩いてくれる月
コスモスの丘新任の地をよくしのぶ
星まわりなども気にする不仕合せ

島根県

錦織文子

考えが有って留守番買うて出る

慰めの言葉を探す女傘

友情をぬくめる電話が通じない

美しく咲くから鉢入れたがり

言いわけをしない氣力をあわれがり

藤井寺市

吉岡美房

くつわ虫みたいな妻にリードされ

人間をもう友達とせぬ蜻蛉

檜山の話に戻る老い二人

彼岸花人の生き死に考える

安全を確かめてから旗を振る

米子市

菅井とも子

火を吐いた島を椿は抜けられぬ
弾みすぎて球は垣根を越えてゆく
健康が何より大事という不惑
出先からはやさしい事を言う電話

急な坂降りねばならぬ杖を買う

米子市 田中亜弥

扱い次第魔性にもなる火の種よ

そそつかしい茶碗ばかりを買っている

肩にあう小さいつづらをもらいます

根っ子引く力今でも持っている

朝夕の火種守って母は老い

米子市 野坂なみ

私たちの雲極楽と信じよう

仏たちへ自慢話は貯めている

白萩の祈りが深い秋の径

さざ波は鳴砂の浜恋しがる

颱風の目の位置にある椅子一つ

米子市 青戸田鶴

旅人の道しるべにと彼岸花

愚かしい自問自答へ虫の声

背のびした分だけつけがついてくる

あきらめてからは波立つ事もない

掃除機も畳の目にはさからえぬ

米子市 政岡日枝子

極楽の門まで続く曼珠沙華

のりかえのホームで足をすくわれる

ぬかるみを歩いた足がよく喋る

手紙の裏を読んで神経衰弱に

花嫁の父も演技をしているな

浜田市 中川幸一

殊更に世を暗くみてサングラス

覚めてから人には言えぬアホな夢

厨から妻のハミング是好日

軽石が石の貌して浮いてみせ

滑らかに眠りへ誘う般若経

倉吉市 渡 辺 独 歩

初恋は遠い日水車が廻つてた

極楽のこぼれ風なら肌許す

代役がスポットライトを浴びたがる

神話呼ぶ土地転がしの繁盛記

間違つた号令も聞く核ボタン

和泉市 西 岡 洛 醉

老いの部屋ごきぶり顔出しただけで逃げ

六十路そこ一步前進二歩後退

空の青謀反が欲しい程に澄み

窓際に僕と小鳥と花の友

楢山は静かなとこと母は決め

堺市 高 橋 千 万 子

青空へ運動会を知らず曲

滝ツボにうたれビールも修行する

常識をわきま座席がない

合理的などと手ぬきが目にあまる

来たばかりオウムさよならさようなら

鳥取県 両 川 洋 々

罪一つ消せる毒矢なら受ける

豊漁貧乏言わず黙々スルメ干す

止め役が逆に辞表をたたきつけ

棟梁が引くとノコギリ唄い出す

民営分割悲鳴を貨車も聞いていた

今治市 矢 野 佳 雲

子のくれた菊の勲章なら付ける

集金人待たして置いてイワシ焼く

北斗星掬うひしゃくの柄が曲り

人恋しそんな無口で豆を剥く

恋風というと涼しい筈がない

大阪市 河 井 庸 佑

ひとことが足らないばかりに生む誤解

子ども等は知らぬと先生だけ思い

控え目な中に自信をみなぎらせ

小細工が思わぬところでぼろを出す

子に託す夢がだんだん小さくなる

鳥取県 松 下 た つ み

指切りを信じて熱の子がねむり

職の無い身にも故郷はいいところ

蒔けば芽を出す休耕田が飢えている

水の色木の色青し更衣

友情が温い口論してくれる

唐津市 田 口 虹 汀

泰然と今日は潜るぞ仁王門

十人も寄つて文珠に負けた知恵

夕茜今は鎌研ぐ影もない

余裕綽々彼は切り札持っている

髪染めて暑中休暇を暮にする

守口市 羽原 静 歩

枯れ葉カサコソスバイの音がする

ボールペン愚痴をグルグル書いている

喉仏言いたいことがまだ言えぬ

札束を積んで政治が荒れてくる

胃カメラの底にカラオケためている

枚方市 宮 川 珠 笑

風鈴が冷房排気に踊らされ

寺の後継善男善女が寄って揉め

友の電話が入歯外した声に切れ

脱脂綿嚙まされ抜歯の余韻かな

バス停で笑いあつてゐる通夜帰り

尼崎市 春 城 武庫坊

過去帳に飲酒の量は書いてない

土鈴振る秋がゆっくり聞きに来る

みたらしを食べるたんびに思う人

ブランコに乗って秋風迫いける

仏陀にも神にも会えず老いの坂

尼崎市 春 城 年 代

ブッシュホン指の動きはまだ確か

嵐呼ぶ男ためらい傷がある

少し黙ってほしい女と連れになる

完璧な妻を装いつづけよう

敬老の日のわたしの上に姑がいる

寝屋川市 江 口 度

ひそひそ話のとてもお好きな白封筒

ラブレターあとは切手を貼るだけだ

封筒の重さを知っている切手

ふくろうに見張りはまかしてあるのです

苦労性夢の中でも走らされ

玉野市 小 谷 仙 山

夫婦茶わんどちらもかけている平和

一対一で話せば晴れる秋の空

来る度に故郷遠くする文化

甘党の中の一人は二刀流

あなたまかせのドラマが好き 永柱花 和歌山市 若 宮 武 雄

飛び石の踏まれる位置に甘んじる

風をうけ流す芒のしたたかさ

やり場ない憤懣猫を抱きしめる

損得も意地も解けないもつれ糸

思い事果てない妻の一周忌

岸和田市 福 浦 勝 晴

秋風でそつと別れる立ち話

颯爽と金借りに行くサラの靴

がむしやらの泣けばすこし気が晴れる

もう一人の自分が覗いている鏡

おんな一ぴき別れ話に煮え切らず

竹原市 森 井 菁 居

野心家の暦には無い日曜日

惑うことなし銀婚の夫婦独楽

最終のゴング聞こえぬ駄馬の耳

長女・二女（一句）

英検二級パスして渡米のことばかり
進学の子よ頑張れや先に寝る

西宮市 林 はつ 絵

独り居の虫すだく夜は虫になる

白菊の白さを通す日の孤独

納得は人それぞれにたばこの輪

不意に来た女とまわる走馬灯

大輪の菊と豊かに話する

大阪市 江城 修 史

よみがえることのみ多き亡母の忌よ

物忘れひどい男の走馬灯

隙のない男に主義を聞く愚か

生きる汗知らぬ男が貯めている

忘却と風化の中にあるドラマ

奈良市 宮 口 笛 生

初孫誕生

祝盃をあげる男の子が生れ

おじいちゃんにも似ているというお愛想

一週間で退院婆さんせわしいぞ

家かても女の方が強よおます

それやからもう酒のみは嫌いです

大阪市 吐 田 公 一

メイドインUSAの孫披露

二人からふたりにかえる老い二人

無縁墓地島の家族も絶えたまま

飽食の果ては茶づけの味となり

帰省する狙いは母の内緒金

和歌山市 内 芝 登志代

逆境へ天使のような児が生れ

先生も今日は和服で老母訪ね

浅知恵へ秋風が吹く自己嫌悪

コスモスもいくさの辛さ知っている

友情の絆は肚の底にある

和歌山市 松 原 寿 子

切符一枚おんなの胸が満ちてくる

繋ぐ掌に流されてゆく物語

相性という存在よふたりの譜

人前は別行動よ待ち合せ

吐かずじまいの言葉を伏せて風になる

和歌山市 牛 尾 緑 良

血圧を妻に測らせてはならぬ

グルメとや母にその名を捧げたし

定刻の列車個性は既に無い

OLの猥談僕は無視された

マッチの火喜べ今日は灯明へ

和歌山市 福 井 桂 香

コーヒーが美味しくなつてセブテンバー

にんにくを効かせ歯医者へ仇討ちに

波が好き万智も私も海が好き

別れますいつも女が言う台詞

白い花燃える言葉を待ち侘びる

和歌山市

山川 克子

好運はケースバイケースで処理される

目の前におっぱいもあるよ膝枕

もう一人の私も重い返事です

猫舌の男とつく鍋料理

よりによって同じタイプを好きになり

高石市

浅野 房子

スター結婚すぐに離婚の噂立ち

アメダスに頼り切っては裏切られ

結果より過程が大事旧人類

散策の小径で過去を捕まえる

結局はそういうことで縁が切れ

寝屋川市

岸 野あやめ

おとぼけもまあまあ芸のうちなどと

気張ったら後家の頑張り気張らねば

為になる本は売れない古本屋

スーパールの籠に暗算も入れる

時々孫を可愛いだけでなし

河内長野市

井上 喜醉

中年の色気たっぷり彼岸花

塗り替えないあかねで古い労働歌

嘘の無い素直な返事してしまっ

届くとは思わぬ声が上役に

表向き出来ぬ昨夜の後始末

出雲市

吉岡 きみえ

境界の杭が曲っているあせり

舌打ちを嫁にきこえぬようにする

自制していますわたし缶ビール

背すじまで寒くなる男の色めがね

彼岸花離婚話をきいている

静岡市

渥美 弧秀

ムキになること少なくて夫婦老い

ワープロもパソコンも遠く老夫婦

花合唱仲間意識も深くする

風呂上がりハミングが出る酒二合

飲み仲間黒も悲しく友の通夜

豊中市

田中正 坊

新米に秋茄子はくは日本人

農政を叱る新米賞でながら

会心の一句を残したい余生

ご存知のようにと知らん話する

筆持てば他人のような妻の顔

鳥取県

土橋 螢

日本史の汚点忘却するなかれ

日本史に大和撫子というおんな

夕焼けが美しいから離さない

ひとりでは生きてゆけないからふたり

肩の荷をおろすと腰が痛くなる

町田市

竹内 紫錆

ファイトふあいとと走る旧道

想定が飛び九月一日

幾何学どおりセンター返し
六十路の友に軍歌正され
文科の友の嫌う横書き

堺市 中川 滋 雀

湘南にて

江の電の軋みがそそってくる旅情
逆縁を胸に刻んだ星月夜
花道の中途においてきた拍手
灰皿に留守居の愚痴が溜めてある
ゆっくりしてられまへんと口先で座り

富田林市 藤 田 泰 子

間違いは最初のボタンのかけ違い
料金不足とても重たいラブレター
残り火のなさに香るさつまいも
親芋芋細い絆にぶら下がる
輝くものばかり五十路の散歩道

富田林市 田 形 美 緒

晶屑めにみてもやっぱり蛙の子
身晶屑も苦勞の種なり三代目
神様の晶屑百年超えて生き
絹かつぎ月のあばたは思わない
糠床を混せて妥協する気持

寝屋川市 稲 葉 冬 葉

大根をぶつ切りにする恋未練
早秋の邪恋拭ってもぬぐっても
嗚呼平和犬の乳房に猫がじゃれ

羽振り良い内に催促をしておこう
嫁になる娘の掌で点す仏の灯

松原市 佐 藤 藤 子

コスモスがざわめく園児通り抜け
膝小僧ごきんと鈍い冬の音
虚虚実実生きてみないとわからない
裕次郎逝って神話が崩れだす
破綻主義私も訴訟起こすかも

宇部市 平 田 実 男

ブランドを自己満足の顔で着る
活造り食べて動物愛護とか
孫が来てその嬉しさとせわしさと
結局は自分の嘘に蹴躓き
他人なら許せることを血がこばみ

西宮市 奥 田 み つ 子

じんむすいぜい菊の系譜をまだ覚え
菊の帯菊の氣品を身にまとう
歩行者天国パパとママとにぶら下がり
かなしみは天国とても尽きるまじ
この辺で眠りに落ちている栞

堺市 藤 井 一 二 三

人生を我に教えて法師鳴く
朝露の重さを見せて萩揺れる
老眼鏡拭きつつ秋の夜が更ける
持ち株を避けて新値をダウが取り
さわやかに老いてさるすべりの白し

豊中市 奥田満女

女医さんが好きでくすりをのみ続け
お隣の忠犬只今ひるね中

吠えられて犬と喧嘩をするつもり

手相見を信じて親を信じない

逃げることに夜店の金魚上手なり

弘前市 田中叶

りんご積む貨車の真上のお月さま

駄菓子屋のばあさんが死に家が建つ

母が来て杜宅に吊す唐辛子

八月は葉月雅子の死を思う

中流の口によく合うナボレオン

京都市 山本規不風

腹の底当てられ男の目のやり場

小春日の浮雲嘘を温める

愛しぬく別れを口にせぬ野菊

地獄なら逢いたいひとと女郎花

ブルートレイン美人の支えとなった旅

鳥取県 新家完司

お向いの箱でも餌を食べている

さか立ちをすると幼ない頃の空

札束で割るときつちり割り切れる

梅の種割ると天神さまの声

逆転打わたし以外の人が打つ

西宮市 西口いわゑ

菊誉めて孫ほめられて恙なし

三歳児みな天国にしてみましょう

台所へあかりの点いている安堵

病む人に呼ばれて嘘も三分混ぜ

今ならば笑い話にする余裕

羽曳野市 田中隆二

父さんは無口母さんは喋り過ぎ

入道雲父の怖さを知らない子

人の裏ばかり見てる花名刺

結び目がほどけて孤独な風に遇う

もう一人のわたしと話す秋の夜

大阪市 古川美津枝

顔見世招待欲と道ずれ着物展

縄のれんタテホシヨックも魚にし

歌舞伎看板奥方族にスキがあり

秋彼岸サラダ記念日まだよまず

就職戦秋は気魄の女子大生

大阪市 西森花村

ありがとうひもじい時は出ぬせりふ

お陰さま降っても照っても気象台

阿呆だつて気にすりや肩も凝ってくる

蟻と妻体重計に遠く居る

大阪市 黒田真砂

お目当の服がまだある気の疲れ

あの辺りに燈籠等と夢つづき

会津若松(一句)

鶴ヶ城のぞめば帰らぬ人の声

カードくる独りの夜のもの想い

大阪市 本間 満津子

書斎兼客間茶の間で足るくらし

荒地には荒地に生きる草の花

正直な舌が失礼してしまい

松茸が買える財布を別に持つ

大阪市 神夏磯 道子

松茸を食べる楽しみそれも秋

シャツの汗夫だから尊いと思う

あり余る力豆腐が切られない

雑草の自負虫たちに慕われる

大阪市 大塚 節子

散る花をいとしいと想う齡となり

豪遊をするとして女のすることは

戦前派もつたいないが肥えるもと

米寿なり象牙の箸も先丸し

大阪市 中西 兼治郎

息子より嫁を大事にして平和

農に汗流して生きる故郷の母

うそも方便癌患者には許される

料金は同じ立つ人座る人

大阪市 柳 原 静 香

歲月やきこえぬ耳にある悟り

昼の風呂老いという字をはね返す

老いの道あそこもここも行きどまり

秋風に怠けた悔いを裁かれる

大阪府 坂口 公子

窓越しが見納めだったなんてなんて

万歩計秋へのびたりなどさせぬ

小半時天晴れロックへ耐えた耳

結局は何も分らなかったロック

大阪市 塩田 新一郎

そのままの顔で帰って叱られて

不可能も可能もあつて吾が辞典

四捨五入しても青春過ぎていた

唯死ぬのも癪だなあと老いの朝

寝屋川市 宮尾 あいき

灯火したしむ頃というのに汗だくで

この残暑未練男の恋に似て

恋成就彼女とペアのシャツを着る

Gパンをはく私はまだ七十路

寝屋川市 柴田 英壬子

菊日和賀状の構図考える

独眼竜見せ場に苦心する菊師

グルメ度の高き椎茸煮るとなり

かす汁に亡父の面影フトよぎる

岸和田市 原 さよ子

京に遊んで(三句)

流暢に真似の出来ない京言葉

先斗町昼の素顔の舞妓さん

いっせいに鳴る鐘を残して古都暮れる

嫁の愚痴言つて愚かさ噛みしめる

寢屋川市 平松 かすみ

味のある話へ味付けして眠い
空席を横目に若いつもりです
行儀よく宝石店をみてまわり
高月謝はらい淑女になろうかな

寢屋川市 堀江 光子

月見草まだ砂浜にある余熱
逆境の頃は無かった隙間風
思い出す顔サングラスかけてから
思考ゼロ今日もテレビに流される

松原市 北野 久子

好きだった秋も佗しくなるばかり
好かれないお人へ今日もとちるなり
コーヒーをゆつくり語る人も無し
聴こえたら聴こえていたらと夢は消え

出雲市 板垣 夢酔

台風にわが家の欠陥あばかれる
いい妻になろうと砂を吐いている
つまみ食い歳にちよつぱり照れがある
遠くからバキュームカーの自己主張

出雲市 園山 多賀子

草枯れてサラダ記念日彩褪せる
つゆ草が青い小夜曲奏でます
堅実な末路と憶うカンナの朱
ある奇跡信じて掴む神の藁

出雲市 石倉 芙佐子

悪女また月と遊んで帰る路
ゆらゆらと悪女の影は森に消え
洗い物させて悪女となりはてる
帯が傷にひびいて神無月

出雲市 園山 よし子

隣合せ鏡で話す美容院
国訛りで問うた答えも出雲弁
袖で汗拭きふき父の一区切
洗車するホース持つ妻立話

唐津市 浜本 義美

しきたりの尚衰えぬ草の市
炭山滅びあわだち草は軒を越え
雨漏りに独り住まいの音を聴く
錠剤の一色増えて粥を炊く

唐津市 浜本 久仁於

山よ川よ帰って来いと雲が呼ぶ
菊活けて花のこころに満ち足れり
病む妻へ悲しい嘘を言いきかせ
棄てる鬼拾う仏も人の親

唐津市 筒井 朴竜

始祖鳥は三つ指ついて空へ去り
魚鳥とも脊椎類似の祖へ辿り
人間の文化空飛び水潜れ
鳥や魚と祖を同じゅうし進化論

和歌山市 堀端三男

辞職峠を何度も越えた宮仕え

若者に負けずにアンテナ磨いてる

心とはちぐはぐを言う今日の舌

流儀など言わぬ麦茶がありがたい

和歌山市 神平狂虎

立ち止まる事ばかりなり秋の風

スキヤンダル独り中州に残される

身の上話が乗っているのは笹の舟

悪いのは何時でも僕で深い秋

和歌山県 寺田裕美

稲穂からぶんぶん秋が匂いたつ

禅寺で茄子とカボチャの味に惚れ

三者凡退九回にきて目を覚し

百舌鳥鳴いて梢の柿が思案する

和歌山市 桜井千秀

隠し味隠し通した二重蓋

戦前派練りはみがきを搾り切る

スツタモンダとあんまり印象づけないで

行間もずっしり余生のプラン練る

和歌山県 天満三千代

背戸の虫にせかされている冬衣

爪楊枝に中断された蟻の列

家内安全ただそれだけの願をかけ

反省の時に邪魔する俄雨

鳥取県 森田熊生

新しい悩みが出来てから若い

出し切った汗へ蛇口の水うまい

日本が好き四季が好きわらべ唄

さわやかに流した汗とにぎりめし

鳥取県 金川満春

余生いま急くなあせるなあわてるな

どう転ぶニューリーダーの秋の陣

甘党を自認鯛焼五つ買う

帰省の子三杯目にも遠慮せず

鳥取県 江原とみお

余生までエンゲル指数つきまとう

世間さまに向ける顔なら別にある

ときめいて見たくて赤いシャツを着る

烏龍茶のんでノルマを追いかける

神戸市 山口美穂

台風の旅の行く手を狂わされ

ドラの音が世の憂きことを消去する

先ず土産送ってゆっくり旅の味

次の旅の計画をして旅終る

神戸市 仲どんたく

襟足を隠す蛇の目の雨となる

孫二人去に老人と赤とんぼ

真向うて笑み横顔で泣きじゃくり

音みんな凍って白い夜となる

岸和田市 島崎 富志子

どの虫が音痴か合唱くるって

図太くもろくもなつて年をとる

だんじりへ沸いたフアイトがなつかしい

オーナーとなるただ一本の栗の木の

岸和田市 清野 こう

派手な服自問自答をして着ける

未だ出来ぬ宿題親があせり出す

法師蟬鳴き出し秋がしのび寄る

帰郷せぬ孫に届いた甲虫

羽曳野市 榎本 吐来

飲み屋から電話をくれる友がいる

ロマンスを綴る作家の無神論

負けている証拠に友へふれ歩き

あすなろを嗤えぬ靴を今日も履く

羽曳野市 佐野 白水

迎え火をすませ思い出語る膳

南帰するつばめ案山子に別れ告げ

盆踊りの囃子へいらだつコルセット

領収証ですと準師範の免状出す

羽曳野市 中村 優

げんまんの約束淡いネオン街

公約の玉虫色が溶けてくる

ひと様の情に弱い涙壺

ワンテンポ遅れる罪のない女

堺市 柿花 紀美女

生き残る手段一病と仲をよく

此の辺が極楽かと線を引く

一夏が終りて虫の死骸捨て

懸命に育てた種に背かれる

米子市 石垣 花子

笑われるからとうるさい妻がおり

縛られるスキは見せない風車

飾られて壺は素姓を言いそびれ

打診する手紙は候文で来る

米子市 寺沢 みどり

受話器から父の直球とんでくる

極楽の招待状が風に舞う

秋空の下で数珠玉かぞえてる

増築の屋根へ噂も流れ出す

米子市 澤田 千春

故里の海がふんぎりつけてくれ

りんどうの便りがとどく秋日和

一言が力になって生きつづけ

ささやかな憩いとなった京の旅

岡山市 井上 柳五郎

千五百万老後の備え腕を組み

電話して妻はとなりへ犬嫌い

敵味方おんなじ神に頼って

命日だ殺虫剤も撒くまいぞ

岡山市 川端 柳子

生駒市 森田 カズエ

原因はあれだと気付く蟬しぐれ
握りつぶした筈が何時何時までも生き
いわし雲思ひ出の人どつと寄り
一対一そんな質問投げにくい

岡山市 矢内 寿恵子

切株に掛けると亡父の息づかい
精一杯生きる私とカナカナと
無縁仏一期一会の香をそえ
わかめ汁嫁も白髪がちらほらと

大和高田市 岸本 豊平次

野の花を活けるに流儀などいらぬ
猫よりはましなのが居る日曜日
風の味本当に知ってる野良の汗
血圧にすぎ焼の味もめている

宝塚市 丸山 よし津

何時の世も分母は替えず生きている
どこまでもあなたの傘を頼り切る
待つ事に馴れて今宵も虫を聞く
雑魚でよし雑魚しか出せぬ味もある

箕面市 坪田 紅葉

人の老い取りあげて話す友の腰
墓守りを又子の代もと律義者
捨てかけたぬいぐるみの目がひかる
夕涼みおまけがついた遠花火

とりまきの中でひとりがするくしゃみ
ふり向けばふり向きながら親子鹿
城濠の鯉も忘れぬメロドラマ
振り向いて子育てつづく植木鉢

仙台市 川村 映輝

審議拒否そんなルールがあつたのか
脇毛見せるだけで女食っている
ロボットの働きすぎが邪魔になる
暴走族交通安全の札を持ち

倉敷市 稲田 豊作

国は黒字わが家は赤字減らしなり
祝日を旗日と呼べぬさびれよう
小サイズ親から貰うた知恵袋
はろ口を話せば病人起き直り

橿原市 岩井 本蔭棒

小心の酒で大言壮語出る
ごみ拾う人捨てて人広い空
論争で勝つたためしがなく六十路
とれとれの魚が左遷を慰める

東大阪市 崎山 美子

涙武器に女修羅場をくぐりぬけ
仏心だしたを悔いるコップ酒
逆境に人の情を知る涙
戦争を語る涙と聞く涙

高槻市 竹内花代子

咲きました証拠に押花にして送り

刈草の騒音へ昼のこおろぎ耐えている

惚封じにくす玉を析る老いの指

嬉しさを仏へ話すお燈明

八尾市 宮崎シマ子

土瓶むし松茸だけが調わず

重陽の節句水銀は三十五度

生きるとは哀しい事よ虫の音よ

各停で紅葉の山を谷を行く

福岡県 横地雅風

我れ銃を持たぬに鷺の飛び散りぬ

農民の汗へ鳥の爪が立ち

何百年杉は突風で歴史閉じ

我が家の内需拡大服を買う

高知県 中内朱坊

島国の悲願が実る夢の橋

赤トンボ深い青空連れて来る

飲むだけと言う贅沢な友も持ち

念入りの化粧鏡に疑われ

倉吉市 渡辺菩句

ピーチパラソルには留守番のお大様

貝を耳にヴィナスと電話してます

マドンナに逢って来たとは嘘っ八

写すなら白いお船も入れて下さい

中年の夏の終りの独り酒

秋の夜は素直に飲もう腹の虫

虫の音を聞いて行こうか五十路坂

生き残りゲームの細い蜘蛛の糸

弘前市 斉藤 蒔

風呂敷のないのに盾が渡される

偏差値を問わない神だから拝む

胡瓜だって一人で曲がった訳でない

コオロギが食べてるりんごなら旨い

羽咋市 三宅 ろ亭

ひまわりに負けじと鶏頭背伸びする

均等法家庭にまでは程遠く

亭主のへまは深追い避けるべし

兵法の常なり逃げ口開けておく

高知県 小澤 幸泉

言い訳がいっぱいだった父の遺書

義父定年をむかえる(三句)

定年のあとのドラマがまだ描けず

定年の父を知ってる紙吹雪

定年の勲章父のちびた靴

笠岡市 松本 忠三

注射でも打っておきます気休めか

看護婦に住所氏名を覚えられ

尤もと思う言葉の野次が飛ぶ

バスが来た時刻通りを不思議がり

浜田市 佐々木 裕

しきたりも家紋も重いのれん継ぐ

大胆な不倫指輪を付けたまま

ライバルは闇にも強い勘を持つ

拾うては見たが使うには古い

静岡市 永倉 僕 川

実績があるから舌が廻り出す

勿体ないそれが明治の悪い癖

欲の金迂闊に乗った後遺症

妥協したつもり深夜に狂い出す

姫路市 丁 坪 サワ子

血圧を上げる口なら聞かずおく

彼岸花亡夫の吐息の彩に咲き

衣替え残暑が辛い役付きで

はげつちよのズボンが語る新人類

岡山県 岩 道 博 友

冷房を仕舞えば古傷直りかけ

空威張り去年の話を又しゃべり

他人には話せぬ冬の秘話を持つ

運動会議員ばかりが出て並び

兵庫県 脇 田 米 朝

チンドン屋それは陽気な街でした

ワープロで愛の告白など出来ぬ

青い鳥追っかけ廻して逃げられる

太陽のような母さんいてくれる

尼崎市 奥 山 美智子

月の暈心変わりをせぬように

はじけ飛ぶ想いが花の種にある

憶い焦がれて星は疑い深くなる

うっかりと他人の面を掛けている

大阪市 北 勝 美

割り込みをもう知っているすべり台

缶コーヒホットな秋になるいくさ

年金のくらしに嫌な世間体

大阪市 藤 田 頂留子

空のころ般若心経も川柳も

自転車の数も商敵見て通り

コオロギも光明真言和してくれ

大阪市 寺 井 東 雲

小錦に似てると言われ喜べず

シミチヨロを注意をすればフアッション

大阪市 板 東 倫 子

人間が好きで涙腺すぐゆるむ

恋日記小さな嘘で終ってる

聞く耳と聞かぬ耳持つ年の功

大阪市 町 田 達 子

公園に河内音頭の灯が揺れる

地蔵盆ときの流れを仏知る

情緒まだ芒に少し淀河原

大阪市 大野 武 太

父という演技もすぐに見抜かれる

最高のゼイタクならん無一物

居眠りの出そうな椅子を用意する

大阪市 坂 本 仙吉郎

阿波に来て訪ねあぐんだ一の宮

一の宮向いの札所は人多し

古都税でゆれた金閣箔をつけ

大阪市 北 山 悟 郎

鼻先にブライドぶら下げつまずく

赤とんぼ人の挽歌を問うている

スタミナの料理ニンニクだけのこと

大阪市 鍛 原 千 里

夏大根辛さという誇り持つ

絶対の自信をくすす秋の風

女対おんなアイスクリームの負けである

大阪市 渡 辺 さと美

抱きついた形で晴着の帯が出来

淋しくて灯に寄るイカを喰えない

善人の鼻は答えを急ぎすぎ

大阪市 宮 下 と し

満ち足りて同じ柄着てフルムーン

炎天下まだ地下足袋の八十歳

雑用と趣味に追われている健康

草笛で雲を呼び

円かなる家庭の灯

杖突いて八十路越え

岡山県 荻 野 鮫虎狼

義理で来る見舞がうまい事を言い

心経のリズムは妻に従いてゆき

方言の祝辞で先生村へ来る

岡山県 花 田 たけ志

肝心なことには触れず気を持たせ

湯加減を次に合わせておく憎さ

蟻一つ殺してならぬ願いごと

岡山県 小 林 妻 子

ばあちゃんの打手の小槌へ寄ってくる

吐く息も白し焚火の輪が太る

少し後れて深山紅葉の列に入る

岡山県 二 宗 吟 平

自信より厚かましさが出て歌う

人同じからず変らぬ踊りの輪

思い出の明暗があり盆踊り

姫路市 大 原 葉 香

信号のない空鳥にある自由

たとえばの話だったらく分かる

大波小波海が盛んにけしかける

姫路市 松 浦 輝 月

又一本傘を忘れて夏終る
夕顔の数絵日記にふえつづけ
無常とも仲よくなって一人言

姫路市 中塚遊峰

青田風慢性肝の部屋よぎる
年金にやすらぎの日々花すすき
しのぶ秋余生の伴に絵筆あり

姫路市 釣遊光

法師蟬過ぎ行く夏が悲しいか
牡丹燈籠足もないのに下駄の音
ひまわりが太陽追うて燃えて夏

富田林市 片岡智恵子

秋風へ衣替えしたコマーシャル
サラダ記念日お口直しの味がする
A型でとばけ上手になれぬまま

富田林市 新開千代女

花火好き朝からそわそわ落ちつかず
大花火空のキャンパス大胆に
素晴らしい水着着ていて泳げない

米子市 金山夕子

雑音を離れて座る風の中
どたん場で女が見せる力こぶ
太陽に染まってひまわり争わぬ

米子市 光井玲子

挑まねば寄る年波に負けそう

余白まだわたしの彩がきまらない
漬物の石重すぎた軽すぎた

米子市 茂理高代

追ってくる木の葉が寒い道にする
こんなにも幸せくれる秋の草
笑ったよ年寄りばかりの旅の宿

岸和田市 古野ひで

背も丸く心も丸く母老いる
郷愁を誘う稲穂の香に出合う
吹く風も秋めき安堵の残暑かな

岸和田市 芳地狸村

歌舞伎座の舞台狂わすロック調
お祭りの太鼓リズムに街はずむ
だんじりに女権利を主張せず

藤井寺市 福元みのる

葬式の止むなき旅がフルムーン
要件はそれだけかまあ飲んでゆけ
ポックリも春か秋にと勝手言う

藤井寺市 中原比呂志

ファッションの眼の色だけが日本人
マイホーム・リフォーム切れ目なし
煩惱をすべてまかせて滑走路

島根県 石田清泉

東京へ土一升送らんか
蟬しぐれ七十年を逃げ切れず

もう少し瘦せなさいと心電図

島根県

松本 はるみ

高知県

曾我部 裕

一人とは言わせぬ影がついて来る

続編があるから簡単には死ねぬ

口あけたあけびが語る山の詩

島根県

北川 民子

高知県

北川 竹萌

故里はメルヘンの国星が降る

足の裏並べた盆の生き仏

テーブルを叩かれる程のことでない

唐津市

山口 高明

豊中市

上田 登志実

またの世に生れて女おんなだろ

当て馬の恋を横取るサラブレッド

金運にあやかる朴の木を植える

唐津市

浜本 ちよ

大器にはなれぬ年輪積み重ね

夏雲が今日も照るぞとあざ嗤う

長所だけ賞めて許してやると決め

和歌山市

後藤 正子

スキップをしてみてもぐらん秋の天

このままでいたいコスモス風に添う

月を見る案山子はきつと寂しから

和歌山市

木本 朱夏

文子改メ

初恋の少女に還る夏と海

おべんちゃら言うて淋しくないですか

正直に写して鏡叱られる

いわし雲父に闘志がよみがえり

教養も知性も呑んでしまう酒

腰ばかり見ておりましたフラダンス

パラソルを傾げて女見せてゆく

尺取りの小枝に化けている知能

一張羅の帰路忽ちの雨宿り

雨の朝墨絵のように浮くお城

電話あり放浪の旅なり難し

わが家はやっぱり此処だ妻が居る

名月へ母のふとんを縁に出し

夢抱けばコーヒーうまい秋ざくら

りんどうの紫逢いたい人がいる

敵となり味方となつて形見分け

お賽銭値上げをしない音で鳴る

風船の自由は背なの子の自由

スッポンの名のセールスに喰いつかれ

老い悲し無明の果てに捨てられて

いもたき会食べてる顔のめでたけれ

松山市

谷

信夫

諫早市 原田メイシユン

日曜大工女房に貼らせるサロンパス

それから先娘は知りたがる好奇心

女房風邪買いだめもなし冷蔵庫

和泉市 岡井やすお

軽々と億兆の字が跳んでいる

義理欠いてみても百まで生きられず

八百八橋露の五郎の筆に活き

神戸市 山片紀雄

十七字吐いて溜飲下げる齡

起きて寝てきまもなくらしやつと喜寿

しがらみを捨てて浮世を軽く生き

貝塚市 行天千代

台風が来ぬのも不安祭り前

吸血鬼連想させる彼岸花

カタカナの料理が嫌で自炊する

七尾市 松高秀峰

前向きに出れば風向き変り出す

どの窓も楽しく見える団地の灯

貧乏と仲良く生きて六十年

高槻市 川島諷云児

狸寝の妻の枕が濡れている

口紅を引けば老妻もまだおんな

筋は筋女だてらと言うなかれ

五所川原市 加藤彩人

母逝って愚痴からばける父の酒

死に水をとって農継ぐ決意する

利にはしる性あきんどの眼のかわき

倉吉市 淡路ゆり子

母という合格点をどこに置く

北風が橋の途中で向きを変え

ぼろぼろの旅の終りを待つ故郷

枚方市 二宮山久

宅急便届いてふる里近くなる

病む人がいない幸せかみしめる

妻と娘の対話気になる馬鹿わらい

松原市 小池しげお

丸顔の女将で老けぬ二重あご

壁に耳隣り宵からもめている

ジョークの中に鉄砲こちら向いている

出雲市 小白金房子

又うそで生きる女のイヤリング

倒伏の稲に無情の雨叩く

牛の世話今日も幸福星拝む

西宮市 瀬尾六郎太

蟬時雨四季を伝える風物詩

島五ツまたいでボルトしかと締め

盂蘭盆会持戒の心忘れまじ

交野市 山本テルミ
バスツアー年金女性で席埋まる

茶柱に賭けるものあり紅も濃く
赤とんぼの早さで秋がやって来る

吹田市

茂見よ志子

マネーブラン老後老後と煽りたて
仕事では見せぬ笑顔で孫を抱き
自然には勝てぬ絵筆の秋の彩

鳥取県

さえきやえ

タイヤの踏んだ釘が人生狂わせる
はえぬ種小鳥になっていったやら
女ひとり生きる鋏を研いでおく

箕面市

椎江清芳

カラフルな日傘祇園の午下がり
退屈な男と暮らす九官鳥
逆境の拳男の詩がある

茨木市

堀良江

里帰りみんな子どもの顔になり
テーマから外れた話がおもしろい
はしご酒の切りはこの店蛙茶づけ

海南市

三宅保

おしぼりで顔拭く男隙見せる
無人島にも空缶が流れつく
履歴書に半生僅か十五行

大阪市

松尾柳右子

計画を立てずに長生きしてみよう
網棚を一巡してるスポーツ紙

敗者復活錆びた刀を振り廻す
泣きに來た娘が亭主への土産買う

大阪市

横山為子

近い他人七十五日の目が光る
うちの子に限り啖呵の親のエゴ

和歌山市

青枝鉄治

役付けて肩を叩きに來るつもり
セールスに応じて出ればわが恩師

和歌山市

山田高夫

継ぎ足した余生を歩く万歩計
野仏の慈悲に縋っているトンボ

鳥取県

羽津川公乃

百点に足りない母でおおらかで
虫下し飲んで百鬼を追つばらう

島根県

藤原鈴江

月見草ことさら讃え月が照る
転居の地なじめぬままに花を植え

出雲市

小玉満江

嘘ませて笑い袋を空にする
御先祖は十円の寄付と書いてある

川西市

松本ただし

浜風に岩松四股を踏んで立ち
老人の日うな井を注文す

井上白峰

自選集

水粉千翁

八木千代

箸を置く湯呑みに思案持ち替える
暗転の廻り舞台に賭けるもの
ひとりごとそれでも隙間風と居り
しんみりとふり向く孫の背を見上げ
ふと話しかける金盃草に向き

米澤 曉明

小出 智子

口実はいらぬ信じている二人
はっといっておくれはっとけないお人
どんな人いつもひと言多い人
陳情の熱意方言あからさま
はまゆゑも揺れ前髪もゆれ南風

高橋 操子

月原 宵明

ネンコロリ月とうさぎの夢でよい
月まるく昔ばなしが尚はずむ
太陽の子になれ名もなき花が咲く
火祭の乱舞きれいな那智の滝
南風が吹くようにくすり消えた愛

思いもよらぬことを書かせるメモ用紙
空壇の底にひとしずくの昨日
ごく自然にカセットテープ裏返る
スクリーンの向うに見えてきた出口
納得のゆく消えかたをする音符
富士山に初雪があり床払い
昨日捨てた花もいつかは比喩になる
天高く悪いことなど忘るべし
デパートへ行くのは少しさみしい日
枯葉散るわたしを庇い通さねば
石橋を叩いた末の後ずさり
足腰の痛さに義理を一つ欠き
火をつけておいて風上から眺め
肩書を捨て止り木の酒の味
鳳仙花悲しい過去を持つ女

金井文秋

生活の為に起きねばならぬ朝
老いの道いやいやながら皆通り
気まぐれにものを言えない地位があり

推敲をしてない言葉先走り

補聴器の害も聞くからまだ買わず

尼緑之助

冷戦も秋 目につく離婚記事

運命の森とも知らず通り抜け

六方を踏んでもりズム届かない

数百年前と変らぬ戦さ好き

貨車古りて物置きにして使えるか

藤村 女

一枚の絵から私の秋になる

口笛が秋の空気に軽く乗る

寺に来て木魚を叩き無我にいる

曼陀羅の向うに眠い顔を見る

苦勞した人生深い彩に溶け

正本水客

花活けて人を信じた過去を持つ

ひと筋の川の心も秋になる

数え唄あしたは明日の風が吹く

自己主張の似合う右手を憎いとも

一泊のことには触れず土産出す

黒川紫香

唐津そして熊本へ

松原の碧さ玄海は空に浮く

見上げれば唐津の城が見える宿

太閤の夢がはかなし名護屋城

なごやかに話がはずむ菊池の湯

公園と城 熊本はうまか味

市川鈴魚

秋は静かで欲なき貌の招き猫

風を呼ぶ若さ男は酒がある

思いちがいで時々洗う亡妻の箸

子が叛く詭弁兵隊だった父

蟬のぬけ殻被爆を知らぬ数珠の玉

児島与呂志

秋風に稲穂たわなに逆らわず

雀おどしと妥協して朝起きる

柚子の香に飲む気になった揚げ豆腐

曼珠沙華老母をそっと呼ぶ如し

気がかりを一つ持つてる老夫婦

工藤甲吉

政治家に漂白剤はもう効かず

外国のいくさだけれど嫌になる

糞虫になりたくなくて冬近し

ウエストもヒップも蜂にそっくりで

栗主幹夫妻・薫風副主幹を迎えて

珍客へ津軽じょんがら三味太鼓

本田恵二郎

楽天家と言われることが腑に落ちず

楽天家生年月日を忘れ果て

楽天家掏りの腕前褒めちぎり

後悔をするすべ知らぬ楽天家

楽天家の見本その名は伏せておく

大矢十郎

心とり残され豪華な家と庭

味方一人増えたが敵が二人増え

居て欲しくないらしお送りしましょうか

煙草吸う夫婦が並ぶパチンコ屋

冷蔵庫拝見慌てる事だろう

野村太茂津

言わずとも相手分かってくれる筈

錯覚に気付かず今日も愚を重ね

入れ知恵を素直に受けず自己弁護

気が滅入る話を今だから言える

頑迷でないが頑固で押し通す

長野文庫

呆けているなどこちらも呆けたふり

聞えない振りをするのも老いの徳

豊かさに慣れて大事なものを捨て

名を知らぬ人の色紙を大事がり
へそくりをふやそうとして火をつかみ

山内静水

情熱の度合いを神に試されて

命には別状なかった後遺症

老妻の機嫌へ少うし考える

すれおうてふり向かすいい匂い

そんなのと違いますよと叩かれた

藤井明朗

百歳の長寿のしわの尊さよ

核のない地球平和を語り継ぐ

男にも化粧平和ぼけとは思わない

その上の欲神さまは叱り置く

保証まだ実印はすねている

橘高薫風

桐一葉猫も坐禅の向うむき

芋の露光らないはず太りすぎ

さよならも孫とじじいのカツコよさ

旅先の似たもの同士似た酒量

新婚と新幹線の三時間

川柳太平記 (114)

川柳の群像

大井 正夫

東野 大八

「大井正夫は、明石・樽屋町に生まれて蛸焼きを喰べて育った。青年時代に満州へ渡った。大陸に海はなかった。哈爾濱や黒河まで行けば長江何千里という大河があったが、彼が主に活躍していたのは新京、首都に落つくまでは東内蒙古・北滿・熱河省であった。河を見ることがない。金は出来た地位もできた。しかし高梁の切株に雑魚の姿は見えず、黄塵の夕陽に潮の香はなかった。多情多感の彼は、故郷明石を夢みながら、ひそかに錦を飾る日を心にして努力をつづけた。」

それから三十年、故郷の明石にそれも先祖からの寺、林崎の浄蓮寺の庭に句碑が建った。自然石に彫られた浜昼顔の句は、大陸生活の夢であったのかもしれない——堀口塊人」

○浜昼顔いかなご小屋のなかで咲き 正夫
この塊人の散文は、右の句碑建立記念の祝いの品の句を染めぬいたのれんに添えられた梨の印刷物である。

句碑は高さ一・八尺、幅一・二尺の信州産の黄色味をおびた自然石で重さ二トン。この石面の上部に、大井正夫独得の針金みたいな文字で「浜昼顔……」の句が彫られている。

この句碑は奥本唯然、森口一風ら満州電信電話（国策会社）の旧社員五人の発起世話人による寄贈にはじまったもので、いわば正夫の満州新京時代の仲間からの寄贈である。

感謝感激した正夫の大喜びした書簡が筆者の手許に今も沢山残っている。この句碑の除幕式は昭和51年3月7日建立地の浄蓮寺で開

かれた。当日は正夫が所属する「ふあづ」と大陸川柳作家同窓会の有志ら約六十人が参列し、満堂和気あいあいの楽しい一日を過ごした。この寺は大井家の菩提寺で正夫の墓もこの寺の境内にある。立派な石柱の下で、この満蒙の怪男児は自分の句碑を眺めながら永眠しているのである。幸せな男だ。

正夫は本名大井正雄。明治36年3月13日明石生れ。昭和8年11月渡満。小松久雄弁護士秘書で北滿駐在中に川柳に手を初め「番傘満州野」同人。楊元紋太の来満を期に「ふあづ」と同人となるが、この間、大島壽明らと「東亜川柳」を興し、所謂正夫調で活躍。

○你貴姓江橋は梨の花ざかり

正夫

二二んが四そうでなかった酔うてやれ

○わらじぬぐやぐざ言葉も使つてさ

筆者が正夫との初対面は新京の小松事務所、昭和18年ごろ川柳人吉沢喜代志の案内だった。その折、筆者は新京日日新聞の記者で紙上に川柳入りの国都風景を連載していた。

「あなたが大人かね よろしく」

真黒な大きな顔で八ツ手みたいな掌で痛いほど握手しあった。彼は声がかくて底抜けにワッハッハとやる。彼のことをその日から「じゃがいも」のニックネームをつけた。

戦後十年たって正夫と再会したのは岐阜で一晩泊りで大いに語り合ったが、その際、私に見てください、ととり出したのが、原稿用紙一束にした「日僑俘」である。

「終戦は通化で、ここは名にしおう敗戦の生地獄、幾度か死にかけましてな。この句帖はその体験川柳です」

○ソ連機の下で戦車濠うめる 正夫

○下駄はいた満人の子とうちの子と "

○日本刀落葉の底に埋める意地 "

○紅鼻緒丸刈りの娘に齢をきき "

○幾山河こう逃げまして逃げまして "

この長い連作の日僑俘は、川柳雑誌と拙著「人間横丁」に収録させて貰ったが、彼も私家版で一冊にしている。彼の著作はこれと「明石海峡（私家版）の二冊だけである。

「作句は主観の結晶ともいえるが、日僑俘はその点文句なしの及第点は得られるだろうが、しかし幅の広さはあっても底の深さがないのである。ひつきょうそれは単なる川柳形式による現地ルポにすぎなかった様である。主観の透徹があれば、句は表現様式の工夫一つで底知れないニュアンスをもって人の心をうつこころにはすでにナマな主観はなくユニークな文芸作品が誕生する。どんなにうごめ

く生きものの記録の、死を前にした心のゆらめきをもっとどらんらんに追及したなら、この句帖は後世に残ることだらう」

筆者は活字にしたさい日僑俘評を忌憚なくこのように書いた。それに対し正夫は

「大八さんがわしの自信作をボロクソにコキ下ろしてくれましたが、それもそうやなど反省するものの今更どうしようもない。しかし、わしの句を活字にして気のすむまま批判してくれた友情は、忘れることはできません。

私を前に石原青竜刀にこういって正夫の言葉は今も忘れない。筆者と正夫の友情は、このことで一層割なき仲となった。

正夫が晩年にその全精力をもって燃焼したのは大陸川柳人同窓会（大陸川柳作家同窓会ともいった）であった。この結成の発端は、宇和川木耳編の「大陸柳壇回顧録」にある。

大陸の川柳史は明治35年（一九〇二）天津の柳俳誌「鳴」にはじまり、十年後に関東州大連が満洲柳壇のメッカを成し、朝鮮・台湾・北支を加え柳誌も延べ千種を越えた。まさに大陸風流の万華鏡であった。宇和川木耳はこの大陸柳壇四十年史に異常なまでの情熱を傾け、全記録収集に挑み悪戦苦闘した。

この木耳の壮挙に呼応して回顧録達成の為

のその一大デモを兼ね、木耳・正夫・大八が協議の結果、昭和40年4月富士山麓須走で第一回の大陸川柳人同窓会が実現し、大感激集会となった。中野柳陽の肝入りであった。爾来この会合は年一回開催し、柳界名物となり大陸に無縁の人々まで多数参加した。

この大陸同窓会の発展隆昌ぶりに着目したのが日本川柳協会結成に全力投球していた堀口塊人である。「同窓会は会長も規約もないのに、隆昌」途なのは一重に大井正夫の手腕力量による。一つ日川協設立とその運営に力をかしてほしい」と正夫の日川協事務局長の話を持ち込んできた。「そんなウルサイ仕事イヤヤ」と正夫が言ってきたのに塊人と肚を合せムリヤリ承諾させたのは筆者である。

同窓会と日川協にタッチしたため、その生命を縮めたのだと、筆者は内心じくじたるものがある。ブツブツ言いながらも見事この二つを精力的にコナしていったのが正夫だが、昭和55年4月22日脳軟化症でこの好漢は瞑目した。享年七七。大智院正誓舎浄林居士。

★次回は「近江砂人」

俳風柳多留廿六篇研究 (三十三丁)

八木 敬一・鈴木 黄・石田 晋一
南 得二・小野 真孝・本多 正範
石田 成佳・大屋 六郎・多田 光

故岡田 甫

559 深ン林ン人しらす竹の子を盗ミ

八木『唐詩選』の内、王維の竹里館、

独坐幽篁裏 彈琴復長嘯

深林人不知 明月來相照

主題句の「竹の子」は、この竹里館からの連想であらう。

句意としては、王維の詩の文句を振って、

深い竹林の中、他の人から見つからないので、竹の子を盗む、という句であらう。

南『贊』。單なる文句取り。

多田『贊』。竹の子ハぬすまれてから番がつき（拾初15）というのより、もつ少し人里離れた

ところか。

560 紅葉から袖打ふつて聲帰リ

八木『常套的モチーフで、松洞寺↓吉原のグループの中で、入聲たる「主人公」だけは、「袖打振つて」ひとり家に帰るといふのである。

「袖打ふつて」は文句取りであり、藤原定家の歌、謡曲「楊貴妃」、「船弁慶」などにある。

松洞寺むこいへどうもく

聲用をもみちの下でかぞへたて

鈴木『「袖を振る」は、別れを惜しむことで

しよう。自分が入聲でなければ、皆と一緒に吉原としやれこめるのだが、入聲であるばかりに誠に残念だが、正燈寺だけで家へ帰る。

本多『「袖打ふつて」を、鈴木氏は別れをおしむと解していますが、この先は「免とばかり急ぎとつてかえす様を表現したものでしょう。

多田『同右。文句取りだけのもの。

561 相の山泣く子か親をすぐす也

八木『伊勢参宮名所図会』に「間の山妙見町東の坂なり、旧名尾部坂又尾上とも書尾部の事は上に見えなり、両宮の間の山なれ

ば間の山といふなり、…(中略)…お杉お玉などいふて、はいと、いへる者の娘、三みせんをひき金を乞ふに……」とある。

主題句の句意は、「泣く子は親の扱」という諺があるが、伊勢の間の山では、反対に、お杉、お玉という子が親を養っている、ということであらう。

「すぐす」は「過す」で、食わせる、扶養するの意。

石田晋〓賛。「泣く子」はやはり諺からと思う。

南〓賛。「泣く子は親の扱」の諺、知りませんでした。謝。

手がらなりお杉お玉をいたがらせ

宝一三松3

小野〓賛。但し、泣く子に若干の疑問が残る。

多田〓賛。この諺私も知らなかった。何に出たのでしようか。

562 柏餅椎と松との間イをこぎ

八木〓「肌寒しふとんくるりとかしハ餅」(ケイ一五八)と同じく、柏餅のように一枚の蒲団にくるまって寝る。

句意は、猪牙の中で柏餅みたいに蒲団にくるまった遊客が椎の木と首尾の松の間に行く、

という句。朝帰りの句であらう。

石田晋〓賛。木づくし。

南〓同。

ふとんから首松へ出し椎へ出し
下戸ならぬをのこも猪牙に柏餅

九1

多田〓賛。

一〇八3

563 盗人を地黄のよふな目に合せ

八木〓「地黄」を加えた飴を地黄煎または下り飴と称するが、これを製するには地黄を煎じたものであらう。

大盗賊石川五右衛門が釜煎の刑を受けたこ

とは有名であるが、その見立の句であらう。

南〓賛。

らく中もみんな見に来る油あげ

天三智2

手におへぬ石は油にてしまひ

多田〓同。

安九礼4

564 花の数なると冬瓜ハ未だ安し

八木〓冬瓜は非常に大きくなり、そう高い物ではなかったと思うが、雌雄同株であるので雄花には実がならない。江戸期に植物学の知

識がどこまであったかわからないが、花の数だけ実がなったら、もつと冬瓜の値も安くなる、という句であらう。

おもしろい、科学的ともいえる着眼点である。

南〓賛。諺「冬瓜の花百一」、冬瓜にはあだ花多くて大部分が実を結ばぬ。この諺をも踏まえたかと思いますが。

大一座冬瓜の花と見縊られ

五七二

本多〓南説賛。

多田〓同右。

565 村の罌露や茗荷を掘て来る

八木〓「露や茗荷」は、しばしば琴の意味で使われるが、本句では、本物の露や茗荷。

町の嫁なら、露や茗荷が暗示する琴を持つて来る。そして嫁は琴がうまい、という川柳

の約束までできている。ところが、田舎・村の嫁の場合は、そんな洗練された遊芸は身につけておらず、本当の露、茗荷を掘っておみやげに持って来る、という句。蔑視。

大屋〓賛。

酒の肴に嫁の出す路めうか

六一24

多田〓賛。

俚諺的川柳

(一)

阿達義雄

俳句や川柳の中で、其処に含まれている生活哲學的な内容の故を以て、久しく人口に膾炙して俚諺として生命を保っているものがある。それらの中に如何なるものがあるかというのを調べて、その一般的傾向を考えてみたいと思う。

それにしても、自分の主観によつて、勝手に取捨することのないように、今迄の俚諺の大集成として定評のある故藤井博士の『諺語大辞典』の中から俚諺とされている川柳を摘出して紹介すると共に、いささか私見を述べてみよう。

これ等の中には、藤井博士によつて、川柳と註記されているものもあり、これについて註記のないものもあるが、之についての判断は私がやったものである。

さて、この『諺語大辞典』の中に収められ

てある諺語は必ずしも俚諺だけではなく、広義の諺語であつて、その数は約二万四千という夥しい数であるが、その中に俚諺的川柳と認められるものは僅かに三七句である。

俚諺として伝えられている川柳の中で、最も多いのは遊里関係の句であつて、特に「傾城」の語を詠み込んだものだけでも

○傾城の涙で庫の屋根が漏り

○傾城の鬢にはまる家屋敷

○傾城に誠があつて運のつき

○人は武士なせ傾城に嫌はれる

などの句が見える。

川柳評万句合を見ると「りきみ社すれ」という前句題に対し、「その癖に花はくれない人は武士」と附けているから、武士の嫌われる原因は、威張つてばかりいて祝儀も呉れな

いからだと説明が出来る。なお、傾城という文字はないが、

○吉原が明るくなれば内は闇という句もある。

式亭三馬の『浮世床』を見ると、初篇巻之中の会話に「好薬が明るくなれば内は闇だ。困ったもんだの」とあるから、この頃既に此の句が俚諺的に用いられていたことが知られる。

○三人で三分なくなる智恵を出し

右の俚諺的川柳の意味は、江戸川柳で、中妓の揚げは一分となつており、また、二分の妓は附廻しと言つて上妓とされ、一分の半分の二朱の妓では少し軽く見られていた。

すなわち、三人寄れば、各一分必要とする

吉原へ繰り込む相談が始まるというのである。

○女房の焼く程亭主もてぬ也

「持てる」「持てない」という文句は婆でも用いられるが、ここでは華魁に「もてぬ」と解した方が自然であらう。

○孝行で売られ不幸に落籍され

とは、孝行娘が病気の親の人參代調達のために吉原に売られ、ドラ息子に身請けされる

という人生の皮肉を詠んだものである。なお

○緋縮緬虎の皮より恐し

右の俚諺的川柳には、「美女は鬼よりも恐る

べし」と短註が加えられているが、これも遊里関係の句と見られよう。というのは、元来緋縮緬の湯文字は玄人女だけ用いたもので、虎の皮とは鬼の褌を婉曲に指したものだからである。

○売家と唐様で書く三代目

右については大辞典に解かれている様に、「富家の子孫の奢侈に長じて家産を保ち得ざるをいふの通りであるが、江戸川柳にある――

(1) 買ひ過ぎて売物になる角屋敷

(柳多留一〇五篇)

(2) 極楽の遊びが過ぎて火の車

(「三四篇」)

(3) 分散の蔵に巢を喰ふ女郎蜘蛛

(「一〇七篇」)

(4) 山形の手で落城の角屋敷

(「三八篇」)

(5) 惣仕舞館の内へも札を張り

などの句から考えると、唐様の手習い迄した、この三代目の若主人に「売家」と書かせた、そもその震源地は吉原であり、その華魁であらう。右の(4)の「山形」とは、入山形に二つ星、松の位の太夫職などという、その山形であり、(5)の「惣仕舞」とは、妓楼全部の遊女を買い切ることで、「札を貼り」は、売家と書いた札を屋敷にも貼ることである。

以上の様に考えると、遊里関係の俚諺的川柳の句は『諺語大辞典』の中に十句ということになる。

青森の三日

西尾 栞

東奥日報社主催第四十一回青森県川柳大会の特別選者として、七月五日から六日の大会七日の観光と三日間、青森市に滞在した。大会の特別課題の交渉を社から受けた時に、来春三月で廃止される青函連絡船を思い浮かべて「船」という題にした。

ホテル青森で待つてくれたいた甲吉さん、五楽庵さんに連絡船のなくなる話をして、一度でよいから連絡船に乗りたかった気持ちを話すと

「それじゃ、今晚の夕食を連絡船の見える割烹で摂りましょうということで、六時半にその料亭へ案内された。丁度入船のあったところで、クルリとターンするところであった。港には、その船とその前に入っていた船との二艘が停泊していた。

色々と珍らしい一馳走をビールでいただいた

第29回

豊中市民川柳大会

日時 昭和62年11月23日(祝)正午開場
場所 豊中市立中央公民館一階広場
阪急玉塚線曾根駅東二〇〇m
講話 龜山 恭太
席題 (当日発表) 石川 勝選
宿題

化粧 田頭 良子選
柄 米沢 俊夫選
秋 中田 たつお選
誘惑 森中 恵美子選
集合 尾谷 清風選
傾斜 橘高 薫風選
完成 永田 帆船選
各題2句 午後1時30分締切
会費 一、〇〇〇円
(記念品・発表誌呈)

賞 豊中市長賞他 各題に賞・副賞
(連絡先) 電話06(854)1990
石川 勝

主催 豊中川柳会

ているうちに、汽笛が一声大きく響いた。

五楽庵さんは、今一艘が出ますよと言いな
がら、部屋の前を消して窓の外を凝視した。
黒い太い短かい煙突の連絡船が音もなく岸壁
を離れてゆくところであった。それから半時
間すると、今一艘の連絡船が出て行った。

私はホロにがい気持で、キンキンという名
の魚の塩焼を食べていた。

六日の大会は洵に盛会であった。天地人の
句をあげると

子が描いた船に戦意などはない
救助船波をけたてておそいこと

船長が好きでたまらぬハーモニカ

以上で、ロマンやドラマを期待していた連

絡船の句は

減船で函館の霧深くなり

連絡船時代の波を乗り切れず

の二句だけだったのは淋しい限りであった。

その夜は前記お二人と、今度川柳塔青森支
部を結成して下さる若い人五、六人と、津軽
三味線の甚太古へ案内して下さった。名人高
橋竹山の秘蔵弟子の三味線の音を満喫した。
九時過ぎ、薫風さんは秋田から駆けつけて、
その三味線の中に落っこんで、その夜はホテ
ル青森で一泊した。

翌七日は、五楽庵さんの次男坊の運転で、

甲吉、五楽庵、叶、薫風、栗、美与子の六人

は金木町の太宰治の生家へと走った。生家は
既に斜陽館という名の旅館になっていた。若
い観光客で一杯だった。立派なお庭、立派な
座敷は大地主の風格を誇示していた。そして
到る処に家訓が掛けてあった。一例をあげる
と、

叔母の言つ

お前はさきようが悪いから愛嬌だけでもよ
くなさい

お前はからだ弱いから心がけてもよくな
さい

お前は嘘がうまいからおこないだけでもよ
くなさい

という掛軸が、コールコーヒーを吞んでい
る部屋にかけてあった。それを読んでいると

色紙を二枚用意されて、薫風さんと僕に渡さ
れた。薫風さんは、早速

太宰真似て頼杖をつく斜陽館

と書いてマジックペンを私に渡した。年令の
せいか、すぐに出ないのがこの頃の習慣にな
っている私は、太宰さんはこんな気持だった
ろうかと思つて旧作の

もの書きの妻叱られてしかられて

と書いて責を果たした。帰りの玄関で、支
配人らしい人と娘さんから丁寧にお礼を言わ
れたのには恐縮した。

それから十三湖へ足を伸ばして本日の終点
地、十三の砂山で下りた。砂山では二、三人
の人が石を拾っていた。私達も真似して石を
探したが良い石がなかった。津軽の唄にこの
砂山の砂がお米であつたという唄がある。
次男坊は「お米より砂金の方が」と言つと、
五楽庵さんは、お米と思うほど貧乏で飢えて
いたのだと説明した。そして青森空港へ、四
時二十分フライトの七五六便に間に合うよう
に、スピードをあげて走った。

かくして青森三日の旅は楽しく終った。

御案内下さつた甲吉さん初め皆々様有難う
ございました。

連絡船の二人へ千の後ろ指

栗

近畿文字放送作品募集

題「フルムーン」 橋高薫風選

3句 締切 11月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

同人吟

秀句鑑賞

前月号から

松川杜的

奥入瀬のそぞろ歩きはプレゼント

津守柳伸

奥入瀬の溪谷は歩いてこそ本当の美が味わえる。私も行った事がある。ガイドの好意でそのハイライトを歩いた。うれしいプレゼントだったのを思い出す。

黙禱へ今夜の献立考える

有働芳仙

「黙禱」という司会者の言葉で眼を閉じる、僅かの時間で長く感じるものである。ふと妄想が湧き、今夜の献立まで考え出した。人間臭さの滲む句。

よく喋る大工の釘を確かめる

玉置重人

話好きな大工、あんなに喋っててまともな仕事が出来るとどううか？家人の心配をうな顔に眼に浮かぶ。

枕辺の灯を妻が消す旅はよし

越智一水

フルムーンの旅か、老夫婦の満ち足りた雰囲気か漂う句。お互いに元気なうちにもっともつと旅をしておきたいものだ。

少年の耳にもどつた祭り笛

堀江正朗

作者を知っているだけにジーンと胸に来る。少年時代の夢が戻ってお祭の太鼓や笛が聞える。懐かしい思い出に感慨深げな温顔が彷彿と浮かぶ。

パン食が大和魂消してゆく

内芝登志代

パン食の是非は知らぬが、近頃の若者はパン食が好きなのうだ。一時は米食がとやかく言われたが、日本人には米が体に合っているのでは。「大和魂」とは面白い表現だ。

いい上司いたらアリにもなる私

田中叶

私自身も体験の覚えがある。サラリーマンにとっては実力ブラスいい上司に出逢えることが出世の近道。「アリにもなる私」とは言い得て妙。

職の無い靴もやつぱり減っている

松下たつみ

職を退いたからとて、のほほんと暮らしていは健康上にもよくない。昔のように晴耕雨読の境地でいることは許されない。実益と趣味を兼ねて大いに靴を減らして欲しいものだ。

素うどんと茶漬にたどり着くグルメ

西出楓楽

美食の限りを尽くして辿りつく心境。私達

年金の身ではとてもだが、素うどんと茶漬の味は最後にたどり着く味かも知れぬ。

洗濯に出せば喪服に用が出来

久家代仕男

よくあることだがその偶発性が面白い。

楷書の家庭に草書の子が育ち

稲田豊作

楷書と草書を対照的に詠んで成功した句と言える。

大臣が出てふるさとの喋りすぎ

高杉鬼遊

田中角栄さんを思い出す。出身地の県民はことごときに甘い汁を吸って来た。だが角栄地に落ちて今はそうはいかぬだろう。

指紋など残しておゆき花泥棒

石垣花子

朝起きてみるとあんなにきれいに咲いていた花が無い。誰かに盗られたらしい。腹立ちの感情を圧えておおらかに詠い上げた手腕が憎い。

ふんわりと浮きそう風船屋の屋台

高橋千万里

エレベーター貴方は肥満と言うブザリ

辻白溪子

幼稚園ピカソに勝る絵が並び

松本はるみ

毎日が本場所土俵のない土俵

清水一保

半跏思惟まねて迷いがとけるなら

奥田みつ子

水煙抄

黒川紫香選

鳥取県 小谷 美 千

いくさがすんで日が暮れた四畳半
愛の火をともしておんな母になる
風は秋少女笑顔でふりかえる
噂話は人形になり聞いている
うすもの下に乳房がふたつある

熊本市 宇 野 昭 代

街灯が切れたまんまで路の雨
二、三冊斜めに読んで出る本屋
買う物はないが売り出し見て廻る
満ち足りて女不倫に憧れる
目線追って行けばウインドの毛皮

尼崎市 児 玉 歌 子

もう別れ話をしてる夏帽子
傾いた心手の鳴る方を向く
寝付くまで母が動かす毛糸玉
フラッシュを盛んに浴びて貝になる
今に見て居れと雑巾掛けをする

岐阜市 金子 匠 果

和解する兆し夫婦の笑う声
名刹の鐘のひびきに諭される
もう一度必ず見たい海の彩
平凡な灯をかばいあう老いふたり
あとつぎはないが鉋を研ぎ澄ます

高槻市 笠 嶋 恵美子

豆はとろ火でおとことおんな煮詰まりぬ
長電話ぐらいで晴れる憂さならば
縄電車仲間はずれの子がひとり
滝を見る人のこころもさまざまに
羽ばたきなさい風がわたしを呼んでいる

熊本県 大 川 幸 子

セールの声を麻葉のように聞く
ぜいたくな愚痴だと思っぐちを聞く
今いちの切札がまだ見つからず
総菜屋で間に合わせてる料理下手
住みついた犬が我が家の顔でいる

熊本市 永田俊子

赤い待針で止めておく女の噂
釦がはずれている先生で親しまれ
よその時計が鳴っているよその幸せ
ゆつくりと話す口下手の真実
心の裏を知っている宝石の屈折

佐賀県 寺中三枝子

朝寒に青竹踏んでいる生命
すこし疲れてくると亡母似の顔になる
内緒ばなしがいちばん好きな鍵の穴
理想盛る白いお皿を子に譲る
指先のユズの香りが亡母を恋う

岐阜県 渡辺杏村

くつきりと水着のあとの相撲取
戦友の墓に向ってひとりごと
木枯しを避けていつもの縄のれん
菊薫る明治は肩身狭くなる
仲人もかけもちという大安日

八尾市 高杉千歩

辞書にない言葉ばかりに囲まれる
余生とは思わぬ戦後生きぬいて
茹卵そのまま三日の旅おわる
いらいらが一番毒と論される
お元気で夜寒むの街のうす情け

竹原市 信本博子

優しさが欲しくて海を訪れる

口笛を吹けど愛犬帰らない
サラタ記念日素直になってペンを取る
幸せが消えそうで目は閉じたまま
「悪いわね」と言つて友が旅に出る

富山市 舟渡杏花

じゃんけんに勝ち遠雷へ耳すます
妻の手が補習手間どる弱い骨
雲行きへ祝辞一行書き替える
矢面に立つて姐御の名に恥じず
胃カメラをついに呑んだと乱れ文字

長岡京市 木本如洲

街角に私を試す風が吹く
オクターブ下げてカナリヤ反戦歌
七癖に触れると無口な父でいる
名物のみやげを買い戻す駅が無い
計略の裏に踊っているピエロ

高槻市 河瀬芳子

こみあげる喜びの中釘を打つ
本当にほんとでしようねお月様
登らせておいて足場を外される
握りしめた拳へ遠いうろこ雲
友達の輪にとっぷりという孤独

名古屋 藤井高子

亡夫^{おとこ}恋いの燃ゆる炎が彼岸花
鶴折^{つるま}つて呉れて他人も温かし
明日などとは思っても見ぬ紙コップ

正札をはずして二度の首売りに
「人間」を続ける薬呑んでます

今治市

野村京子

加速つけるまでは手を貸す子の船出

美しい造花がほこりばかり吸い

数珠外す尼僧に甘い女の香

花街でばんやり憩う昼の月

満ち足りてつけ忘れてた泣きぼくろ

広島市

流奈美子

草いちご少女の影が見当らぬ

善人が手折って飾るかすみ草

すぐ熱しすぐ冷め浅い器です

向日葵も例外があり陽に伏せる

お見事のおだてに乗った一気呑み

守口市

森川まさお

味噌汁が旨い門前町のめし

骨欠けた団扇が置いてある茶店

枝払いすると近所の子が覗き

ものさしが出てくる打たれた思い出も

パーティーで話した一人がえらい人

滋賀県

久保和友

苦学した頃は徳川邸の裏

無職だから酒は二級で暑氣払い

沢蟹のから揚げ秘湯の膳に出る

有耶無耶な返事が返るいわし雲

秋夜長向田邦子を読み返す

久留米市 鶴久 百万両

子を残して死ねぬ女の修羅をみる

車間距離あけたデートは楽しいか

今回は注意にとどめおく違反

お隣の睦言壁を縫うてくる

戦争は終わったことになる離婚

大阪市

上田柳影

何もかも忘れて妻と秋の酒

百日紅すこし裸になりすぎる

眼鏡拭き娘の暗示きき直す

極楽へ行きやと淡く頬紅を

君注意したまえ豆腐にも角がある

吹田市

井上照子

天職と靴すり減らすことに馴れ

幸せをかみしめ鍋の蓋みがく

どん底で友のぬくさに包まれる

二度の職足の痛みは伏せておく

サヨナラの手に愛こめて曲り角

静岡市

蘭田 蓼 沓

希にいる泳ぎの下手な蛙の子

再婚のドレスやつぱり白を着る

流れ星一人ぼつんと旅の宿

仲居さん一人が違う方言で

何もかもあるのにハンバーグしか食わぬ子よ

京都市

木村 たけし

ライバルとルールはさんで闘志湧く

酸欠の部屋に頑固な皿がある
よい返事母の畳は落ちつけず
友だちは皆ライバルさ棒グラフ

京都市 松川芳子

百貨店八十五歳まだ女
魚屋に名前呼ばれて買わされる
フランスパン焼いて情熱通わせる
掌の内で泳ぎ上手な夫の智恵

羽曳野市 吉川寿美

人肌を恋い群集の中に居る
道連れといつかははぐれるちぎれ雲
その一言がほしいと思う鱗雲
入道雲おんなを虜にしてしまふ

鳥取県 土橋はるお

綱引きは大根足の方が強い
引き出しを開けると波の立つ写真
嫁さんが猫の尻っぽを踏んだ声
ポックリと死んでみんなを困らせる

吹田市 栗谷春子

古いカン切り探して山へ持って行く
ついて行く私のような雲もあり
ひと言を訊き洩らした通夜の耳
ああ同居働くことが好きになり

大阪市 島路太郎

老兵の夢に出てくる草枕
上を向いて歩こう月が美しい

分校の生徒一人にそばの花
リフォームでおしゃれ美術の秋ですね

堺市 桜沢あかり

赤とんぼ行き交う過疎の黍畠
抱き癖がついたコアラの縫いぐるみ
たこやきのおばさん鼻に丸い汗
ロボットの部品を替える休日

東予市 小山悠泉

母捨てた父を憎んで少女A
小さくとも愛の証となるタイヤ
知床の旅情岬の海が吠え
チャー飯にする人蔘の微塵切り

尼崎市 新井泰子

散水が蟬のねむりをさまたげる
言い訳を連ねた手紙出せぬまま
カードは便利彼女の電話が終らない
夜半ひとり階上の時計が時を打つ

滋賀県 安田志津

振りむけば合掌されてる野の仏
煙たい人の居ない自由が物足りず
心盛る器の色を考える
こぜわしくなつて来ました蟻の群

米子市 新正子

出合う人皆会釈して田舎道
髪染めたことは知らない影ぼうし
休日は目ざましよりも早い朝

職退けば杭打つ人もなつかしい

米子市

小村 てい子

白い御飯を話題にしては呆けて来る

花嫁を包むドレスが白すぎる

真実を見つめて肩の力抜く

笑いたい時に笑って姦しい

熊本県

高野 宵草

癌という言葉が怖い医者嫌い

クラーを効かせて布団かけて寝る

盲目の恋を吾が子に見せられる

働いて満足をしてすぐ寝つき

出雲市

金村 青湖

ひたすらに愛することに決めて秋

残暑なおケヤキの葉刈る暇があり

海の家解かれて秋が降りて来る

ふるさとを忘れたわけでない彼岸

西宮市

松本 一郎

思い出を一杯つめて孫の夏

辞書を繰り贅沢の意味確かめる

ふとすます耳に軍靴の音がする

何時までも無邪気な孫でいてほしい

唐津市

相葉 あき

肩張って諭吉が通るドルの道

ボートスを狙う商社の五色刷り

争いの相手も孫という暮し

盆に来るあの世の人が多く来る

鳥取県

黒田 くに子

今日もまたピエロのままの夕暮れに

祝盃の夫婦ダルマへ背を向ける

野に咲いた花は素直に生きている

写されてはにかむ方が男とか

過疎駅に降り立つ足へ虫の声

どことなく寸法合わぬ鯨尺

相槌が上手で何も彼もしゃべり

無口でも金屏風のような人

好きにだけ飲めと女房荒れ模様

お手植は土を三べんかけるだけ

せないが待つと腹たつレストラン

おじぎするよい子悪い子知らない子

善人が撞く鐘の音は冴えて来る

余所さまの火事を屋根から見る男

先輩は何時もお金を持ってない

丸太橋渡る気らしい下駄を脱ぐ

妙案が喉まで来てる煙草の輪

水すまし涼風にのり輪を移す

あたたためて居た名台詞出しそびれ

百日紅水子の寺をくれないに

西宮市

秋元 てる

妙案が喉まで来てる煙草の輪

水すまし涼風にのり輪を移す

あたたためて居た名台詞出しそびれ

枚方市

中山 おさむ

生真面目なジョークに遊ぶ老夫婦

土曜日の背広働き過ぎらしい

忘れてはくれぬ税務署から葉書

まだ使える顔が参与の席にいる

和歌山市

田中輝子

忘れたい事あり梅酒飲んで眠る

想い出へ一度は言おうありがとう

ラブソング流すレコード針が減り

水替えてやれと金魚を庇て去に

和歌山市

森茜

ワンマンのため息ふつと聞いてビル

執念を光らせているくすり指

神さまに叱られそうな内緒ごと

クラシックちよつとひねって演歌調

熊本市

黒田緑

自らの採点をして拍子抜け

あとさきの順序ちがえたぎこちなさ

声聞かぬ時何となく耳ほじる

つまりば引きずる過去が背に重い

尼崎市

鈴木良征

侍の意地が楊子を離さない

糠袋つかう米寿の肌の艶

襟足のほくろ知っている枕

人間の嘘を流しているシャボン

熊本市

北川一進

山登り背負うリユックにある重さ

兎とびじいちゃん見てと孫の声

酔う中に調子くずれが持つマイク

どちらからともなく折れる電話口

静岡市 諏訪志げ

宿題を手分け安堵の夏終り

母さんの声が大きい夏休み

前掛けに隠して祖母がくれた金

無防備な欠伸が出来る一人部屋

守口市 結城君子

逆流を企んでいる川もあり

天道虫童話のおわり思いつく

あれこれと亡兄思い出す旅写真

保険満期大手を振って旅に出る

竹原市 古田比呂子

夏越した金魚すくいの金魚たち

口紅の色変えさせる季節風

悪あがきしてる姿に気がつかず

おむすびをむすぶ微妙な手の動き

旭川市 朝倉大柏

モナリザの微笑くらはは妻にある

裏切った男のシャツを洗ってる

ロボットのような会釈で迎えられる

螺旋階段の途中でユーモアと知り

大阪市 山田妙子

青春と裕ちゃん散って夏終る

親離れし過ぎて部屋が広すぎる

まんじゅしゃげむかし昔を連れて来る(山の家)
こんなにも大きかったか山の月

静岡県 中川みつ

田舎街噂き出す喫茶店
五分五分の地位で互いに助け合い
破れても暖簾が重い屋台骨
お買得あと何名と客を呼ぶ

貝塚市 池田寿美子

欲望があつて愉しい日々となる
一生を借家に暮れて旅に出る
新製品財布の紐がゆるみ出す
鞍馬路に錦繡運ぶ風の彩

尼崎市 木下義嗣

年金で暮す夫婦でねたまれる
菊薫る喜寿金婚の祝い酒
暗やみに花火線香の孫の顔
新築の窓から見える十字星

熊本市 岩切康子

夫病気頭の中が倍になる
閑散と図書館の壁脳冷やす
大空へ棚を付けたり架橋工
慌てん坊書き間違えた悔いの汗

尼崎市 尾宮弘治

天国の星がきれいな露天風呂
追うて来る夕立雲にバスが混む
野沢菜の色にお茶漬けそそられる

お師匠さんのお尻に続く盆踊り

広島県 田村新造

河鹿鳴き秋がしたたる山の駅
幽霊でお盆に上げる視聴率
ホルト締め百年の夢瀬戸跨ぐ
火の色をときどき覗くのぼり窯

尼崎市 吉永伊三郎

世渡りが下手でコーヒーいつも冷め
手袋を脱いだ女に迫られる
茶柱へ疲れた夫婦顔を寄せ
人妻を待てば疲れる花時計

田辺市 染道佳明

うちの子がリレーに出ます運動会
流行を着せて案山子の出世顔
おしゃべりな妻にポケットベル持たす
さようならは遺書だけのことにする

唐津市 菊地香代子

一瞬の沈黙女のコンピューター
ミニカーで通う出店にある生活
グルメとは釣ったその場で食べる鰻

出雲市 金森知恵子

母へ書く便りはまるとい言葉選る
秋生ける空蟬つけたままの萩
病人へ所用で寄ったことにする

寝屋川市 太田藍子

空席を譲り合つてる間に取られ

お持たせのカステラだから厚く切り
故郷の秋が皿からこぼれそう

岡山県 清水 悠貴女

秋風へどこまで転ぶ夏帽子

乾き切れぬ炎と知るや帯の芯

目の高さ変えると少し広い視野

八尾市 椎 尾 公子

京は良し古き家並みの灯がとる

伴せなお家のうわさ夜の膳

嘘のない児に育つて笑う顔

尼崎市 的 場 十四郎

好きだけ飲んで狸の独りごと

凡人に知恵をつけてる紙芝居

秋の風旅のチラシが誘い出す

堺市 宮 本 かりん

亀さんに添うてようやく山を越え

メーカーの宣伝マンをしてる服

税金をのがれる土地が耕され

寝屋川市 宮 崎 菜 月

持山の巨石又一つ消えている

名水といわれポンプの絶えぬ音

お土産は何がよいかと買って来ず

鳥取県 太 田 幸 枝

法の裁きより他人の噂におびえてる

代筆で意の通じないラブレター

ふる里を恋うて風鈴まだ喋る

横臥した裸婦のごとくに砂丘あり
鳥取市 山之内 洋

浜風に匂う女の朝の声

砂が鳴る乙女のように戯れる

兵庫県 森 脇 和 子

雨も好き紫も好き人を恋う

頼杖の窓へ戸惑う昼の月

神の鈴大きく振って頼みます

鳥取県 乾 隆 風

亡母の体重より棺桶が重い

電光石火こいつ短気な雷だ

味噌汁がうまくて三杯も吸うた

福岡市 吉 川 一 郎

縄電車寂しがり屋が前うしろ

旅行けば風とわたしは軽い恋

老いの船繋ぐ港の灯が暗い

熊本市 鶴 田 謹 爾

湯気の立つ程に怒って後で悔い

愚かなり山を愛して山に死し

マナイタの音は警報発令中

尼崎市 中 澤 向 西

やっこ風読んで感激又笑い

葉先まで動いて尺取思案する

山門に彼岸法要はつてある

礼服の紋の居場所が見付からず
藤井寺市 高 田 美代子

負けず嫌いの手にも足にもまめが出来
天井の海老のしつぽがまた騙す

河内長野市

植村 茂代

うちよりも綺麗なポット捨ててあり

留守番が長電話して通じない

娘がはたち同級生の嫁ぐ声

岡山市

千原理 恵

何事もなかった事にして寡黙

餌だけは食べてのら猫なつかない

お手々つなぐと赤い靴欲しくなる

伊丹市

小熊 江美

嘘ついた児が二階から下りてこず

駅前でマイクが神を説いている

身勝手な時だけ老いを誇張する

倉敷市

田辺 炎六

意地悪はされてもしない孫が好き

弱い者いじめに恩を売ってくる

地震予知鯨の髭を褒めておく

鳥取県

田村 きみ子

庭石を猫トントンと走り出し

曼珠沙華オランダ坂に植えましょか

コーヒーで今日のいくさを企てる

寝屋川市

井上 すみれ

叱られる孫よつらいつらいしらんぷり

ばつばつと秋刀魚に飽きて秋深し

煩惱は生きる証しと和尚宣う

新発田市 上鈴木 春枝

アルバムに貼ってはならぬ写真抱く

持ち歌のひとつが先に唄われる

早起きをして朝刊がまだ来ない

豊中市 玉井 房子

此の街も又この街も夾竹桃

父を越え父の置かない髭をおく

十六夜の月に覗かれタオルかけ

広島県 森川 抜智

犬の残飯へ雀の軍団食べに来た

今日帰る事だけ告げて電話切り

すごくという言葉がすごく気にかかり

豊中市 三宅 つえ子

車椅子遠くの友が消えてゆく

又電話しますが声の聞きおさめ

下町でひっそり暮らし夢をみる

岡山県 後安 江山

鐘が鳴る鳴るお盆参りの足しげく

雑草の中の野菊にふと慕情

夫の愚痴言える倅せだつてある

鳥取県 西川 和子

デートです靴を磨いて出かけます

くしゃみなどではおれない歯の治療

くたびれ儲けだけど動かずにはいられない

八尾市 鷺見 章

石仏水子に赤の毛糸帽

酩酊の法事の僧を助手席に
看板は右書にしてルナパーク（天王寺博）

大阪市 今 西 静 子

どう見ても夫婦ではない二人連れ

御仏の頬のあたりに堂明り

ゴキブリが妻の奇声にうろたえる

堺市 山 本 半 銭

三人になって二階へ帰って来

漬物がやつと出来たと娘の便り

豊作の稲穂が重い闇となる

大阪市 吐 田 純 子

秋の日の沈みへ急ぐ市場籠

肩の荷をおろして余生組みかえる

郵便受今日も待ってる娘の便り

青森県 永 沢 弘 志

神隠しにでもあったよう妻は逝き

おみくじに心に絡む文字がある

送り絵の津軽のねぶた血が踊る

今治市 渡 邊 伊 津 志

不合理な努力を強いる勝ち戦

コツコツと律義に刻む古時計

香水が匂う調書を取る婦警

青森県 福 士 ト キ

笑ったり泣いたり故郷の囲炉裏端
何時までも生きてて欲しい母の肩

カラコロと昔懐し盆の下駄

高槻市 芦 田 静 江

生々庵先生の碑

句碑に佇つ浮草しずか酒かおる

又来年咲かすつもりの花の種

離婚するアラアの神の無責任

兵庫県 奥 野 テ ル

雑草の強さが欲しい子の育ち

年輪が持ち合わせてる知恵袋

古日記乏しき亡母の生活史

佐賀市 石 田 源 吾

自分では命が惜しい殺人鬼

着任の弁は静かな町とほめ

いざという時はやっぱり男の子

河内長野市 大 西 文 次

よんどころない事情あり丸坊主

もうあかんのも二次会について来る

鈍感のようで女に手が早い

岡山県 後 安 ふ さ え

夏休み孫で賑う隠居部屋

逃げまわるホシを必死になって追う

こぼれ種畑の角でよく育ち

京都市 小 林 英 子

一休に負けぬ恋など喜寿に賭け（一休狂雲集より）
扇風機の風と添寝の熱帯夜

木屋の香に魅せられた廻り道

岡山県 土居 ひでの

老母あさんの呪文は何時もありがたや

小春日の情けは土がよくしゃべり

さりげなく罪着る者が居て和み

呉市 蔵 重 成人

娘が選ぶネクタイ父は老いてない

別件の逮捕狙いは近くなる

塾に行くノートはきれいに書いてある

静岡市 安 本 孝 平

犠牲打を放ち仲間に騙される

主張した後で空虚な風にあう

半眼を閉じて機を待つ苦労症

大阪市 亀 井 円 女

雑草はふまれた靴をすぐ忘れ

嫁姑たたかい疲れて本音出し

口だけはみんな達者なクラス会

高松市 竹 川 憲 一

雨かしらいそいそ女聞きに立ち

発車ベル待つ一時の中だるみ

赤い緒の下駄嬉しがる子と踊りの輪

弘前市 真 喜 内 實

豊作にするぞと残暑つづいてる

耳よりな話に老いが迷ってる

次の雨忘れた傘を思い出す

児の虫歯いたみ家中落ちつかず 鳥取県 津 村 八重子

学芸会馬の足にもある主張

つまんでも鼻はやっぱり低かった

富田林市 大 澤 三四子

ちぎれ雲どこで吹くやら秋の風

秋風が食べて目もりをうならせる

ひいきする役者なくとも顔見世に

愛媛県 八 塚 三五島

凡人にするのに座禅十余年

強運がくるとコンピュータいわく

一万歩越さぬが不満万歩計

黒石市 相 馬 英 三

朝雀週休二日を訴える

クラス会飲んで唄って減って行く

新聞で鼻をかんでる米寿かな

愛婚県 西 山 えつ美

サイレンが鳴るとガス栓気にかかり

トラクター使える嫁でたよられる

かわいくて食べるにおいしいミニ野菜

静岡市 沢 田 き 人

方言が時に飛び出す嫁の里

叱られて一理持つ子の口答え

まだ足は達者で動く事が好き

岸和田市 三 輪 通 彦

ゴキブリの方がよく知る台所
腕白が寝てくれ茶の間ホッとする
今日だけは大事にされる敬老日

京都市 山脇正之

気休めと知りつつ血圧腕を出す
通夜の席羨ましいとこぼす老い
老眼鏡さがしてる間に句が消える

静岡市 杉山やす

節水をしたいが花は水を待ち
愚痴だけは吸ってくれない換気扇
三猿のくらしの中で生きてゆく

静岡市 柳沢たま

貴方という添木にもたれ八十路過ぎ
家のことやっぱり他人に頼めない
大胆に脱いだ背中に灸の跡

鳥取県 山根八重

日に焼けたカーテン残暑に耐えている
蟋蟀が読書しろしろ夜を鳴く
補聴器にみんな聞かれて腹がたつ

尼崎市 佐藤美代子

お地藏さん疎開させられ淋しそう
やんわりと釘をさされた力味すぎ
涼風に樟脳ただようバスの中

岡山県 松本元江

善積んで来世の夢等見ておこう

諸行無情の鐘が鳴るのは秋の暮
孫を抱く腕が時々弱音吐く

佐賀市 古川一徳

自分史にこころの満たぬ三八銃
熱心に子のない言訳花の芯
言い訳をするから少しは脈がある

青森県 波ただお

秋虫の合唱へタクト振ってやる
昨日の分も書いている日記帖
石地藏トンボが一匹画のようだ

弘前市 小寺ギホウ

玄関を出てから男の顔となる
長男よ早くおいらを楽させろ
学力は伸びずに体重だけが増え

高槻市 津田スミ子

受話機から夏バテの声聞こえ来る
留守番にお土産が来て盆終る
脛かじる子が持っている貯金帳

静岡市 浅子まつゑ

全身に汗を流して今日も生き
台風の子報テレビと夜もすがら
花の苗貰って鉢を買いに行く

熊本県 石本 幟

就職が決って親も胸なでる
毎日を茶話出来る友の居り

万歩計東京土産に孫が呉れ

十和田市

阿部

進

割烹着つけば弾む妻の腕

胃ぐすりを飲んで出掛ける披露宴

マイカーに慣れて脚から老いている

鳥取県

乾

喜与志

素敵なママを見つけたパパに感謝する

肩こりへ孫の拳がとんでくる

駅弁で一杯汽車が揺れている

岡山県

中

嶋

千恵子

あの返事せぬまま今日の日も暮れて

六十路来て働き蜂の薄化粧

福耳で良いことだけに乗ってやり

豊中市

小

林

一夫

傘さしてくれたことだけ覚えけり

箸を持つ手の美しき育ちなり

この坂を登ればきつと海がある

吹田市

西

岡

豊

よく喋る女を諭す山椒の実

路地裏の笑顔が好きで根をおろす

暮参り済んで豪華な宿の膳

鳥取県

鈴

木

ふみ子

汽車だいて裸の王子夢を見る

返し縫いしても腕白はこぼる

父と子のキャッチボールに陽が笑う

秋が来て捨てた女が目に見え

秋茄子を嫁に食わせてもらいけり

女には女の意地のつむじ風

静岡市

三

浦

つ

ね

ピーポーが来て野次馬が倍になる

塩漬のラッキョあたちの香をさらう

風鈴よ只今病室安静中

岡山県

福

原

悦

子

かぶりつく西瓜と笑う大家族

大器晩成脈はなくとも信じよう

土の温み受けて歩んだ夫婦の詩

島根県

喜

島

ノ

ブ

其の落葉私の姿かも知れぬ

茶仲間に成りたいようなお月さま

馬鈴薯はあの太陽の落し子よ

出雲市

高

橋

きよし

雲の上飛んで宇宙はこんなところ

片カナは読めても意味は通じない

大阪市

榎

本

路

児

橋筋はブラリブラリと歩く街

爪楊枝フランス料理であろうとも

米子市

大

田

みさと

靴ずれがなおった頃に又会おう

善人になりたくてただ掌を合わす

佐賀県 山口松枝
寄附をした地藏祭りに煮豆買
むつかしい話あしたにしてねむる

竹原市 古田太虚

気に入りの古墨は小さな蘭を描く
久遠寺の門前で妻の数珠を買う

和歌山市 丸岩晏

役職についた女の胸太り
ころろ足る日は古里が近くなり

奈良市 米田恭昌

口裏を合わせてくれる友が居る
逆算をしてもやっぱり赤字です

泉南市 坂根流水

頑固だと五十のむすこ苦笑する
敬老日市役所だけがものくれる

大阪市 川原章久

強くなる女が受ける向い風
向う岸矢鱈目につく彼岸花

山口県 高崎雀声

円高の旅行に資料だけたまる
帰宅の子塾に急がす母の声

吹田市 木原絹

水墨のすすきが似合うきりぎりす
立ち話わたしの背に矢がささる

出雲市 久谷まこと

子の自由見栄でからめる七五三
年寄りの機嫌を直す嘘少し

鳥取市 山田草人

ちび筆を洗って明日の画想練る
補聴器はかげ口ばかり聞いてます

大阪市 柏木八重子

コスモスの一輪さして無人駅
秋刀魚やく夜まで香い残ってる

熊本県 立道善太郎

溜飲を捨てに静かな森に入る
虫干しに二人で泣いた闘病記

岡山県 伏見すみれ

娘の集いとも思われぬビールびん
宝石はいらない母の大きな手

静岡県 片平静代

正直に言ってしまった子を叱り
なすの出来十坪農園食べ切れず

高石市 宮田純一

ふるさとを愛した父の墓の苔
別居中あなたの改心待ってます

羽曳野市 麻野幽玄

遠来の孫ばかりを蚊がねらい
こおろぎが鳴き宿題をせかされる

泉佐野市 真崎浪速子

針の手を休めぬ母に秋祭り

貫録がとぼけてみせるのも総理

西宮市 上 嶋 ふさ子

争いを知らない母のかっぱう着
上司との争う碁盤の白と黒

愛媛県 石 手 武

誰かさんに似てるとぼけたこけし棚
同僚に雨が降るぞと冷やかされ

島根県 菅 田 かつ子

すらすらと読めぬ字を書く医者 of ペン
一〇〇坪をキャッシュで買った夢を見た

八戸市 島 田 昭 治

政治にも欲し甲子園のひたむきさ
肩書きがとれて目方が増えてくる

鳥取県 木 下 芙 葉

再婚はしたが苦勞の種でした
老う年の灼熱の愛に耐えられず

流山市 神 田 治

なめてみたら赤く燃えてるリトマス紙
仮面取れば誰も背中はサロンパス

鳥取県 久 野 野 草

許された独酌だから自重する
髪を染め鏡に歳を問うてみる

静岡市 大 石 た き

夏の夜老いても好きな盆踊り
いい事があって一日飯うまい

檀原市 西 本 保 夫

正論を押す妻若さまだ残す
成りゆきを確かめてみる電話口

岡山県 江 口 有一朗

白雲をふところに抱く水溜り
草踏めば露に宿った月が散る

佐賀市 江 口 万 亀子

ニワトリに言うてはならぬ卵の値
組板の音ではじまる母の朝

新潟県 高 野 不 二

外国のビル買う金をへそくりし
結局は記念切手を貼って出す

和歌山県 北 山 凡 太

老いらくの恋は楽しい寺社参り
転んでも泣かずに起きる子が可愛い

富田林市 加 藤 ミツエ

病臥の良人の目と目手話の指
仏前で亡夫と語る一人言

兵庫県 円 増 貞 子

味をほめ手間まで気づかぬ栗ごはん
すぐ席を外せる位置にかしこまり

静岡市 久 保 き ぬ

再職に髭が邪魔する職安所
ネクタイと別れ気儘な足の音

川西市 田 中 喜 俊

ブレーボールで見事に打った本塁打
雑草とみくびった花に学名あり

唐津市 野田 旭 恒
セールスマンがたびしの戸でもサツと開け
励ます会励ます方がダウンする

岡山県 杉本 伊久栄
追憶を秘めた日記のページ繰り
初心者のマーク目を引く事故現場

藤井寺市 菊地 繁 夫
リハビリの女医の叱咤は容赦なく
切りつけてサンマの片身明日へ持ち

島根県 小田川 智重子
夏終りもとの二人に戻る部屋
あほな事言うてる長距離電話でサ

静岡市 西村 千代
老眼鏡かけて地球儀廻して見
不況風一度にドツと首になり

奈良県 和田 萬里
一度でいい威張ってみたい夫の前
葎の花少女の如く背くらべ

久留米市 中垣 米之
古葉サンよアンタは巨人の太鼓持ち
人間をときにはやめたい痔の痛み

静岡市 青柳 金吾
身に憶えあるから胸がつまされる

丁シャツを着ると背筋がピンとする

唐津市 浜本 治幸
カラオケは一つ覚えの唄ばかり
むなしさが残るばかりの愚痴の酒

唐津市 入江 崑久夫
独り身の気楽さ病みて不自由し
松浦渇雲のきれ間に雁の声

唐津市 福島 紀一
ビール二本飲んでも終えぬ巨神戦
お騒がせ万智ちゃんだけが太うつし(短歌界)

静岡市 谷 紀代志
濁る海水平線の雲見えす
団扇風互いに送る歳となり

静岡市 丹羽 定次
ふり向かずさっぱりしてる別れ道
台風は予報の通り上陸す

岡山県 富坂 志重
明日を見るめがね丸く丸くふき
客送り静かな心傘をほす

大阪市 堀口 欣一
敗戦の朝をカラコロ日和下駄
弁当をたべるとなりのあほらしさ

鳥取県 西浦 小鹿
白いシャツ干してドラマの昼さがり
この石をミケランジェロも刻んでいた

和歌山県 田中隆積

忍の字を部屋いっぱい書く四十
まな板の鯉でも新人意地を見せ

大阪府 富岡温子

初物へ足音軽い市場籠

明日又いい日子供の寝顔みる

島根県 松本聖子

給わるものみなありがたし敬老の
孫の顔うかべ初物送り出し

島根県 坂本雪路

歩く事まだ負けないと朝の道

風が出たらし池の水さわぐ

島根県 岩田三和

ふるさとの味は素朴でいいんです

あどけない顔にもどした優勝旗

東大阪府 大平太一郎

軽く見た相手に負けて気が重い

嵯峨野にも秋の訪れ色を増し

新宮市 船越正

カタカナで退院すればJR

亡父に似た患者を背なに退院し

大阪府 平井露芳

経済大国坪一億で土地が売れ

バカチョンも空と雲とがよく写り

静岡市 滝花喜平

過疎の里バスは空気を詰めて行く
正直に物を見すぎて穴に落ち

島根県 今川三津江

旧暦の雨の多さも古老から
残飯へいつものように猫を呼ぶ

奈良県 渡部トキワ

新涼で目覚めさわやか今朝の顔

風鈴をさわやかに聞く秋の宵

奈良市 井上大

鮎釣りの車を縫うて出勤す
雨の葬送超元老と超スター

岡山県 平田たけよ

入歯カチカチ余生の音になる

銀杏の落葉地に舞う武蔵塚

島根県 児玉幸子

夏は近く折柄蟬の大合唱

柿の木にぶらりと下がるへちまの実

和歌山県 森三枝子

バーゲン日爺さんも一つ買わされる

遍路笠歩くと歴史しやべり出す(四国巡り)

呉市 岡田寿美礼

ゆかた着て花火見にゆく孫さけい

針箱の整理こまごま母偲び

大阪府 喜多佐津乃

こだわりも消えて夫婦の銀婚式

片隅にふと心行く合歡の花

摂津市 望月 かずこ

人生の峠を越して焦り出す

アパートもマンションと言う名に変身

豊中市 額田 明吉

生きがいと安らか孫の寝息聞き

甲子園勝者敗者も玉の汗

青森市 三木野 玄哉

一足す二三にさせない政治力

大阪市 朝田 晃世

朝顔が暑さを過ぎて咲きはこる

◆ジュニアの部

枚方市 二宮 摂子

窓の外季節のたびに色変えて

葉っぱたちそろそろ赤く頬そめて

尼崎市 新井 朋子
(中二)

お買得天然クーラー山の中

汽車の窓景色が変わり人変わる

枚方市 二宮 正彦

同そう会ひさしぶりの友達に

夏休みクラブだけの日々だった

尼崎市 新井 晶子
(小四)

ろてんぶろおゆがポカポカわいてたよ

立山で雪をさわってやけどした

第2回 国民文化祭・熊本

文芸大会川柳部門入賞作品

文部大臣奨励賞

島根

長谷川 博子

白い皿笑顔が透けるまで洗う

国民文化祭実行委員会会長賞

這い上がる手に一冊の本がある

宮崎

有田 日向坊

熊本県賞

櫓山に住んで一人の盆踊り

第2回国民文化祭・熊本 文芸大会賞

火を焚けば喊声上げる兵馬俑

佐賀

久保 正敏

菊池市議会議長賞

埼玉

塩谷 久星

点字読む指に心の灯を消さず

菊池市長賞

兵庫

かなもりかずえ

夕鶴に逢った笑顔はほんものだ

菊池市教育長賞

福岡

鷹野 青鳥

夜の抜毛ひと筋 秋は堀辰雄

◇秀作入選句(川柳塔社関係)

火を抱いたことを羞じらう花の芯

富山

油木 祥子

楷書から行書世間が見えてくる

山口

安平次弘道

人赦すその手で罪は数えまい

岡山

清水悠貴女

愛染帖

橘高薫風選

青森市 工藤 甲吉

漆黒の海に漁火銀座浮く
読むほどに光源氏はスーパーマン

茅ヶ崎市 山上 元孝

家付きと釣書に書いてみたくなる
薪能驟雨も演出然として

岡山県 土居 耕花

じんわりと効いて下さいボックリ寺
続け字の遺言状がもめている

今治市 矢野 佳雲

不良図書館で捨てたる父なるぞ
すりこぎの柄がどこまでかまだ知らず

大阪市 渡部 さと美

子等はゆくテレビも大切な家族
陰日向陰のおもしろさに魅かれ

倉吉市 田中 八太朗

この世には未練が残る酒がある
ホロ酔いでトロリトロリと逝きたいな

大阪市 島路 太郎

関取をおろしタクシーはとする
補聴器に聞く波音に夢がある

鳥取県 新家 完司

今朝もまた開演のベル鳴りひびく
仕事ではうまくお辞儀ができるのに

弘前市 斉藤 嘉

青年いたん案山子も肩バット
アメリカ米きつと雀も振り向かぬ

和歌山市 堀端 三男

格天井上げる背は隙だらけ
峠越す度に味方が増えてゆく

川崎市 古賀 絹子

屋久杉の年輪が泣く応接間

野良猫一人間なんぞ当てにせず

寝屋川市 岸野 あやめ

フルムーン酒量も飯も妻に負け
フルムーン素直な妻のふりをする

兵庫県 脇田 米朝

百聞は一見にしかず万歩計
古傷に触れて同窓盛り上がり

枚方市 宮川 珠笑

いつからか仮面が顔になっていた

和歌山市 神平 狂虎

旅の終りで男の真似をしてみよう

岡山県 灰原 泰子

廃坑の耳底で鳴る始業ベル

米子市 青戸 田鶴

大笑いしてから花は散つてゆく

米子市 八木 千代

秋風に鳴る風鈴はつらからう

出雲市 板垣 夢酔

逢つて来た火照りは酒の酔いに似る

和歌山市 青枝 鉄治

地上げ屋の汚れた金でまつりごと

唐津市 仁部 四郎

雑用をさせて測つた忠誠度

大阪市 大塚 節子

饒舌な心の装がかくれてる

河内長野市 植村 毘代

背が伸びて嬉しい妹また悔しい姉

笠岡市 木山 遠二

寝たきりの顔を毎朝猫が舐め

豊中市 田中正坊

伊丹市 樫谷 寿馬

敬老の日に百才の性語る

大阪府 亀井 円女

愛犬は私を犬と思つてゐる

尼崎市 春城 武庫坊

夕焼けの赤から祖母と父が来る

秋の夜の睡眠薬と消化剤

遠景に黒い斜線がひいてある

鳥取県 江原 とみお

殺象と俺とくらべているらしい

和歌山市 西山 幸

自衛することばかりなり栗の毬

米子市 川上 より子

木偶人形に風のしみ入る傷がある

先がけて小さき草の秋化粧

シーソーのどうやら斜面に座している

唐津市 田口 虹汀

朝顔へそつと着せたい糸の羽織

傘寿なお家族会議の司会する

波郷忌や薔薇白椿沙羅の花

鳥取県

夕焼けに莞爾と母が立っている

今治市

観光にだけ残った地引網

島根県

正座してわれにあやまち多かりし

奈良市

秋近し焦眉となった太い眉

唐津市

休診の札が権利を主張する

静岡市

飲み食えのお世辞で過ぎる敬老日

富田林市

虫干に亡母が立っている鮫小紋

岡山県

悠然とまた競競と今日を生き

江口

フルムーンつっけんどんな愛を知る

奈良市

ちよくちよくと聞かせてその気にさせる妻

吹田市

枯れ桔梗あわれや小野小町かと

鳥取県

朽ちた權枕の中をゆきさする

和歌山市

山肌をあため秋の陽の愁い

富田林市

遠吠えの心理ひしひし夜のしじま

米子市

秋淋し絹の服でも着てみよう

政岡

日枝子

輝きを失いそうになるグイヤ

富田林市

窓際の椅子にも馴れて雲を見る

宝塚市

きっかけを探して喋りつづけている

羽曳野市

朝顔の種夏の日をたぐり寄せ

吹田市

菊人形写真の姑はまだ若し

西宮市

天辺へ上げられ梯子はずされる

和歌山市

別納の葉書に並ぶ美辞麗句

海南市

よく喋るラジオ記憶につながらぬ

羽曳野市

秋風がむぎわら帽の破れから

寝屋川市

墨染の尼僧と知れる小さい耳

和歌山市

狼煙なら味方うろたえさせぬよう

和歌山市

竿灯は大きく揺れて風に勝つ

茨木市

ミス農協いなか嫌いとは言えませず

唐津市

名月が酒を飲ませてくれにけり

長岡京市

働いた汗は都会を詩にする

唐津市

福島紀一

台風にへちま満身創痍なり

福岡市

ゆつたりと各停窓の風景画

唐津市

ダイエットにカボチャがいいと子が教え

西宮市

背伸びして過ごした日々の空々し

和歌山市

会いたくて亡父のサンダルはいてみる

米子市

雪切る傘の雫を浴びにけり

米子市

かけるより貰う電話をなつかしむ

堺市市

秋の風十二神将だんまりで

大阪市

熱帯夜つづきに月が冴えて来る

今治市

終幕の舞台装置を考える

広島県

鳥賊干した家で民宿すぐわり

大阪市

姥捨ての話が残る富める国

大阪市

手を切った酒と女の向う岸

大分県

陽の当る土が一番いい答

岡山県

川の名も橋の名もない里の空

米子市

三軍を叱咤してきた腰を病む

米子市

吉川一郎

菊地香代子

松本一郎

木本朱夏

林荒介

あかり

良江

松尾柳右子

山田宝保

田村新造

榊本路児

川原章久

土居ひでの

茂理高代

小西雄々

名古屋

越村 桔梢

善人といわれて死んで物足りぬ

瀬尾 六郎太

橋架かりシユラシユシユどこへ行く

信本 博子

交通渋滞緑の道へ外れてみる

一瀬 福一

補聴器で聞いた空耳信じない

真喜内 実

三味線を奮い立たせる初対面

堀江 芳子

一喝が来そうな気配深呼吸

堀江 正朗

合掌の耳爆音に奪われて

清水 悠貴女

悪女にもなれず番茶は出がらしに

柳子

そんなこと言うから弾ける鳳仙花

柳子

母の手に直ぐ温くなる水枕

一徳

むなしさは表彰された後のノルマ

神田 治

火蛾の舞幸せすぎて悲しすぎ

寿恵子

一人旅お金を分けて入れておく

さよ子

ことも百科まさにずらりと飾られる

原 秀子

薄墨の山脈見える療養所

松本 ただし

藤井寺市

福元

稔

変る身に变らないかとみんな言う

宇久 はる子

身内とは悲しいまでの血の匂い

福本 英子

欲出してから当らない神の告げ

相馬 銀波

陰口の一人歩きをしたしこり

堀江 光子

逆立ちをすれば青春見えるかも

山本 半銭

頰杖のポーズとろりと赤い酒

村てい子

洒落た椅子男のズボン置いてある

北村 寛子

ゲートボールはやらぬ老人会には行かぬ

抜智

来世を案する程の暇がない

岡井 泰雄

アメリカに負けたおかげで丈が伸び

新 正子

かぶと虫の力になれる僕五歳

金山 夕子

邪魔されず二階に好きな白い部屋

前田 美子

赤とんぼ早くお帰りと日が落ちる

今西 静子

思い出を拾いに船場島の内

豊福 路子

比叡路の無常の風に萩の花

北勝 美

屑籠に丸められてある個性

北勝 美

水鏡何か秘めてる底の色

大原 葉香

粗品ではなさそうでない気のつかい

中尾 しんじ

退社ベルこれからは秘書でない女

宮田 純一

前に出ぬ友を背より押してあげ

田中 みね

達磨さんの肩を叩いてあげましょう

土橋 はるお

もつ誰もえくば認めぬ顔となり

横井 都姫子

櫛山が見える出番のないままに

曾我部 裕

投句先 千560

豊中市中桜塚三丁目13-15

投句先 千560

橋高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「酒」 選者 橋高薫風

締切 11月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局「ふれあいラジオセンター」係

発表 11月22日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

有働芳仙

遇然に笑い三句が勢揃い。幸先よいスタートとなる。どの笑顔にも一句一句味があふれる。屈託のない笑顔でそろばん手放さず

永田俊子

「屈託のない笑い」が曲者であり、算盤高い隙のない人柄を謳ったもの。類想吟多い一句だが動かない秀吟としたい。

座布団の順位で笑顔変えて酌ぐ

木本如洲

「変えて酌ぐ」がにくい。お酌して廻る女性の世故慣れた職業的心理描写と汲む。裏を返すと人間社会の諷刺でもある。この笑顔も前句の笑顔も一つの接線がある。自分の笑顔ではない。いや、生きる笑顔かな？

笑い袋をどつさり携けて孫が来る

流奈美子

どつさり孫の取合せが絵本のようで楽しい。この句は孫を持つおじいちゃんかおばあちゃんでないピンと来ない体験句である。

十数語の会話で暮れる老夫婦の所へ孫達が訪れる。顔の皺が少しは延び、口数も殖え途端に活気が出てくる。「笑い袋疲れ袋になつて暮れ」で、小生には孫が帰ると途端に疲れがどつと出る。

孫抱いた顔は部下には見せられぬ

加藤明美

社長室でどんとふんぞり返つて部下に睨みを効かしている社長さんも孫を抱かせると好々爺に早変わり、相好を崩して百面相の顔になる。あんな面白い顔が社長にも出来るのか？ フォーカス厳禁。

親しげにしゃべりまちがい電話です

津田スミ子

そそっかしい人が世の中には確かにいる。受話器を取るや「やあ／＼お元氣の様で」から始まり、立板に水の勢いで自分の近況をしゃべり出す。「あなたは誰に電話してますか？」こちらは〇〇ですけど／＼「あつ、失礼しました」ガチャリ／＼勿体ない時間。

むずかしい本を隣の人が読む

大川幸子

こんな経験を持っていない人は偉いと思う。何でもない当り前のことだが、なんでもある内容を含んでいる。隣席に坐った人がやおら鞆から取り出して開いた頁、横文字がぎつしり／＼瞬顔を見る。本と顔がピンと来ない違和感。むず痒い。

正直な鏡が或る日憎くなる

宇野昭代
女性心理のデリカシーを謳つた佳吟。「白粉の下は光陰矢の如し」の名句が頭を掠める。

親戚にきみがいるとは奇縁なり

鶴久 百万両

冠婚葬祭の場でよくこのような奇縁に遭遇する。思わず相好が崩れ今までの交際が又違つた要素を含む。油断出来ぬぞ。

臆病な蟹で両手をすぐ上げる

相葉あき

外敵に遭つと袂を高々と挙げる蟹の習性人間様にすり替えて見たユーモラスな佳句。小生も直ぐ上げる方だ。

差しのべた手が先生に届かない

黒田 緑

先生の救いの手が欲しいのに、先生が気づかない空しさ。また気づいた先生も必死で手をのばしても救えない時がある。ごめんね。値切る癖仏の花に出してしまう

秋元 てる

仏様にあげる花と知つていながら、つい口の方が値切っているのに気づく。現実はきびしいのだ。仏様曰く「いいからいいから」

植木鉢この土だけがボクの土

山田 保蔵

一握りの土の主人で咲かす花でいいです。要するに別れましようという手紙

丸岩 晏

綿々と部厚い手紙／＼しりと冷たいネ。

苗香のむ

小出智子選

脱サラの挨拶状にみる気負い

ときめきを顔には見せず染小紋

自転車で旅行だなどと気が強い

熱帯夜おろかな愚痴が胃に溜る

表札もひとり暮らしに草臥れる

まだ癒えぬ傷へ秋風吹きはじめ

仮りの世へ残す自画像描きはじめ

心理作戦見抜かれていた電話口

いつか咲く花を信じて水をやる

厳しくもやさしくもある老母の四季

寝返りを何度もさせるある出会い

手に余ることあり小さく深呼吸

ニアミスに気をつけなさい赤とんぼ

いて参じますなどと夫に言うて出る

エリート妻の見ていた万華鏡

鈴虫のすず宿題せかされる

疑いを抱くと曇ってくる眼鏡

引出しをあけると徹の生えた夢

マル優がどう変ろうと老いの金

堺 高橋千万子

大阪 上江洲勝子

和歌山 西山 幸

八尾 高杉 千歩

大阪 鍛原 千里

堺 鈴木三千代

鳥取 さえきやえ

大阪 堀 いくの

寝屋川 岸野あやめ

羽曳野 福田満洲子

岡山 清水悠貴女

大阪 西出 楓楽

姫路 丁坪サワ子

初恋は切手不足のまま届き

デカンショの町からついて来た郷愁

来年の夢朝顔の種をとり

送り火へ秋が静かにノックする

おもい極まる語りべを聞く原爆忌

留守にした時間を埋める水を汲む

時は金 時は命とおもう日々

余生かな仏の花に事欠かぬ

秋風がささやき長い湯に浸る

補充した知恵のこぼれて行く速さ

一姫二太郎 太郎ようと強くなれ

頼りない男の背なを宥めつつ

嫁ぐ娘のパジャマ幼し熱帯夜

傍に夫の軒きく安堵

雑念を拭ってくれた月の冴え

笑ったりそっと泣いたり十年目

仮りの世を命の限り蟬に似て

炊事洗濯夫へ伝授する余生

誉めようがないから元気でいいですね

現実に戻れと小ぜに入れが鳴る

大空の怖さを知らぬ奴だこ

満ち足りて帰る川面に赤とんぼ

到来の蟹缶どんな日に開けようか

螢火をあつめて母と亡父のこと

十七歳バラと競っているゆとり

寝屋川 平松かすみ

尼崎 春城 年代

西宮 奥田みつ子

高槻 河瀬 芳子

岡山 千原 理恵

和歌山 後藤 正子

摂津 望月かずこ

岡山 矢内寿恵子

米子 小村てい子

吹田 栗谷 春子

松原 佐藤 藤子

和歌山 山川 克子

富田林 藤岡 花梢

堺 小西 小雪

吹田 茂見よ志子

茨木 吉川 悦子

京都 小林 英子

大阪 神夏磯道子

埼玉 根岸 方子

名古屋 藤井 高子

岡山 灰原 泰子

和歌山 田中 みね

大阪 本間満津子

富田林 片岡智恵子

広島 流 奈美子

酔いざめの水反省をさせる水
 背伸びせぬ暮して肩をこらさない
 明日担う子にこの山河残せるか
 空ばかり見て夕立に逃げられる
 逃げ道をあけておくのも親心
 乱気流羅漢の陰でやりすごす
 助手席の安全ベルトがよく喋る
 羽根ぶとん裕福な夢ばかり見る
 逢うてきた悔いハンガーにつるしとく
 子を持って母へ姑へありがとう
 ブロンプター陰の一声あたたかい
 あの星のしずくでしようか露しとど
 ほめられて八十路の謡声艶と張り
 墓の草ごめんなさいねごめんなさい
 幸せの余韻鏡でたしかめる
 筆の跡人それぞれの味を見る
 美しい過去ねむってる玉手箱
 善人の隣りに住んで恙なし
 外孫に好かれて困る夏休み
 俄雨黙って他家の軒借りる
 帰省した子へまな板の音はずむ
 生きのびる手段に隙もみせておく
 甘党の方が女はしおらしい
 愛の字で埋め尽したい日記帖
 風評に耳は貸さない葦の花

大阪	津守	柳伸
宝塚	丸山よし津	
茨木	堀	良江
河内長野	植村	喜代
姫路	中塚	遊峰
島根	松本	文子
藤井寺	高田美代子	
奈良	横井都姫子	
広島	藤解	小菊
佐賀	寺中三枝子	
貝塚	池田寿美子	
島根	喜島	ノブ
西宮	朝山千世子	
米子	石垣	花子
和歌山	木本	文子
藤井寺	楠	昭子
和歌山	松原	寿子
米子	茂理	高代
大阪	町田	達子
和歌山	谷所	玉枝
和歌山	山口三千子	
羽曳野	吉川	寿美
出雲	園山多賀子	
竹原	信本	博子
出雲	金森知恵子	

菜園の虫に知識を教えられ
 題の無い絵筆をさそう赤とんぼ
 返事などあてにせず鳴る母の鈴
 義理ひとつすませ財布が軽くなる
 姑の目に叶うた嫁で恙なし
 親戚の自慢話はもう飽きた
 老いてなお四季追いかけて土に生き
 さまざまな暮しを包む団地の灯

和歌山	湯浅	由梨
和歌山	森	茜
米子	新	正子
高石	浅野	房子
守口	結城	君子
寝屋川	太田	藍子
岡山	富坂	志重
岸和田	清野	こう

ゴシックの一句目は、先頃騒がれたニアミス事件を取り上げ、小さな「赤とんぼ」を配したところがおもしろい。いまわしい時代の赤とんぼなど想像しない方がよい。諷刺のきいた作品。二句目は、「いて参じます」と改めて夫に挨拶出来るのは、中年をとくに過ぎた夫婦の有り様「などと」に、この句の佳さが秘められている。

今年の長くて厳しい暑さは、作句にも大いに影響したことかと思われます。この号が届く頃は燈火親しむ最も好季節。ご健吟をお祈りしています。



63年1月号から選者交代。八木千代氏が担当いたします。投句先お間違いないようお願いいたします。

ハガキに雑詠3句 毎月10日締切
 投句先 〒683 米子市花園町一四

八木千代

初歩教室

題 — 雑草

阿 萬 萬 的

今日の課題「雑草」には二つの事が考えられます。一つは本当の雑草であり、もう一つは社会の中の雑草です。この方が、人間味があり川柳らしい句が作れるのですが、先ずは前者の方から

廃屋の屋根にも雑草威を見せる 八重子
ペンペン草今年も同じ屋根に伸び 正之
去年とは違ふ雑草庭を占め 方子
雑草が何時か忍んだ石の庭 章久
雑草がだんだん攻めて芝生負け 美恵子
（雑草がだんだん芝生を攻めてくる）
アワタチ草地球の核へ根をつける 小鹿
（アワタチ草空地を征服する如く）
だがお日様は平等に
雑草にも分けへだてなく陽の光 円女
ねじやらし日照であらうとなかうとはる子
そして雑草にも可憐に生き伸びる命が
稔りの秋畦の草にも可憐な実 明吉
どくだみと思えぬ可愛い白い花 美子
（よく見ればドクダミ可愛い白い花）

蒲公英は草に生まれて惜しまれる

雑草よ踏むな名もなき花も咲く

雑草も季節が来れば花の咲き

（雑草も季節を知つてた花が咲き）

雑草の命乞うごと可憐花

雑草が可憐の花を咲かせてる

（雑草も生きる命の実を結ぶ）

だが雑草の花もルーベで覗けば

名も知らぬ草が見事な花をつけ

ゆきのしたレースの布のように咲く

雑草は雑草なりの花をつけ

これは生々庵先生の「浮き草は……」の句の

焼き直しのような気がするのですが。

ともあれ雑草の中に見つけた山百合や薊は

雑草の中に負けるなけん薊

雑草をかき分け薊ひと咲く

雑草の中に一輪野の花が

雑草の囲む撫子美しい

雑草の間に命張る高山花

（雑草に侵されそうにチングルマ）

雑草雑草と見捨てていても

名も知らぬ草にも名前有るものを

雑草もそれぞれ誇りの名前持つ

雑草もそれぞれ好きな名前持ち

（図鑑ではそれぞれ名前のある野草）

だけど雑草にもそれなりに心があるらしく

ちゃんと根は残つてますと草笑う

踏まれたら雑草だって感じます

土割つて雑草大地掴みとり

しんじ 露芳 幟

春枝

志洋

輝月

はる子

三三三

遊峰

富子

義男

美恵子

路子

かす子

晏

繁男

輝月

正子

千鶴子

雑草の意地コンクリを割つて出る

カタバミの意地を見せてか黄に燃え

（カタバミの意地根が伸びる根がのびる）

石垣の雑草したたか花つける

雑草も時には虹の夢を見る

（雑草にも夢あり小さな実をつける）

石積の壁を縫うよう草の蔓

だがこんな雑草もあるのです。

雑草が夢を見ている廃止線

雑草が生きるがままの無人駅

無人駅花壇に変わる草茫茫

（無人駅になって花壇に草茂る）

休耕田の訳は知らぬが花ざかり

（休耕田のアワタチ草へ陽は真昼）

倒産と知つて雑草急に増え

雑草が金一升の地で背伸び

雑草も地価の値上り知つて

（土地転がしと分る雑草伸びている）

雑草の実知らぬ間に風に飛ぶ

雑草の実風まかせ天まかせ

（雑草はあなたまかせの風媒花）

草の根方は秋の虫達の憩い場ともなつて

雑草に虫は抱かれて鳴いている

下五鳴いているを秋を知りとしてみては。

雑草にバツタ身じろかなくて秋

雑草の根に縋つてる虫もいる

雑草も時には虫の宿となる

（雑草も枯れて冬越す虫の宿）

草むしりそれは大変な仕事ではあるが

秀香 博子

照子

喜与志

しんじ

金吾

三三三

秀香

志重

保夫

ゲン吉

かつみ

喜与志

小鹿

織

たかし

正子

ミツエ

余生などと母雑草と里にいる

雑草に負けじと老いの地下足袋が

雑草に挑む軍手の疲れ気味

草茫茫女ひとりの畑仕事

庭の草老いの仕事を有難う

雑草の方が伸びる植木鉢

追肥まで雑草にみな持つてかれ

(追肥まで雑草が……とつて伸び)

野菜畑にも雑草が……

雑草と仲よく芋がよく育ち

雑草に負けんな大根太くなれ

雑草から見れば過保護な茄子胡瓜

食べる野草と言へば

雑草を食べてた話馬鹿にされ

食える草知ってる父の深い皺

食べられる雑草大正生れ知る

(戦前派の知恵食べられる草を知り)

ふるりの草はそれなりに郷愁を誘つて

雑草に寝る空には昔のままの雲

(草に寝る傍でお喋りまだ続き)

雑草の可憐さも混ぜ盆供養

(えのころ草むしり少女は歌が好き)

雑草をお供に村の石地藏

路傍の石雑草の私語耳を打ち

(お地藏さん雑草の私語聞いてあげ)

雑草も風のささやき聞いて秋

ひっそりと雑草の花天みつめ

(草の花ひっそり風と話してる)

ダン吉

花園

春枝

博子

てる

三千子

洋子

野草

三津江

金吾

タネ

かつみ

保夫

喜代子

悦子

正之

章久

照子

しず子

喜代子

雑草の根強さへ病身の身は心ひかれて

雑草を愛しむ目付き病み上り

雑草に足の衰え笑われる

雑草に似て遅ましい子の日焼け

雑草の強さが欲しい車椅子

雑草の可憐な花へ車止め

(雑草の露へ止めてた車椅子)

ここでももうの雑草を少々。

雑草の気ままにまかせ御陵道

雑草の茂り空缶よく眠る

投げ入れへ雑草しゃんと主役たて

(雑草が助ける活け花だつてある)

雑草へ陛下の御目がそがれる

(陛下の御目にとまる雑草だつてあり)

雑草を枯らす葉に印鑑が入り

走り来し仔犬草の実付けたまま

(仔犬ころころ草の実付けたまま転び)

さて最後は川柳になり易い雑草の暮しを。

雑草も無傷でいたい平和にと

古希過ぎてまだ雑草で生きている

半生は雑草に似る生き様よ

(半生は雑草に似たわが暮し)

耐えること雑草無言で教えてる

雑草に負けぬ心で修羅越える

雑草に追われる小言今日も聞く

雑草の只耐える事言今日も聞く

(耐えること知りて候草茂る)

雑草のような命を自尊する

(雑草の暮しにもある自尊心)

紀代志

志重

三津江

つえ子

サワ子

晏

てる

洋子

勝美

遊峰

かず子

繁男

義男

昭治

昭治

昭治

遊光

遊光

遊光

遊光

遊光

遊光

遊光

遊光

遊光

遊光

遊光

遊光

雑草に唯したたかさ学び取り

踏まれても枯れぬ自信を捨てぬ草

母子家庭雑草の腰もつてる子

(母子家庭腰の強さが草に似て)

温室育ち早や雑草に追い越され

エリートの中で雑草強く生き

だが竜り取られてしまふ雑草もある。

雑草の泣き言風は耳かかぬ

四捨五入雑草いつも竜られる

暴走族雑草なみに検挙される

雑草のように一円捨てられる

疎まれる意地雑草の自己主張

雑草も生きる権利を持つている

(雑草もそれなり権利主張する)

雑草の仲間だからこそ自由な身

雑草は同じ仲間が良いと言ふ

(人の好い雑草だから仲が良く)

雑草も癖学んだら僻んだら

雑草の亡父の血を継ぐコップ酒

雑草という題に同じような句が沢山ありま

したが、一応それ等を並べてみました。自分

の句と他人の句の違いを比べてみるのも一つ

の勉強かとも思います。如何でしょう。では又

題「良心」

11月10日締切(1月号発表)

ハガキに5句以内

「薬」

12月10日締切(2月号発表)

宛先 千598 泉佐野市中庄一〇八一—九九

阿萬 萬的

太一郎

凡太

治

みね

志洋

野郎

一郎

明吉

露芳

知恵子

みね

凡太

しず子

悦子

たかし

たかし

たかし

たかし

たかし

たかし

たかし

たかし

たかし

たかし

たかし

たかし

たかし

たかし

狙
う

西村 早苗 選

へそくりを狙うやさしい声になる
弱点を知ったか僕はかり狙い
そこまでは狙い通りで走れたが
休み終え狙い解かれたトンボ蟬
身に覚えのないに狙うものが居る
留守番の主人を狙ってきた電話
病窓を狙うカメラが胃を走る
善人の狙いはいつもはずれがち
輪の中に狙いさだめた娘が一人
狙う日をワイングラスに透かし見る
満月を狙って跳ねる白兎
狙う的射止めた後の虚脱感
スタミナをつけてトップの座を狙う
砂糖つばの隙間を蟻に狙われる
かあさんの狙いが重いランドセル
取材拒否望遠レンズが狙ってる
狙い撃ちされる覚悟は出来ている
狙われてみたいと持てぬ奴が言う
狙っては見たが私には重い椅子
狙う時の的はいつも揺れている
真ん中を狙うと的小さくなる

可住 素身郎 一 夢 醉 代仕男 克子 寿恵子 しげお 山久 洛醉 カズエ 正坊 清芳 悠泉 木魚 たつみ 凡太 あやめ 裕 佳雲 サワ子 大柏

まばたきのあいまを狙うハチの針
肩の力ぬくと狙った方へ飛び
ライバルが死角で狙う棒グラフ
狙ってるようには見えぬ蜘蛛の網
焦点をずらすと当る銃の癖
子が狙う程の遺産もない平和
パチンコ屋客を狙った釘の位置
標的に届かぬ弓も引いてみる
特売場見栄が狙いをぐらつかせ
狙ってはみるが空砲ばかり撃つ
狙い目は一段高いところにある
狙われているのはわたしかも知れぬ
高鳴りを押えて狙うカメラ位置
狙いすぎて鬼も天狗も躓いた
呪いの狙いは神様だけに言う
佳
仲の良い夫婦を狙う奴がいる
折り返し地点でトップ狙う脚
大穴を狙って夢を買いつづけ
千切り絵の指が狙った市長賞
引金の指に国境線がある
人
次ぎ狙う仮面こっそり干している
雄々
地
マグマ抱く女が狙う火の匂い
多賀子
天
狙われてリングはすぐに熟れたがる
寿美
狙った家がセールの地図にある
軸

争
う

野田 素身郎 選

争いを笑うて御座る地藏尊
同僚を争わしめる棒グラフ
争う気で出掛ければ酒になり
争いを起こしたくない隅が好き
争う事も無く穏やかな余命表
争うたあとのたばこがほろ苦い
助っ人の手前争いやめられず
地球儀に今日も争う国があり
争いに負けると一人も居ぬ味方
争って左遷辞令の速いこと
争えぬ血筋で孫も団子鼻
争うて蛙産卵に戻って来
猿山の争い猿にある掟
すれ違ふ女争う眼に変わる
身を護る為の争いだったある
争いに頷くだけで巻き込まれ
争いの策を知らない力こぶ
争うたことも懐かし通夜の席
氷河期が来れば争い絶えるだろ
財産があつて争いごと絶えぬ
争いの腰を折られた電話ベル
争乱にいつも無告の民が泣く

比呂志 三千子 不二 保 晏 ます子 やすお サワ子 規不風 雅風 京子 白溪子 春枝 宵明 虹汀 博子 早苗 高みね 理恵 章久 正坊

菊花賞争った日よ老馬病む
争いのなりゆきを見る爪をかみ
論争に棚のこけしが転げ落ち
兄弟を不仲にさせた遺産分け
狂い咲く花へ争う秋の蝶
たかが杭一本先代からもつれ
争いの種のプロック積んでいる
争いはやめよう父が墓で泣く
真相を知っているので争えぬ
呆けたのは喧嘩相手が逝ってから
炎天下争いのない蟻の列
争うて奪った椅子がまだきしむ
子も巢立ち争う種もない夫婦

住

核競争どうかボタンを押さぬよう
争った女旧姓で賀状くれ
父と子の争い櫓が枯れている
争いの空しさを知るシャレコウベ
争いごと嫌いで過去に銃を執り
見舞客争うように来る不安
のり降りるに争いのない赤字線
死の商人争う国へ兵器売る
争うてみたけど数で押し切られ

軸

正坊 静子 伊津志 悠泉 雄々 大柏
船造 満津子 あやめ テル 弘朗 よし津
通彦 四郎 たつみ 奈美子 柳五郎
正子 兼治郎 三和

家 族

赤川菊野選

島国はみんな家族の丸い顔
結局は味方は家族だけと知り
二回目で家族紹介するデート
温かい家族にふれた一人旅
盲愛の子から崩れてゆく家族
釣書の家族に小姑多過ぎる
飼犬のボクも家族と不満顔
子育ての苦労残して核家族
保育器で小さな家族ねむってる
結局は俺とお前になる家族
表札は大家族寡婦ひとり住み
明るさが戻る赴任の父帰る
家族会議妻に味方が多過ぎる
傲慢にはならぬ我が家も核家族
家族会議などには要らない老い二人
あばら骨扶養家族に耐えている
家族とは何かと思う夜の月
世をすねた死刑囚にもある家族
時勢には勝てぬと悟る核家族
クローラーへ猫も家の顔で寄る
家族構成物干し竿で揺れている
逆境に家族スクラム組んで立ち

しげお みのる 春枝 山久 正敏 白溪子 幸泉 清芳 たつみ 素身郎 柳五郎 裕 悠泉 枯梢 兼治郎 宵明 倫子 公一 奈美子 幸子 千秀 だし
ああ家族猫一匹と老い一人
母が居て年に一度の顔が寄り
お裾分けしたい隣は大家族
つきつぎに家族帰って来る巣箱
カルガモの家族に教わることしきり
珍らしく家族が揃い鍋かこむ
家族にも馴染めぬ猫が家出する
家族らしい家族居ず
核家族そんな言葉を遠く聞く
キャビンには家族の写真十字星
悲しみを分け合う家族居てくれる
エリートの家族の中の変り種
慕う子も逆う子もない核家族
病名を隠す家族のつらい日々
別室へ家族を呼んだ聴診器
わら屋根に温い家族が住んだ過去
血統はどうあれ家族皆達者
隙間風家族の減った縄電車
児を産んで戸籍を持たぬ火の女
家族の中に嫁という他人
逆境の中で家族という絆
家族からやがて他人の舟を漕ぐ
父の座椅子に父がいる日の家族
元旦も家族は亡夫と二人だけ

軸

天

地

人

柳界展望

集録一敏・武庫坊

★吹田川柳会

二十周年記念川柳大会
日時 11月1日(日)午後1時
場所 吹田市文化会館
メイシアターF1集会室

宿題 各題2句締切14時
「育てる」 友田茶の子選
「許す」 西川 景子選
「実感」 志水浩一郎選
「ほんま」 永田 帆船選
「喋る」 鶴飼 蟻朗選
席題 連想吟 当日発表
竹森 雀舎選
会費 千円 粗品進呈
★土居耕花句集「やっこ風」

発刊記念川柳大会
九月十九日阪神、倉敷地区
参加者三十名栗倉温泉にて
大原川柳社有志と共に前夜
祭を開く。

翌二十日大原町総合セン
ター大ホールにて記念句会
を開催。本田恵二郎氏のユ
ーモアたっぷりのお話、紹
介の言葉に満場大拍手。
出席者百七十余名の盛会
で地元大原川柳社の温いお
心ふれて大会を閉じた。

◇各題天の句

「土」田の土に父の指紋が
ついている 松下衡陽
「居る」年寄が居て機嫌よ
く豆が煮え 山根素蛙

「耕す」耕していつしか父
祖の血に出逢う 服部富子
「花」どの花も母の好みに
咲いている 小林孝子
「風」北風に口一 文字父の
風 池田孝平

「傘」祖父の傘ぐわんと威
厳を失わず 河内天笑
「舞」白い萩白くこぼして
風が舞う 岡田千茶
「糸」紫の糸で熟女は恋を
織る 江原とみお

★はびきの市民川柳会は、
九月二十七日、会誌百号を
記念して、合同句集「はび
きのIII」を発刊。九月十三



NHK学園25周年祝賀会(帝国ホテル)
栗主幹と坂本一胡氏

NHK学園創立25周年記念
第1回NHK学園全国川柳大会
秀句抄(川柳塔社関係)

〈特選〉

遠い記憶少年の日の水鉄砲
スケジュール陛下の歩幅狂わない
〈入選〉

信号もびたり添うてる盲導犬
神様に大きな借りのあるいのち
遺伝子をいじって神に借りができ
植村 喜代
河瀬 芳子
安平次弘道

に作品より推薦作品を寄せ
ている。

★山本規不風氏(京都市)
は、川柳京かがみ第57号の
エッセイひろば欄に「家相」
と題し執筆。

★毎日新聞鳥取版の川柳欄
の選者が八木千代さんから
江原とみお氏にバトンタッ
チ千代さん五年間「苦労様」
★本田恵二郎氏(倉敷市)は
近詠鉄路集の選者を始め、
「仲良し教室」「竹原中央
公民館川柳講座」「吉名教
室」等の担当で大ハッキリ。

また、ライオンズクラブ会
報八月号「児島鷺羽」No.251
に「老人を守る会」と題し
執筆。
★塩満敏氏は、十月一日、
大阪府立城東養老人ホーム
で「すみれ老人大学」の川

▽新刊紹介△
「呆れた「サラダ記念日」
騒動」と題して執筆。
合同句集「ひらの」

心にもふる里があるまつりの灯 東洋樹

ん

恭子

■神田忙人著
『武玉川』を楽しむ

三条東洋樹氏の句碑の建つ神戸は平野の祇園神社、そこを心の故郷とする同志、それも女性ばかりの「ひらの会」が十五周年を記念して発行した句集である。A

朝日選書337 朝日新聞社刊
定価千二百円

5判百六十頁の瀟洒な装幀の内容は、七十二名の作品が十句ずつ掲載され、優雅な女の園を具現している。

▽お便り△
この度受賞の報を頂きこのような榮譽夢のようです。

この夢は花屋の角で忘れよう

★土居耕花氏（岡山県）
ありがたいことと思つています。現在、当地老人大学の川柳部門の指導をしております。

庭の木に四季を数えて夫婦きり 柚香女

★山内静水氏（本社参事・竹原市）長い間ご心配をおかけしましたが、どうにか快復致しました。鈍痛は当

花束のどの花よりもお嫁さ

分とれないと思います。会報の方は蘭幸氏にお願いしております。

晴美

★岡山多賀子氏（本社同人出雲市）茴香の花について図書館で調べましたところ私の庭の畑の一隅にあることが分りました。今年の花はもう終わりましたので来年は写真に撮ってお送り致します。一月以来胸に秘めていた幻の花を見付けて欲びで一杯です。

う

★堀江正朗・芳子氏（島根県）正朗氏やつと体調も恢復しましたので点字を打っております。

庭の木に四季を数えて夫婦きり 柚香女

★渥美弧秀氏（本社同人・静岡市）9月17日のNHK学園川柳大会目指してがんばっています。

花束のどの花よりもお嫁さ

★石手武氏（愛媛県）県下の川原でいも炊きのシーズンになり各地で名月の前後は花火大会など催しもののにぎやかです。

庭の木に四季を数えて夫婦きり 柚香女

★橋高薫風氏 9月7日、主幹夫妻と私は、津軽平野を快適に旅をして、金木町

庭の木に四季を数えて夫婦きり 柚香女

★原稿締切・11月25日必着

庭の木に四季を数えて夫婦きり 柚香女

★送り先

庭の木に四季を数えて夫婦きり 柚香女

〒581 八尾市中田二一三〇一 高杉鬼遊方

新同人紹介

山 谷 山 竿
— 葵・薫風・甲吉・五楽庵推薦 —

吉 川 一 郎
— 柳宏子・紫香・薫風推薦 —

の太宰治の生家、斜陽館を見物、十三湖、十三の砂山を回りました。

★新年号特集★

川柳塔社同人総参加（一人一句）

「私の一句」

（今年中に発表されたもの）

●締切 十一月二十五日着便まで

年賀広告受付!!

★一口千円（2.3cm×7cm大）

（本誌、柳界展望の一段Ⅱ、五〇〇円）

★原稿締切・11月25日必着

★送り先

〒581 八尾市中田二一三〇一 高杉鬼遊方

川柳塔社 社会計室

昭和62年度

川柳塔社同人総会

62年10月4日

昭和62年度川柳塔社同人総会は、雲一つない秋天の10月4日(日)、大阪市立労働会館で開かれた。午後2時開会、西田柳宏子副理事長の司会で西尾栗主幹のあいさつの後、主幹を議長として議事に入る。

□会計報告(高杉鬼遊)

61年度の貸借対照表、損益計算書を揭示して詳細に説明。同人・誌友の増加によってやや好転しつつあるが、今後とも努力が必要。

□会計監査報告(金井文秋)

詳細に記帳され、内容も正確である。

□事業経過報告(辻白漢子)

(事業)

61年10月・5日同人総会(メンズファッションセンター)二賞表彰

61年11月・19日姫路川柳あしなみ会創立30周年記念大会へ選者阿萬萬の、松川杜的他参加

62年1月・15日新春おめでとう会(大成閣)

・女性コーナー「茴香の花」欄新設
選者は62年度小出智子、63年度八

木千代担当

・各地柳壇賞の選者、児島与呂志から玉置重人に

62年3月・1日京都塔の会15周年記念句会、合同句集発刊

・8日薫風副主幹は寺尾俊平氏、時実新子氏と同期の桜出版記念句会

・29日第10回鳥取県川柳大会(倉吉)選者小出智子他参加

・29日いずれも川柳会は松本文子出版祝賀川柳会

62年4月・5日川柳わかやま吟社は二百号記念大会(和歌山)選者橘高薫風、黒川紫香他参加

・17日岸和田川柳会が高橋操子の喜寿、句集刊行の記念川柳大会選者

・西尾栗、橘高薫風、野村太茂津、谷垣史好他参加

・29日打吹川柳会は奥谷弘朗句碑建立10周年川柳大会(大山)栗主幹

・薫風副主幹出席祝辞

62年5月・24日愛媛川柳研究大会を汐風川柳社(月原宵明会長)が開催

62年7月・5日麻生路郎二十三回忌、麻生霞乃七回忌、中島生々庵一周忌の追悼川柳大会(高野山普賢院)約二百五十名参加

62年8月・17、18日第二回川柳塔勉強会(篠山町ささやま荘)

・23日第11回若人忌川柳大会(鳥取)お話野村太茂津、選者黒川紫香、阿萬萬の、西田柳宏子他参加

62年9月・6日東奥日報社県下川柳大会(青森)へ特別選者として栗主幹参加

・6日第52回秋田県川柳大会(秋田)へ雑誌選者として薫風副主幹参加

・6日弓削川柳社主催第39回西日本川柳大会(弓削中央公民館)選者河内天笑他参加

・20日大原川柳社は土居耕花句集「やっこ風」発刊記念川柳大会(大原町総合センター)選者橘高薫風他参加

・26、28日川柳塔唐津支部結成五周年記念川柳大会(唐津)柳話西田柳宏子、祝辞野村太茂津、選者黒川紫香他21名参加

〈受賞〉

高橋千万里 61年度路郎賞

波多野五楽庵 路郎賞準優秀作第一席

辻白漢子 路郎賞準優秀作第二席

永田俊子 61年度川柳塔賞

清水康恵 川柳塔賞準優秀作第一席

桜沢あかり 川柳塔賞準優秀作第二席

林はつ絵 県民川柳大会篠山町教育委員会賞受賞

春城 年代 尼崎市文芸祭川柳部門一席

西村かすみ 尼崎市文芸祭川柳部門二席

安平次弘道 第一回国民文化祭川柳大会秀逸
津守 柳仲 賞受賞

森山 盛桜 鳥取県川柳作家協会日満賞受賞
遠山 可住 篠山町教育委員会文化賞受賞
土橋 螢 NHK学園川柳講座61年度作品
特選第一位入選

尼 緑之助 出雲市文化振興賞受賞

林 荒介 神戸市議会議長賞 時の川柳

新家 完司 兵庫県教育委員会賞 創立30周

高杉 鬼遊 朝日新聞社賞 年大会

永田 俊子 61年度各地柳壇賞受賞

土居 耕花 岡山県教育委員長賞受賞

橘高 薫風 (句集発刊)

松本 文子 「渡り鳥」

野村太茂津 「はまゆづ」

土居 耕花 「やつこ風」

高橋 操子 「万年青」

有働 芳仙 「風ぐるま」

(物故者)

大森 孝華 (61・10・7)

岩田 美代 (61・12・18)

松岡 三吉 (62・1・21)

川口 弘生 (62・2・14)

藤後 実男 (62・5・9)

入澤 寿恵 (62・5・29)

(新役員) Ⅱ年度途中

参事

吉岡きみえ (出雲市) 堀江芳子 (島根県)

有働芳仙(熊本市)

(新同人)

近藤一途(寝屋川市) 川島颯云児(高槻市)

井上森生(茨木市) 瀬尾六郎太(西宮市) 渥

美弧秀(静岡市) 上田佳秋(芦屋市) 永倉僕

川(静岡市) 竹治ちかし(出雲市) 桑原掬水

(唐津市) 山口高明(唐津市) 筒井朴竜(唐

津市) 松高多駄子(唐津市) 中塚遊峰(姫路

市) 小玉満江(出雲市) 小白金房子(出雲市)

園山よし子(出雲市) 入沢寿恵(出雲市) 脇

田米朝(篠山町) 齊藤ふ(弘前市) 浜本ちよ

(唐津市) 一瀬福一(豊中市) 辻川慶子(豊

中市) 小畑よし子(豊中市) 江原とみお(鳥

取県) 川上より子(米子市) 木村富美子(米

子市) 福元みのる(藤井寺市) 椎江清芳(箕

面市) 宮下とし(大阪市) 堀良江(茨木市)

横山為子(大阪市) 北川竹萌(高知市) 加藤

彩人(青森県) 矢内寿恵子(岡山県) 新谷忠

昭(和歌山県) 三宅一郎(和歌山県) 三宅保

(海南市) 青枝鉄治(和歌山県) 山田高夫(和

歌山県) 木本文子(和歌山県) 桜井千秀(和

歌山県) 井上白峰(大阪市)

この後、黒川紫香副理事長から役員選出に

ついて別記のとおり提案があり、満場の拍手

で全議案を承認 午後三時二十分閉会した。

《同人総会出席者》 栗・柳宏子・鬼遊・萬的

紫香・武庫坊・年代・雀踊子・敏・太茂津・

重人・幸・隆一・悦郎・文秋・庸佑・一郎・

千秀・朱夏・颯云児・杜的・白漢子・智子・
金太・正坊・水客・佳秋・一二三・美房・喜
風・メ女・寿馬・笛生

◇

★10月4日同人総会において選任された新役
員は次のとおり。

副理事長 阿萬萬的

相談役 大坂形水 高橋操子 正本水客

参 市川鈴魚

参 事 児島与呂志 田口虹汀 津守柳仲

土居耕花 藤村メ女 八木千代

吉原紅月 菅井智水庵

常任理事 榎本吐来

理事 渥美弧秀 稲葉冬葉 川島颯云児

近藤一途 佐野白水 高橋幸代

田中隆二 寺井東雲 土橋 螢

永倉僕川 二宗吟平 仁部四郎

福本英子 堀端三男 松下たつみ

吉田笑女

なお職制に関し副主幹を二名とし、新しく

黒川紫香を選任。会計監査は金井文秋・松川

杜的

有働芳仙氏(熊本市)より
句集「風ぐるま」発刊御礼として
金一封ご寄贈いただきました

川 柳 塔 社

62年度二賞表彰本社十月句会

十月四日(日) 大阪市立労働会館

二賞表彰の会場は和室の大広間。路郎賞の松川杜氏の、川柳塔賞の河瀬芳子さんはじめ準賞受賞者へ栗主幹から賞状授与、そしてお祝いの花束が、ゆかりのグループ、柳友から贈られた。

記念撮影の後、阿萬萬的氏のおはなしは、今春三草書房から出版された篠原史憲著「いろは歌の謎」という本から興味深い話を披露された。

いろはの歌は弘法大師の作と言われているが、そうではなく大師よりずっと以前の教典の中に、万葉がな七字七行で書かれてあるそう。大体、いろは歌は七五調四句で構成されている歌なのに、なぜこんな書き方をしたのか。七行の最下位の文字を並べてゆくと、「とがなくてしす」となる。平安初期から歌人達の間では、クイズ遊びのよう、一見何でもない歌に別の通信文などをかくす方法がはやっていたが、「咎なくて死す」が暗号文だ

としたら作者は一体誰なのか。いろんな人物が浮び上がってくるが、著者は柿本人麿ではないかと言ふ。

初出席は高沢栄(京都) 山田葉子(長岡京) 川畑栄子(長岡京) 三宅一郎(和歌山) 木本朱夏(和歌山) 津田スミ子(高槻) 神野節子(高槻) 藤井高子(名古屋)

月間賞は西山幸さんが獲得
(進行―天笑) (受付―月子)
(記録―射月芳・健司・隆二)

出席者―栗・柳宏子・女・諷云児・杜的
佳秋・萬的・千秀・太茂津・幸・文秋・紫香
喜風・悦郎・水客・白漢子・月子・栄・松川
芳子・葉子・朱夏・一郎・庸佑・吸江・美代
子・小林英子・隆一・笛生・高子・河瀬芳子
茂見志子・津田スミ子・川畑栄子・節子・
正坊・好啓・智子・英壬子・武庫坊・年代・
天笑・勝美・作二郎・敏・章久・池田寿美子

雀踊子・重人・凡九郎・金太・度・勝晴・柳
伸・小路・はつ絵・笑女・いわゑ・憲太郎・
鬼遊・楓葉・柳影・あいき・昭子・寿美・狸
村・白峰・満津子・道子・達子・健司・射月
芳・冬葉・規不風・藤子・寿馬・郁子・一二
三・千代三・三男・登志代・福本英子・寿子
岳人・吐来・形水・史好・頂留子・美房・東
雲・美智子・薫風

席題「ふとん」 田中好啓選

晴天にふとんを叩く母の唄
万年床のふとんも理屈主張する
せんべいふとんの頃はやさしい夫だった
シングルに変えた倦怠期のふとん
ふとん屋がニンマリしてる秋の風
座ぶとんの数が味方と限らない
清潔な布団で嫁の艶がよい
商戦のしのぎへふとん綿やせる
いつからか妻もふとんも弾まない
座ぶとんに翅を息めるアキアカネ
花柄のふとんで春の夢を追う
秋の日のふとんに母の匂うなり
許し合う距離にふとんが敷いてある
母の手でかける布団はあたたかい
十五階からふとん干してる秋日和
約束を果たすとふとん軽くなる
羽根ふとんやさしい愛を確かめる
母の肩幅だけのふとんを干している
負け犬にふとん一枚選つてやる

女 是つ絵 昭子 美代子 敏 幸 天笑 英壬子 藤子 昭子 金太 鬼遊 寿美 柳宏子 笛生 楓葉 重人 作二郎 寿子

滝の音思慕はだんだん深くなる
露天風呂打たせの滝が快い
滝のしぶきはどんな野心も通さない
一人旅滝にも夫婦あるを知る
滝の怪女は少し喋りすぎ
瞑想にふけてみたい滝にあう
滝壺の水もやがては海になる
枯山水の滝水の動きが見えてくる
良心に問いかけてくる滝の音
滝ほどの汗「生きているな」と思っ
突然に滝が止まった日 pensando
そして滝懺悔の真偽など触れぬ
絵ハガキのようにきれいな滝でない
滝壺に愛の終りを見てしまふ
百舌啼いてはげしい嫉妬滝に消え
いつの日か滝と詩人は通じ合う
滝つばの男は滝を見ていない
滝つばに笹舟一つゆれている
滝壺が涸れても愛は残るだろう
滔々と滝人生はまだ半ば
滝口に立てば笑顔は消えている
千日回峰滝がだんだん近くなる
滝つばに有象無象の渦が巻く
天城越えおんなにつらい滝の数
滝壺の深さ伝説たんと持つ
滝壺に女祈りを深くする
お滝の前の告白だから信じよう
帰命頂礼滝のしぶきの温か味

太茂津 美代子 達子 吐来 月子 スミ子 雀踊子 杜的 金太 高子 道子 凡九郎 千代三 諷云児 太茂津 好啓 水客 スミ子 冬葉 緑良 水客 作二郎 年代 楓楽 鬼遊 笛生 いわゑ 福本英子 太茂津

滝が鳴るひとに淋しき思いあり
許さずには滝はまっすぐ落ちてくる
落ちるのを楽しんでる滝の水
罪はろばしか滝に打たれている女
負けるもんか負けるもんかと滝の水
滝に打たれて母の心がまだ読めぬ
滝つばへ落ちると水が喋り出す
男滝女滝の音煩惱は疑わす

兼題「沈黙」

江口

度選

沈黙の老父へ言訳途切れ出す
後ろの方で黙ってるのがボスだろう
沈黙の溝がだんだん深くなる
雄弁が沈黙に勝つ世相です
沈黙はしてるがアンテナ高く張る
頑なに子はおし黙る反抗期
一瞬の沈黙噂のひとが来る
床の間の軸へ多弁と沈黙と
沈黙に煙草のけむり多すぎる
沈黙が続く胃袋痛くなる
沈黙が続くとのどが渴き出す
沈黙を守れぬ方が負けている
沈黙黙考何考える池の亀
沈黙を破るクシヤミの派手なこと
沈黙の握り拳にある火種
沈黙を守って網の目を抜ける
座禅堂時の流れる音がする
沈黙は金なりロダン考える

作二郎 健司 鬼遊 笛生 水客 作一郎 月子 幸 佳秋 正坊 柳影 よ志子 重人 笑子 め女 太茂津 よ志子 狸村 冬葉 楓楽 杜的 柳宏子 藤子 水客 諷云児 楓楽 敏

御礼

このたび小生の句集「風ぐるま」を多数御愛読賜わり厚く御礼申し上げます。尚過分の御厚志まで頂き紙面をお借りして御礼申し上げます。

有 働 芳 仙

沈黙の眼と眼が振っている反旗
父を許した母と黙ってめしを食う
沈黙の父許してる大きい背
沈黙の妻が茶漬けを食べている
沈黙がとつてもこわい妻の背な
沈黙の果が危ない橋渡る
沈黙の妻に心当りのある不安
相思相愛沈黙もまた楽し
日記燃やして父の沈黙が解ける
沈黙に勝てる返事がありますか
北斗七星へ沈黙が続くなり
重苦しい沈黙国境線も冬
沈黙のあいだも爪が伸びてゆく
禅寺で聞こえるものは風ばかり
沈黙の父に残照赤すぎる
沈黙のまん中へ置く請求書
沈黙を守り通した木の枕
火だるまになりそうだから黙っとく
沈黙が幽霊かろうに父の墓
沈黙へ蠅が一匹とんでいる

どなたく 作二郎 河瀬芳子 いわゑ 達子 吐来 寿美 規不風 凡九郎 冬葉 文秋 藤子 智子 諷云児 健司 荒介 一二三 耕花 健司

沈黙の心振り子のようにゆれ

度

兼題「摩擦」

玉置 重人 選

摩擦くる前に別居のブラン練る
ギブアップするまで燃やしている摩擦
女医の手でも少し撫でてはしなかった
避けようとするとから摩擦ついてくる
重箱の隅に摩擦の素がある
椅子一つ摩擦で火傷しないよう
ひたすらに摩擦をさけて生きている
摩擦など素知らん顔をする余裕
冷戦中こころの擦れぬ音を聞く
やんわりと大阪弁で摩擦さけ
大物がにっこり笑っている摩擦
方舟が傾きだした摩擦音
温泉へ逃げて摩擦がさけられぬ
ライバルと火花散らしている摩擦
摩擦辭け姑は上手に体かわす
尊敬も摩擦もしているライバルで
さけられぬ摩擦へ覚悟しておこす
兄弟の摩擦へ法事という油
適当に摩擦もあって仲が良い
バカになり切つて摩擦の火花消す
船頭が二人揃って摩擦の火花消す
小心な男で摩擦避けている
摩擦音今日の化粧がよくなるはず
部長から課長つづいている摩擦
ことさらに避ける摩擦がきこえない
家計黒字摩擦は当分ないだろう

よ志子 悦郎 耕花 柳宏子 白峰 満津子 狸村 柳宏子 水客 敏 吐来 荒介 好啓 寿美 道子 笛生 妻子 寿馬 あいき 英王子 柳伸 美代子 萬的 健司 柳伸 よ志子

はいいいえすでに摩擦がおきている

好啓

会社での摩擦が隅で飲んでいる

作二郎

靴擦れがふつ飛びケルン高く積む

はつ絵

強い武器持つと摩擦をしなくなる

昭子

コンパスを縮めて摩擦軽くする

寿美子

人生に摩擦生きている証拠だよ

凡九郎

遺産分けぶざまな摩擦だと思つ

白漢子

うっかりと投げた波紋にくる摩擦

美智子

摩擦避けながら歩けば壁にあつ

楓 楽

摩擦音誰か音頭を取つてゐるな

藤子

とても上手に大根がおろされる

冬 葉

石積んで父との摩擦まだ解けず

作二郎

後編で摩擦が渦を巻きはじめ

小路

摩擦ない父母をゆっくり見直そう

重人

末席にいます摩擦さけてます

兼題「占う」

西尾

栞選

占師ときどき当ることを言う

太茂津

占いを信じて回れ右したが

幸

末吉の筈が今年も暮近し

佳 秋

占いへ馬鹿げた金を置いて来る

高子

頑固一徹占いを嫌い抜く

松川 芳子

占いが空巢の被害届け出る

武庫坊

占いはしこして居る青い恋

昭子

自尊心をくすぐっている占い師

頂留子

酔いどれに筵竹の灯がからまれる

吐来

すぐ離婚すると言つてた占師

文 秋

占いはどう出ようともまだ落目

泰子

占いははずれた今日の検診日

重信

体調を占う朝のトイレレット

射月芳

占いで男運などないらしい

寿子

占つて貰つてからのノイローゼ

満津子

占うた命名奇妙な字が並び

太茂津

占いに女難の相と朝の靴

スミ子

占いの女難に早く逢いたくて

メ 女

占いも御先祖様の徳と説く

節子

「来る」来ない花びら散らしひとを待つ

高子

占い師今日はギョーザの息で見る

松川 芳子

雨やどり細木数子の本を貰つ

章久

これからを占う女の独り独楽

岳子

友達の日を占うつるし柿

智子

占いの通りになつてきた二人

栄

明日占うカードが重い雨の午後

作二郎

占い師の妻も保険をかけている

勝美

髭と話術得心させる占師

千秀

易学を身につけ話題ことかかず

太茂津

占師の忠告信じたことがない

好啓

プレッシャーを占うカード操っている

杜的

トランプ占い湖畔の宿を聞きながら

スミ子

ひやかした占いあたる秋の風

寿美

占いを過信していた立ちくらみ

頂留子

スランプか易者がみくじ引いてはる

河瀬 芳子

易者の前を行きつ戻りつする女

吐来

占いが好きな女でまだ独り

白漢子

前科ある男と占う卦には出す

幸

大器晩成という占いは信じたし

(清記・楓葉)

「茴香の花」選者交代

昭和63年1月号から女性コーナー「茴香の花」欄の選者を小出智子氏から八木千代氏に交代します。投句先は次のとおりです。

〒683 米子市花園町一四

八木千代

川柳塔社

京都塔の会吟行句会

日時 昭和62年11月22日(日)

集合 午前10時、JR黄檗駅

会場 宇治黄檗山万福寺・白雲庵

兼題 茶碗・稔る・自覚

会費 五千元

申込 11月10日までに松川杜的あて

主催 京都塔の会

富田林市民川柳大会

日時 昭和62年11月15日(日)正午開場

場所 富田林市中央公民館・別館

兼題 酔う 池 森子選

美しい 高橋千万里選

空港 小出智子選

思案 吉岡美房選

みかん 阿部柳太選

席題 当日一題 各題3句

締切13時30分

会費 無料

各題秀句佳作に多数

主催 富田林市教育委員会

後援 富柳会

吉田笑女さん(宝塚市)より

金一封拝受いたしました

川柳塔社

物故者供養松露川柳大会

日時 昭和62年11月23日(祝)11時開場

会場 米吾ステーションビル4階

米子駅前 電 33-1222

おはなし 小林由多香

兼題 手ごたえ 土橋 螢選

追憶 両川 洋々選

慰め 渡辺 独歩選

身内(みうち) 但見石花菜選

逢う 八木 千代選

称(たた)える 奥谷 弘朗選

ジョーク 恒松 叮紅選

合点(がってん) 澤 車楽選

各題2句 締切午後1時

席題なし

会費 三、〇〇〇円(作品集、懇親会費を含む)

昼食は各自済ませて下さい

主催 松露川柳会

電話(0859)62-11520

小西雄々方



締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・玉置重人

川柳泉庵

吉川

寿美報

かしましく皿鉢料理に伸びる箸
はんのりと匂う紅刷毛合歡の花
亡き父を五百羅漢に垣間見る
新時代折り合う心が欠けて見え
晩の夢抱きしめる夏ケツト
心臓の水洩れ始めて工事中
蚊一匹大の男をいらだたせ
丑の日は鰻だなんてうちは肉
丁寧に留守番電話に頭下げ
墓参りだしに使用て里帰り
作句する溜息眼鏡すべり落ち
ねぶた祭絵師の気魄がはねている
内需拡大百足の靴をはかせたい
一言が百足の毒よりまだきつい
数えれば百足の足ほどある悩み
さあ出番成績なんか二の次や
言うだけを言わして私の出番です
仲裁役出る潮時を心得る
和紙ために少女の域がまだ抜けず
和紙づくり吉野の山の谷の風

淑子 道子 文子 清子 弘子 キヌ子 和子 はつ子 伴子 悦子 敦子 敏子 途子 満州子 トミ子 三世 シマ子 三千代 葉子 義一

ちぎり絵と造花に和紙の温かさ
母の匂いやさしい和紙に包まれる
目録の熨斗が酢わせる謡いぞめ
和紙で折る鶴へ淋しいひとりの言
耐えること教えて呉れた和紙の里
和紙を漉く母の指から冬になる

翠洋会

中西兼治郎報

先輩に恋のかけひき教えられ
かけひきがうまい老舗の京おんな
近いのは有難いけど世話がやけ
台風の前路きいてる泡立て器
へそくりがたまるかかけ引きまくやり
近いうち遠のく足に不義理出来
母のひざ古傷ひとつ置いてくる
勇氣ある人が傷つく会議室
正解に近いところで苛立たせ
曼珠沙華祖母が身近にいてくれる
自転車は遠くの店へ行ききたがり
一寸待て言えは傷つく人がいる
隣の噂遠い他人が知っている
冗談に近いところで言う本音
傷あととは忘れぬ母のおまじない
虹色の泡光つるベビーバス
近況を聞いて古傷うずき出し
先物で赤穂の会社泡を食う
ひとときのいのち見事なシャボン玉

西宮北口川柳会

松本

一郎報

白水 昭子 シメ子 美子 美代子 兼治郎 文子 萬里 美津枝 満子 為子 良子 君子 春子 宏子 里美 綾子 東雲 楓子 光子 みつ子 登志実 鬼遊 静子 米朝 諷云児 佳秋

善人の瞳に席を譲られる
例外を一つ処理したたばこの輪
お向かいに越して来た人夫婦かな
雑巾をゆるくしほって母老いぬ
傘五本干して家族はみんな無事
景気いい話聞いている手内職
例外にならないように歯を磨く
松葉杖がわりに肩をかしてあげ
例外な思想が花の種にある
方向音痴の妻を本気で叱れない
公民館教えてくれた杖の先
例外は私が女だったこと
例外を無視して古いからを抜け
こんぴらさん杖貸したがる店ばかり
雑巾も老母も疲れて秋になる
見かけだおしのカレーに話はずまない
花を買った日傘クルクルうれしい日
佐々木つとむを例外だとは笑えない
名人会八十路の芸に鉦連打
雨避ける吞屋隣も傘が無い
カラフルな傘が行きかうビル谷間
一筋の道傘寿の顔にある温み
近頃は鬼も化粧がうまいそんな
ループア夫妻さりげなく旅土産
雑巾に徹してみよう二度の職
よく冷えたビールに挨拶長すぎる
雑巾を持って来たのに叱られる
総入歯歯ざりささもままならず
おしゃべりが好きで雑巾よく乾く
さりげなく見せて王様杖を持つ
ゆずられて少し汚れた席に掛け

伊三郎 いわゑ 江美 よし津 美子 みち子 幽歩 香 美智子 きよ子 紀雄 千秀 靖子 笑女 よ志子 春子 かすみ 千世子 白漢子 メ女 杜的 求芽 一郎 正坊 保藏 しげお 眉水 はつ絵 芳子

雑巾は手縫いにかぎる木綿糸
 例外に生きる男が多すぎる
 お隣は白い雑巾干してある
 子の雑巾絞りなおして拭いてやる
 ぼろぼろになった雑巾我が身かも
 雑巾も縫えぬ女が翫んでいる
 老い先が見えて年金まちきれす
 手鏡に紅さす妻の顔のしわ
 ぼろぼろになった雑巾死を悟り
 二学期だ黒くなったねとはしゃぎおり
 横顔を見せるとクイズ解けるかも
 情報過多選別力を身につける
 雑巾がけ高座に上がる夢を見る
 鍵のないくらしの中にある平和
 ドンにだけ例外がある社の喜劇
 友が皆「旅行するよ」と言いに来る
 天狗面で脅すと笑う現代つ子
 例外はなかったらどうか父の靴
 余生などないと思つて生きている
 歩道橋すこし月に近くなる
 例外が世間を広く甘くする
 無人駅こわれた傘が置いてある
 例外を認めた日から弱くなる
 おろしたての雑巾にまだ逢わぬ
 使わな杖の置場に困つてある
 例外がきかぬ役所に花があり
 謙譲の美德を笑う流れ弾
 ここだけの話朝から三度聞き
 よいことで待たされている駅の裏
 雑巾になつても木綿に芯がある
 洩れている灯に向いの無事を確かめる

光代 伊升 御前 陽露子 ノブ 良征 山久 文夫 曲ん手 六郎太 芳仙 勝美 俊子 善太郎 百万両 博子 紫春 荒介 保 枯梢 由多香 紫香 青珠 英九郎 柳右子 柳伸 武庫坊 年一 正子 香子

母が達者で窓から海がよく見える
 雑巾が干したかたちのまま落ちる
 白い手袋拾う女もすでに秋
 学僧の雑巾がけも葉のうち
 妻だからこそ例外は許されぬ
 杖つけば仏心地から湧いてくる
 銀行の名が雑巾に汚れる
 何遍も同じ絵のとこ読ます孫
 中年の夏の終りは独り酌む
 雑巾がけ冬の廊下は長すぎる
 嫁だから返す言葉を選んでは
 城北川柳会
 ゆかた着て火花見に行く孫きれい
 リズム取りつくづく帽子さつと立ち
 一円貨ヒカリ拾えと叫んでる
 朝顔が暑さ過ぎてみえさほこり
 海外へ行つて日本の良さを知る
 片隅にふと心行く合歓の花
 ネクタイを締めたら背筋伸びて居る
 アメリカ風此頃無理な事を言う
 パーティーに行く娘に持たすナフタリン
 飽食の果は茶漬の味となり
 コスモスの一輪さして無人駅
 争つたしりを明日へ残さない
 水の味知つた振りして買わされる
 斜かに読んだ斜かに物を言う
 言いたい事言つて仕舞つて胃が軽い
 水槽の鯛は生死を知らぬまま
 うまい事とばかりうまき居る
 会う顔に逢えず列車を一つ待ち
 白バラの棘はやさしく手にふれる

作二郎 磯 水声 白宗 柳影 天樹 三笑子 一進 森生 新造 みつ子 神夏磯道子報 寿美礼 トキワ 新一郎 晃世 ふみ 佐津乃 悟郎 静歩 白峰 公一 八重子 笑風 市郎 倫子 右近 山久 静子 温子 純子

第10回

寝屋川市民川柳大会

日時 昭和62年11月3日(祝)

開場 12時30分 切 13時30分

会場 寝屋川市立総合センター4階

寝屋川市駅西口より京阪バス②
 総合センター前下車すぐ

おはなし

兼題

息抜き 橘高 薫風氏
 足跡 里 小路選
 斜め 門谷たす子選
 裸婦 安田 吉甫選
 光る 辻 一弘選
 天和 阿萬 萬的選
 平和 森中恵美子選
 黒川 紫香選

席題 なし 各題2句

会費 七〇〇円

賞

各題秀吟賞と選者色紙
 入選句集

主催 寝屋川市川柳協会
 後援 寝屋川市文化連盟

早朝の夫婦で語る万歩計

虫の声何があろうと季は移る

耐えて来て枕ゆたかにフルムン

我が家とは五体のねじがゆるむとこ

遠回り良かった流の裏を見る

手の平に乘れてうれし子の成長

腕角力負けてうれし子の成長

逆境で家庭の温み身にしみる

豊中もくせい川柳会 田中

音もなく萩がこぼれるかくれ寺

萩咲いてこの時期寺は豊かなり

句碑読めぬままに真昼の萩の寺

ぞろぞろと猫も親子で萩の寺

萩の寺秘仏の扉まだ開かず

写経する机に萩の風入れて

両袖の机に自由奪われる

白菊を飾って主のない机

娘が嫁に行つて机は粗大ゴミ

相場師の机電話が鳴り止まず

遺影置く机きれいに拭いておく

机にはカンニングらしい文字の跡

ボス猿の誇り順番守らせる

前身を知らずに誇る蝶の羽

学歴を誇り疲れが少し見え

誇りある煙突鉄と首切られ

何一つ誇るものないのが誇り

淀君の誇り我が子と燃える城

誇りある天守へ鳩が糞をする

マイホーム誇れる程のものでない

ねえねえボンが鼓笛隊の太鼓

シエパードの誇りやたらに吠えられぬ

ふさ子

道子

登志代

テルミ

ただし

文子

満津子

正之

正坊

眉水

容子

杜的

博史

正坊

作一郎

諷云児

よし子

登志実

紫香

富子

房子

きく子

メ女

福一

山久

洋子

萬的

白溪子

隆

英子

はこらしげに百舌鳥でつべんで鳴いている

点滴の暗い心にリンゴむく

高齡化我も我もと元気です

車椅子花火の音の中にいる

日曜のつぎで手頃の袋運る

曼珠沙華赤を競いて過疎進む

聞いたと言わず相づち聞き上手

老いふたり気ままな暮し秋刀魚焼く

反省のない子が耳にイヤホン

器用貧乏孫の宿題すけてやる

賽銭箱人の影からそとと投げ

尼崎をはま句会 上田

広告の目玉へ主婦を走らせる

秋の風旅のチラシが誘い出す

企みのある広告に騙された

又おいで動く列車に母の声

笛吹くと派閥一斉動き出す

リハビリで動いた右手妻と泣き

欲望に動く心に手綱しめ

親である前に女で揺れ動く

凡人がうちわ片手に独り言

凡人が天狗に変身老い知らず

凡人がまた変えたいの勤め先

凡人の夫にニンニク刻んで馬の背を分けて夕立逃げて去る

準備だけさせて嫁ぐ気ない娘

病み勝ちの父を励ます古時計

風の愚痴黙って聞いている野の仏

やつこ風読んで感激また笑い

尼崎いくしま句会 上田

佳秋報

曲ん手

市雄

典子

つえ子

美村子

花村

武庫坊

庸佑

慶子

佳秋

喜代子

登代子

定人

十四郎

よしつぐ

江美

夢之助

貞吉

いわを

歌子

清蔵

清太

紫香

武庫坊

敏之

佳秋

弘治

昌子

向西

佳秋報

佳句地10選 (前月号から)

赤川 菊野 選

明日島を去る潮騒と酌み交す

望郷の運河は暗く多喜二像

風鈴の音にも夜は夜の音

良薬も毒もおんなじよう苦い

青りんご我が初恋に似て愛し

帯芯のあたりに川の音を秘す

旅に出るちがう自分に会えそう

台本にすれば我が家もいいドラマ

おっとりと美しい嘘考える

好きな事好きなだけした人の顔

しなやかな夜にしたくて紅をひく

遙かなる闇へ絵を画く遠花火

人柄を偲ぶ豊かな花鉢

銀婚式昔と同じ宿にする

わたつみの女偲び香た女

もえつきた女が偲ぶまた過去

逝きし娘の部屋そのままだオルゴール

偲んででも偲んでも切れぬ過去の女

白が好き母さん偲ぶ夏帽子

終止符を打つ日浴衣の肩が揺れ

ひとときを浴衣の似合う夕涼み

宿浴衣六場へ一人二人消え

百万の味方母への電話する

他生の縁たそえ間違い電話でも

光代

弘子

杜的

鬼遊

甲吉

千代

電話口寝起きと分るしやべりよう

切り返す口を閉ざした電話口

女房の生き生き見える長電話

へのへのもへの書いて聞ける長電話

アルバムに偲ぶ若き日の父と母

紅珊瑚母を偲んで忌がめぐる

台風之余波鳩達の来ない窓

死ぬ時はやつぱり妻を呼ぶだろう

呼び水の頃合いを知る故里の母

空青し母を呼びたい気にさせる

笑い袋に呼ばれて男軽くなる

肩叩き値下げをすると孫のスト

悪党になれぬ手相を持つている

びつくり箱きのう別れた女の計

職退いた時から俺に四季がない

ピカドンを陣地で聞いた遠い夏

もう時効はずんだ愁も里心

美しい台詞で鬼が呼びに来る

ゆるされて許して夕日美しい

セールスが応待悪い家と知る

老人の杖市長からもう秋

キタキツネを見に来ないかと誘われる

ひょうたんぶら夫は返事しないまま

サークル檸檬

金づちで泳げないのに海が好き

接待に疲れて花火音だけで

花火散る恋散る今宵夢のごと

協力者名簿氣にして寄付をする

泳ぐのも木のぼりも下手まだ無名

方程式どおりに届く遠花火

杜の

楓云児

ときお

一 郎

みち子

春 子

英 子

園 歩

美智子

芳 子

い わ

萬 的

か ね

良 征

静 夢

佳 秋

伊 三

芳 子

は つ

白 漢

紫 香

作 二

タカ子

松本日

千代女

三四子

雅 子

美 子

智恵子

美 緒

花火待つ顔はみんな善人

ライバルより少し少ない寄付にする

犬かきで百米を泳ぎ切り

三幸川柳教室

母さんと七つ数えた虹のいろ

裕ちゃん虹の向うで待つてるぜ

単身赴任虹が下から出迎える

久々の虹がおまけの恵み雨

スモッグで虹の彩まて汚れそう

虹消えてまた喧噪の街になる

選り好みするから虹を見失う

背かれても虹の向うを信じ切る

ひたむきに生きて涅槃の虹が立つ

バスの旅慣れないおけき唄わされ

バスツアー前も後も未亡人

バス廃止過疎が重たくのしかかる

バスひとつ遅らせ母の愚痴を聞く

揺れるバス脳中枢へ丸い腰

夕立の中へバスから吐き出され

追いかけて来る児をバスが待つてやる

まんまるに膨れたような朝のバス

古里のバス古里のようにゆれ

カラオケが暫して途絶えた事故現場

白い眼に耐えて雑草強くなる

全身を目に舗道行く白い杖

絶望がまわりの空気白くする

真心がこもる輝きかも白磁

白い帆の行方は聞かず旅の窓

ページ尚余白明日の稿を練る

真白いシートに五体のねじ弛み

原点に戻って白い画布を塗る

今日子

泰 子

薫 風

寛 子

正 吉

隆 行

美 昭

文 子

敬 子

保 晏

計四郎

重 次

育 子

み ね

高 夫

千 香

カツミ

和 子

正 一

智水庵

靖 子

三千子

澄 子

愛 子

桂 香

千 秀

幸 子

茜

ご挨拶

昭和四十五年一月に発足致しました菜の花句会も、私の健康のためこの度暫時休会することになりました。十七年の長い間、皆様にご愛がられまして、すぐすぐと成長してまいりましたが、洵に残念です。将来再開の節は何卒よろしくお願い申し上げます。

菜の花会長

西 尾

栗

追而、日本川柳協会へは引続き入会致しております。

和歌山三幸教室新同人一同様より

金一封拝受いたしました

川 柳 塔 社

藤井高子さん(名古屋市)より

金一封拝受いたしました

川 柳 塔 社

極楽はふたり健やか朝の粥
極楽へエンマ邪険に通せんば
天国は土地転がしが買い占める

川柳化粧轡

植村客遊子報

針に乗ってトンボが見てる花時計

花束を貰って照れる披露宴

クルクルと日傘まわして待つ嫉妬

忍従の顔を鏡で笑ろてみる

自分史にあるビンボケも大切に

軍歌ならうたえる喉がマイク持つ

人並みのくらした墓参に戻って来

はころびを縫うて女をかみしめる

公園のD五一黒煙画き加え

広告を除けば新聞軽くなる

晩学の筆が暑さへバテて来る

佗しくて安いブラウス買い占める

偶に出たデートへ彼が欠伸する

朝漬けへ忘れられない亡母の味

暑さよけシネラマを見て涼をと

糊さいた浴衣へ亡母の声がする

老友も亦鬼籍に替わる会報誌

ギャル一人あごまでつかる露天風呂

ウェディングドレスバージンロード踏みしめる

川柳ささやま

脇田 米朝報

寝たきりの母の白髪を梳いてあげ

年輪を語る白髪がよく似合い

白髪の老人ロマンに花咲かす

堪えて来たあの日を語る共白髪

捨てられた種が芽を出す底力

力強く生きた遺影に見てもらい

学力が出来て親父の死に遇えず

千枝子
鉄治子

大鷹

岳詩

秋月

越山

白李

葉香

紅月

礎石

悲子

みつこ

サワ子

遊峰

遊光

美ね子

とし

輝月

永楽

和子

客遊子

とみ子

和子

千代子

ヒサ子

法齊

可住

エキオ

指鳴らしチンピラ力見せたがり
仏間より洩れる日課の祖母の鐘
子の懐仏ごころは視かせぬ

橋山も仏信じている笑顔

欲の皮子言鴨呑みにした破算

晩運の予言信じて明日に生く

夕焼けに亡母の予言へ思慕燃ゆる

とんだばやし富柳会 池

千支相性悪いと言いつつ古希となり

営業用の笑顔にノルマの影が射す

上々の首尾は笑顔で盗まれる

友達の縁談ばかり話す孫

旅の宿名刺でつなく初対面

笑顔よし応待もよい受付嬢

肩書の取れた名刺が風に舞う

縁談が決ってからのよい話

ボナスよ名刺よさらばああ定年

肩書は主婦そんな名刺をそつと見え

縁談へほんまに頼りない夫

考古学好むが縁談遠くいる

よく笑う母貧しさ口にせず

にた川柳会

西村 早苗報

記憶術読んでもそれを直ぐ忘れ

ほんとうの男はむちの愛をくれ

水仕事ああローソクに似た老後

いつからか鳴らなくなったオルゴール

孤独から浦島箱のふたを開け

根回しが効いたと思う異動欄

盆はよし艶歌またよしやがて秋

ステテコの気楽さ中元など来ない

右折可に迷うたらしい跡がある

ひか平
まさの
文平

越山

百合子

ゆう也

つや子

森子報

義雄

優

曲ん手

花子

ジズエ

昭水

庄次

文次

田中勇

森子

美房

岳人

花梢

愚童

きみえ

鉄花人

弄美子

雪子

登美也

晴月

夢酔

宗光

溜息がすぐでる二人よっこらしよ
高い肉食べたとじまんして歩く
母さんの掌中で踊る平和の輪

太陽が笑うかっぱがはしやきだす

実社会貴下のプランがはし過ぎる

風船へ忘れてならぬ夢を詰め

悲しみを知ってる亡父の樹と話す

オープンが目玉の列にならぶ老い

夫婦箸折れて誤解がつかめない

犬嫌い犬の方から知って吠え

口あけて醜態のまま歯の治療

偶然にしてはおかしい事がある

健康美化粧はいらぬ父の酒

脛の傷つってからの男たち

お互いに羨む野良と血統書

あきらめがつくまで止まぬ雷よ

形見分け亡母のタンスの伊勢曆

此の辻の風に荷を置く風鈴屋

時々は女神も嘘で逃げておく

静岡市川柳塔同好会 永倉

湯加減を知らず鼻唄ひとしきり

老妻のきつい言葉は野に下り

無口の利悟った時は野に下り

掃除機の前で追われる日曜日

快復期医者の見立てが良く当り

へそくりは家計簿にない妻の知恵

愚痴だけは吸ってくれない換気扇

たまさかの敬語戸惑う奥座敷

筆の跡ワープロよりは重く見え

へそくりを貯めて孫への贈りもの

四季めぐる水の怖さと有難さ

哲三
三和
雪代

巡歩

雄裕

雀踊子

弘朗

為一郎

重一

千草

早苗

多賀子

幸一

景子

紫泉

花子

孤秀

僕川報

紀代志

ゆたか

定次

孝平

やす

たま

志げ

たき

つね

ワープロに負けてはならぬ老いの筆
 風鈴が夢路を誘うすだれ越し
 罪もない服れた布団叩かれる
 声の出る欠伸聞える襖越し
 本音さえ吐けぬ女の胸の内
 父さんが気のすんだ顔墓が建ち
 お隣の欠伸が移る待合室
 へそくりのつもりの札に足がはえ
 勿体ないそれが明治の悪い癖
 川柳東大阪
 森下
 愛論報

千代 さん ぬ み つ まつ 静代 庚子郎 喜平 僕川 慶三 雀踊子 良京 松山 愛論 喜風 律子 孤舟 美子 俊一 喜一郎 晋吾 作一郎 公一 湖風 滋啓 章久 二宗 吟平報 賀平 旭泉

二人三脚やと回した夫婦独楽
 限られた命を燃やす蟬時雨
 退院をすれば節制もつ忘れ
 善人が癌になるとは勝におちぬ
 姿見に心の悩み見透かされ
 八十の平和老婆と月見酒
 すんなりとミックスしてる嫁姑
 血圧が上がり気になる肥りすぎ
 久しぶりにお上がんさいと碁盤出し
 生き字引社内でも字をたたき上げ
 段級位上がつて習字に味が出る
 階段を二つずつ上がつて来た人生
 竹トンボ屋根に上がつて腰をすえ
 波風を立てずに丸い嫁の出来
 大家族やさしく丸く助け合い
 幸せは丸い友情につつまれる
 丸くなる話も横から水を入れる
 風船につめた空気が丸くなり
 元気がよく食べて頼りにされてます
 悔い一つ抱いて余生の頼みごと
 頼む気の一升さけて切り出せず
 頼むのもこれだけですと再々度
 頼むことあつて呼鈴そつと押し
 女関で北風と知る頼みごと
 吉日を選んで上司頼まれる
 頼むもの無しとホームが忙しすぎ
 あの人に頼んでみよう顔がきく
 パス無理な絵馬も神様頼まれる
 頼まれた子守の方が寝てしまい
 打吹川柳会 奥谷 弘朗報 紫映

伊久栄 あき子 光水 甫正 楽山 禅心 知代子 千代女 志重 吟江 秀香 邦人 楽山 定山 つゆ草 英子 江山 山人 保恒 虞人 静長 さわゑ 雅紅 美恵子 静香 半仙 アヤ子 弘朗報 紫映

過去にふと触れる想いのドラマ見る
 作り笑いの私は惨め過ぎないか
 仕掛火花心の憂さを吹き飛ばす
 限界を知る日の椅子が冷たすぎ
 羅のおんなを連れて盆がくる
 人情に飢えた手紙を書きいそぐ
 折っても無駄本尊は寝てごさる
 美しい夕日へ明日の夢を組む
 一面を憎みつづけて共白髪
 恋の歌川柳で詠む蟬であり
 野の草が食べたいらしい牛の舌
 夕涼み香水匂うつちわ風
 平和だな裸でビール飲める城
 邪心干し明日に虹の橋かける
 セールのうまい話にしてやられ
 嫌いだと言うのは酒でなく会費
 日に三度暑さに負けぬお洗濯
 庭石にしばし散歩の足をとめ
 川柳塔唐津支部 久保 正敏報 花代 弘朗 柳風 幸子 節子 白峰 三和 宗光 道子 規仔 雄々 蛭 巡歩 たつみ 早苗 雀踊子

山下みつる報 正敏 香代子 久仁於 掬水 旭恒 朴竜 四郎 虹汀 高明 あき 花代 弘朗 柳風 幸子 節子 白峰 三和 宗光 道子 規仔 雄々 蛭 巡歩 たつみ 早苗 雀踊子

求紫正麗
芽香坊水

陽露子 白溪子 よ志子 杜の 孝江

飛鳥
榮 礫

花代子
和友
悦郎報

覺然坊
頂留子
勝美

度 みつる 曲ん手

三男 山久 鯛牙子 夕花

律滋喜
子啓風

晉
五

— 83 —

友情のそれから軋む借用証

おめでたい酒は朱盃で酌きこぼす

安酒を酌ぎあう嘘のない仲間

酌いでくれた父が赦してくれている

酌きたしはいやとつなを見せせて飲み

猛獣の前の小兎酌ぎに出る

純情な指で上手に酌きこぼし

太鼓の皮理にすれば月が出る

秋まつり囃る小太鼓太鼓

九月には鬼も小太鼓も遠くなる

放心の面をかぶっている太鼓

うっ憤を晴らす太鼓の乱れ打ち

煩惱よ消えてなくなれ太鼓

父権復活が太鼓を打ちたがる

歴史には残らぬ父で酒が好き

ハイウェイの下に歴史が埋めてある

母さんの歴史が匂う落し蓋

苔むした歴史農民一揆の碑

開発がねむる埴輪に叱られる

赤トンボ歴史が欲しい都市沙漠

箱枕かなしい歴史が詰めてある

麦藁帽明日香の歴史掘り起す

生き抜いた歴史が咽喉の傷痕に

人間の哀史にこぼれる埴輪の眼

川柳塔きやらぼく

石垣

サラダ記念日若い風とも仲良しに

おとこ女髪では区別出来かねる

燃えた日もあつた白髪のトシューズ

病む父が的にしている握力計

ねむる間も生きる力をいただいて

生身なら力まかせの押問答

章

比沙胡

信治

雀踊子

規王

茶の子

柳伸

東雲

枯梢

砂輝守

泰

昭子

アキラ

シマ子

八斗醪

和尾

欣之

雅風

とみを

悦郎

白洋

美幸

蕉露

十歩

花子報

石垣

日枝子

八重子

登栄

より子

朗子

恵子

どたん場で女が見せる力こぶ

カブト虫の力になれる僕五歳

力こぶ負けない母の底力

力こぶ負けない母の底力

神様の力を借りて生きている

力まない暮しに馴染む凡夫婦

夕暮れて肩の力もぬけてくる

庭先で芋の芽力主張する

なだらかな水面の恐い底力

一言が力となって生きている

母の樹の力は地下に溜めている

千匹の力で築く蟻の域

なけなしの力で権をはなさない

眸の奥にちから限りの炎を溜める

鹿野町みか月川柳会

土橋

頂上の石光つとる拾つとく

病窓やあの黒百合を傍らんか

夕焼けの真つ赤な水で鉄洗う

八朔の風が落とした盆を拾う

その時の為につぶての石拾う

落魄の峰より夫婦ひき返す

一生を峰にとどかぬまき終る

そしてまた夕蟬が八月を刻む

この夕陽街に住む子に送りたい

死ぬるまで裸のままで生きてやる

つまずいた石を拾ってあたためる

朝方を仏に話す年齢になり

裸一貫白紙の地図をぬりなおす

グラビアの裸婦をみつめている孤独

夏の葬帷木林を騒がせる

夕日が美しいから少女を泣かすまい

夕子

正子

純子

ふみ

富美子

玲子

田鶴

花枝

瑞枝

千春

富枝

御前

千代

荒介

螢報

苦句

諷人

はるお

石花菜

盛桜

昌三

八重子

隆風

正子

汲香

小鹿

武子

かつ乃

くに子

荒介

雅女

汽車だいて裸の王子夢を見る

サラダ記念日酷暑に着い風が吹く

占いは信じていますお星さま

夕焼けの下は焦熱地獄だな

野の百合よ誰かがきつと見てくれる

土地買つて少しもうけて売るといふ

八月の夕焼け千羽鶴が舞う

字の欠けたネオンに誰も気づかない

山ゆりの匂いへ鬼の立ち眩み

昼見るとこれが夕べのネオンかね

杉・杉・杉 山の向こうに煙一つ

織女星雨に逢う瀬を流される

流れ星別れて未練口にせず

美しい母を盗んだネオンの灯

流星の夢山脈に着き果てぬ

雷のようになびと言身にこたえ

夜の市安らぎを売る人ばかり

売り急ぐ命短い花だから

雷が鳴って尺蠖進めない

若者の熱気暑さの色をかえ

わかあゆ川柳会

小砂

ひまわりが今日もお日様へごまをすり

血みどろでピエロが渡る今日の橋

受け皿が支えてくれた五十年

見上げればひまわり陽の顔笑い顔

ひまわりの姿勢あくまで崩さない

落ちこぼれさせぬ受け皿母の掌

独り者沈黙癖からどもり癖

ほつれつつ頑張っている受け皿

受け皿が二つあるのも歯が疼く

また今日もひまわり太陽に片想い

ふみ子

日枝子

みさ子

喜享志

完司

智恵子

きみ子

久子

マリ子

けんし

坐牛

幸枝

富恵

花子

美佐子

房洋

和子

螢

三子

白汀報

ヒデ子

蒼流

悦良

世似

智重子

聖子

天痴人

鈴江

民子

かつ子

長旅へ受け皿どうにか持ちこたえ
受け皿がつとまるでしよか米を研ぐ
海は受け皿水を辞さず火を辞さず

まつえ九月例会

恒松

町紅報

甘党が一杯の酒軽くあけ
甘党で車社会を突つ走る
スタミナのあつたあの頃ふと思

マンネリに馴れて縮んだ芸の幅
芸ひとすじをこたえコハゼへ決意する

代仕男

あの頃はヤンチャ坊主で今社長
あの頃は近頃も苦勞だけ夫婦
姿見があつた頃の苦労やべり出す

台風もくると回る風の芸
堅物が女を口説く芸を持ち

操子

あの頃の事は時効と時の人
あの頃は二人で歩いた藤袴
女盛り不倫へ近い距離にいる

芸にない涙をもっている役者
旅回り何んでもこなす芸達者

由郎

きつちりと女盛りを結ぶ帯
おばあちゃんの女盛りが蔵にある
ジョギングに女盛りが燃えている

忘年会思わぬ芸に目を見張る
猿の芸コマーシャルまで引立てる

笑円

女まで女盛りが振り向かせ
薄着から女盛りは持っている
切り札を女盛りは持っている

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

芳子

金魚すくい子より父親意地になり
糸切れた爪にも似たり内の人
血統書まだ残しているマルチーズ

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

蒼流

風鈴も鳴らし忘れたこの暑さ
釣りに行く朝の目覚し後で鳴り
結果の奥は知らないサン格拉斯

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

友子

いつの日か合わす十指を組んでみる
花時計きつと小人が住んでいる
屋上で大人が遊ぶビヤガーデン

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

山久

横顔が少し寂しいサン格拉斯
時計台安保反対でました
消しゴムが頼り私は無器用で

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

房子

三味線のみすじの糸に色香秘め
川柳藤井寺
赤木

時刻表見て空想の旅をする
空想がいつい園児のしゃばん玉

静恵

和子報
志洋
ときお
須美
きよし
喜道
つやこ
沿子
吸江
美房
かな女
美代子
三郎
与呂志
祐二

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

内浦宇宙を睨み秒を読む
旅の宿ポスターほどの美女も居す
足音に金魚急いで整列す

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

丸い鼻彼女クラスの人氣者
来客へ内職の糸つけたまま
政治家の命がけにはだまされぬ

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

旅一別れた駅の雲が好き
甲子園みな優勝の顔で来る
糸車昔のことは忘れよう

時刻表見て空想の旅をする
空想がいつい園児のしゃばん玉

静恵

料亭を真似てもかなわぬ家の味
垣越えて朝顔両家に花咲かせ
金網を這う昼顔の暑さかな

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

ひぐらしに溶け込む息子の高いびき
草むしりビール一杯なお涼し
涼しさを固めたゼリー夏の夢

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

流行らぬ顔一度はかけたサン格拉斯
タレントの素顔見せないサン格拉斯
サン格拉斯かけると翹てみたくなり

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

幼な子の追憶ばかり鳩時計
つながれて犬も暑さに喘いでる
汗にじむわが分身が腕時計

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

お大様爪にはマニキュアリボンつけ
糸すこしゆるめて爪を遊ばせる
川柳たけはら

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

森井
秀伸
秋園
彩女
昭子
作秀
初枝
和美美
雅美
清心
敦子
美佐
正人
末一
みのも
重樹
伴子
本蔭
つお

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

みずやつてのにあさがおさかないよ
ちよきんばこそせんおかねたまらない
おかあさんぶんぶんおこるこわいなあ

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

すなはさらさらさらさきもちい
お母さんおより上手のcockさん
金魚は水そうの中ですずしそつ

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

ぼん休み海水よくいくんだぞ
小四晴
美

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

小四晴
美

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

小四晴
美

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

小四晴
美

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

小四晴
美

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

小四晴
美

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

小四晴
美

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

小四晴
美

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

小四晴
美

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

小四晴
美

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

小四晴
美

空想を現実にする新時代
空想を現実にする新時代

静恵

小四晴
美

夏休みじいちゃんこへ来て泊り
大砂丘思ったよりも小さいな

海に行つてはくだけ陽焼けねむれない
捨て猫だ飼つてみたいが許されない

実生菊ガツツな母の血が流れ
僕が行くと負けるカーブを見て帰る

食べなけりやならぬ茶碗の重さかな
天皇の歩幅小さき祈念式

運命の流るるままに昼寝する
蟬しぐれ明日の命は思わぬ

緊張も風疹ですにはつとする
さりげなく子に投げておく牽制球

スイッチオンまだ大脳が作動せぬ
さわやかな笑顔に鎧ぬぎ捨てる

掘り返す工事の音の暑さかな
朝の法縁笑顔寄せ合う友の居る

悪い事悪いと言つて悪くない
ストレスがたまると電話してくる娘

たまさかの孫を聞んではずむ食
一面の青葉の露は玉で落ち

厄年の子の無事祈る鈴を振る
長い旅ここ迄来れば落ちつける

影法師黙つてついで来てくれる
信念はのらりくらりが氣にくわぬ

理由もなく受話器を握る孤独な日
表面は笑顔心で泣きくすれ

久し振りに問屋に行けば血は苦い
年金のワクでけられぬものばかり

夏が好き何年ぶりのピアガーデン
やさしさを忘れて愛に飢えている

たたかれて動き始める小さな芽

小四視 幸

小五由 博

中一純 平

中二垂貴子

菁居

蘭幸

静水

こうじ

白狐

房子

愛子

静佳

静風

栄恵

千恵

麻代

俊夫

君枝

八重美

ヤスエ

ふさ枝

清水

勲

千年枝

喜美子

浪子

喜久恵

貞子

淑子

令子

康子

疑いを知らぬ手にある毒りんご
二代目にゆずれぬ業がまだ残り

その昔父母がそろつていたあかり
金魚鉢小さな平和かもしれない

灰色にしとけば誰も傷つかぬ
三河鉱悲しゴッホは五十億

どん尻の歩幅もたのし輪の仲間
越えてきた時に今日は蟬が鳴く

原爆病棟戦いはまだ続いている
いさり火を数えて旅の宿にいる

潮時と思うビールもそう思い
高野山武將も登った石畳

岸和田川柳会

逢うだけで心満している笑顔
シャッターに疲れた心とらえられ

太陽族逝つて中年がのこる
乗り継いで老舗の味を食べにゆく

車渋滞帰省の心はやるだけ
大切りの西瓜で涼と縁の先

盆休み兄嫁だけが忙しい
針の手を休めぬ母に秋祭り

信心の掌からこぼれた軽い罰
商売繁昌本店の名をつけたまえ

それ程の事でなかった口喧嘩
黙禱の願い届けつゝ夏の雲

老いまで職持つ人の顔の艶
チョビ目と方言まねて孫帰る

ふとわれに帰ると私古稀でした
ささやかな事にこんな喜びは

絶景へ美食は要らぬにぎり飯
正直で言葉飾ることはせぬ

博子

太虚

比呂子

笑子

一路

静火

シゲヨ

臣子

不動

年三

卓三

千里

武助報

こう

寿美子

ダン吉

富志子

ゆずる

みゆる

通彦

博子

太虚

比呂子

笑子

一路

静火

シゲヨ

臣子

不動

年三

卓三

千里

武助報

こう

寿美子

ダン吉

富志子

ゆずる

みゆる

通彦

浪速子

一弥

佳生

狸村

圭一

希久志

加代子

ひで

さよ子

武助

白光子

空梅雨にあじさい化粧忘れさせ
愛と憎見事に演じ木偶の首

女燃えよ均等法がついている
ぜいたくな涙世間を知らず生き

南大阪川柳会

挨拶の一つにこだわるへそ曲り
へそ曲げたばかりに逃げた儲け口

さりげなく敬遠されたへそ曲り
世の中をまっすぐ見てるへそ曲り

八十路にも孤独の募るへそ曲り
へそ曲り蛙にもいるへそ曲り

へそ曲り遅刻もせずに出社する
隣組に一人は居ますへそ曲り

落雁の名物があり城下町
おすそ分け柿の葉ずしと秋になる

唄だけが残り名物消えてゆき
名物の無い寂しさは通過駅

荷物にはならぬ踊りを観て帰る
伊勢までは行かず赤福を駅で買う

自分の色選んで鏡に背かける
選ばれたのやおまへん順番ですサカイ

平凡を選んで小さな灯をともし
選ばれて少し身になつてゐる

選ぶ身になつて気付いた恐しさ
選ばれる立場で少し媚びてゐる

選外になつた私に明日がある
選ばれてプレッシャーのしかかり

練習の視野にライバルいつも居る
練習の鬼には五寸釘打つてやろ

生きずの絶え間を知らぬ程はげみ
それも練習ですと御飯をたかされる

春栄

甘平

初太郎

操子

滋雀報

勝美

庸佑

重人

雀踊子

喜風

三恵子

綾珠

善信

慶三

柳伸

覚然坊

しんじ

新造

ハル子

千里

凡九郎

滋雀

藤子

頂留子

曲手

晴風

妙子

楓子

文章

久秋

度

喝采の夢が励ますりハーサル
自分への甘さが練習に負ける
満ち足りた目には仁王も笑うてる
ライバルの笑顔一晩寝こじれる
口封じの酒を酌がれている笑顔
お人よし通夜で笑顔が出てしまい
へそ曲り頭のうずも二つある

川柳喜知

川竹

松風報

不二夫

節子

菊野

佳風

朱坊

幸泉

千鳥

玲

俊子

春枝

孜郎

竹萌

功

かず子

嘉代

和広

松風

隆二

伴子

美子

吐来

白水

優

ケイ子

三子

忠宏

満洲子

志洋

淑夫

繁一

健三

葉子

昇

昭子

美代子

敦子

清子

絢子

トミ子

比沙胡

重人

蛙声

弘子

末一

シメ子

敏

胡村

たけし

美津子

重樹

正義

悦子

キミ子

司

三千代

背中にも眼があるような歩きよ

母の背の苦勞へ詫びることばかり

傷つかず撤退の二字探してる

ベル鳴つて枝雀の顔がひきしまる

妻の留守電話のベルが鳴り過ぎる

川柳わかやま

神平

狂虎報

英子

作二郎

桂香

武雄

柳宏子

正子

萬的

榮美子

克子

正博

紀美女

登志代

美智子

忠

光代

太茂津

石子

千寿子

照子

豊太

緑良

紫香

瑞穂

幸

三男

何よりの誤算は妻が先に逝く

見えずいた居留守に勝つたと思つ

あかあかと灯がつき駐在さんは留守

神様の留守も誓詞を疑わず

郵便箱に悪い予感の留守続く

留守に母来たのかメロが置いてある

お隣の留守へ宅配よく届く

おにのるすおのれの天下四畳半

留守の留守へ電話か偵察か

旅の妻氣遣い電話か偵察か

八十の杖などいらぬほけ達者

久し振りに青空仰ぐ試歩の杖

愛用の亡父のステッキ立てたまま

水溜り教えて呉れた白い杖

杖ついた姿でデカを煙に巻く

沢木の杖に嫉妬もあつたらう

清子

絢子

トミ子

比沙胡

重人

蛙声

弘子

末一

シメ子

敏

胡村

たけし

美津子

重樹

正義

悦子

キミ子

司

三千代

背中にも眼があるような歩きよ

母の背の苦勞へ詫びることばかり

傷つかず撤退の二字探してる

ベル鳴つて枝雀の顔がひきしまる

妻の留守電話のベルが鳴り過ぎる

川柳わかやま

神平

狂虎報

英子

作二郎

桂香

武雄

柳宏子

正子

萬的

榮美子

克子

正博

紀美女

登志代

美智子

忠

光代

太茂津

石子

千寿子

照子

豊太

緑良

紫香

瑞穂

幸

三男

何よりの誤算は妻が先に逝く

見えずいた居留守に勝つたと思つ

あかあかと灯がつき駐在さんは留守

神様の留守も誓詞を疑わず

郵便箱に悪い予感の留守続く

留守に母来たのかメロが置いてある

お隣の留守へ宅配よく届く

おにのるすおのれの天下四畳半

留守の留守へ電話か偵察か

旅の妻氣遣い電話か偵察か

八十の杖などいらぬほけ達者

久し振りに青空仰ぐ試歩の杖

愛用の亡父のステッキ立てたまま

水溜り教えて呉れた白い杖

杖ついた姿でデカを煙に巻く

沢木の杖に嫉妬もあつたらう

清子

絢子

トミ子

比沙胡

重人

蛙声

弘子

末一

シメ子

敏

胡村

たけし

美津子

重樹

正義

悦子

キミ子

司

三千代

背中にも眼があるような歩きよ

母の背の苦勞へ詫びることばかり

傷つかず撤退の二字探してる

ベル鳴つて枝雀の顔がひきしまる

妻の留守電話のベルが鳴り過ぎる

川柳わかやま

神平

狂虎報

英子

作二郎

桂香

武雄

柳宏子

正子

萬的

榮美子

克子

正博

紀美女

登志代

美智子

忠

光代

太茂津

石子

千寿子

照子

豊太

緑良

紫香

瑞穂

幸

三男

何よりの誤算は妻が先に逝く

見えずいた居留守に勝つたと思つ

あかあかと灯がつき駐在さんは留守

神様の留守も誓詞を疑わず

郵便箱に悪い予感の留守続く

留守に母来たのかメロが置いてある

お隣の留守へ宅配よく届く

おにのるすおのれの天下四畳半

留守の留守へ電話か偵察か

旅の妻氣遣い電話か偵察か

八十の杖などいらぬほけ達者

久し振りに青空仰ぐ試歩の杖

愛用の亡父のステッキ立てたまま

水溜り教えて呉れた白い杖

杖ついた姿でデカを煙に巻く

沢木の杖に嫉妬もあつたらう

清子

絢子

トミ子

比沙胡

重人

蛙声

弘子

末一

シメ子

敏

胡村

たけし

美津子

重樹

正義

悦子

キミ子

司

三千代

背中にも眼があるような歩きよ

母の背の苦勞へ詫びることばかり

傷つかず撤退の二字探してる

ベル鳴つて枝雀の顔がひきしまる

妻の留守電話のベルが鳴り過ぎる

川柳わかやま

神平

狂虎報

英子

作二郎

桂香

武雄

柳宏子

正子

萬的

榮美子

克子

正博

紀美女

登志代

美智子

忠

光代

太茂津

石子

千寿子

照子

豊太

緑良

紫香

瑞穂

幸

三男

何よりの誤算は妻が先に逝く

見えずいた居留守に勝つたと思つ

あかあかと灯がつき駐在さんは留守

神様の留守も誓詞を疑わず

郵便箱に悪い予感の留守続く

留守に母来たのかメロが置いてある

お隣の留守へ宅配よく届く

おにのるすおのれの天下四畳半

留守の留守へ電話か偵察か

旅の妻氣遣い電話か偵察か

八十の杖などいらぬほけ達者

久し振りに青空仰ぐ試歩の杖

愛用の亡父のステッキ立てたまま

水溜り教えて呉れた白い杖

杖ついた姿でデカを煙に巻く

沢木の杖に嫉妬もあつたらう

清子

絢子

トミ子

水平線の彼方へ誤算落き放つ程がある誤算も誤算桁違い添い寝する乳房は舌で遊ばれる母の杖島を忘れた事がない

いずも川柳会

吉岡きみえ報

こんな時因太い妻で感謝する感謝などみじんも知らぬ非行歴飽食へ感謝を知らぬ食べ残し仏飯を盛れる感謝の割烹亭落選も感謝の言葉言つて去り満ちたりたつけは感謝を忘れさせ感謝する父母へ絶やさぬ仏の灯コンクリの冷えに感謝の暮らし消え感謝して越える峠は温かいまだ坂をのぼる五体に感謝する風雪にたえた五体に感謝する感謝状態の名前にして貰い一日の疲れ感謝の湯があふれ五指たりていた産声に感謝する感謝した割に少ない金一封今日も又空弁当にある感謝天と地の恵み呼吸を感謝するハンカチが幾度母子のドラマ拭くハンカチの白に疚しき咎められハンカチに嘘がしみている多弁嫁ぐ日の父のハンカチ忘れないう花嫁の父ハンカチ握りしめもらい泣きしたハンカチは優しくハンカチの白き男の汗を吸う冷汗を拭くハンカチ見当らぬハンカチで拭い切れない汗もある

寿子 天彦 与呂志 狂虎 重昭 朱紅 芳枝 久代 南風 しま子 肇 まこと 桂子 きよし 美代子 佐吉 勝子 千草 幸一 ちかし 独仙 律子 秀子 蒼流 功 久栄 文子 桜水 美磯 弁次郎

ハンカチを落して彼女打診するハンカチを二人で使ってもらい泣き汽車だった頃はハンカチ振って泣きハンカチを白旗にして妻に詫言ハンカチを隠なくさがす嫉妬心心無い嘘にハンカチひとつ握りしめ惜別の振るハンカチに胸迫る悲しみに耐えるハンカチ白がよいハンカチは悲喜こもごも涙拭く若さには勝てぬひらめきパイオの世ひらめきがこ一番の道を開けひらめきが鈍ていつもとじばかりひらめきがあつても老いは実にならずひらめきの色はきつと黄金色ひらめきの星が占う蟻地獄クイズききひらめきにぶい年となる一瞬の閃光無残な原爆忌ひらめきが出ないどこかが詰つてひらめきの欲しい窓辺の月印ぐ此奴スリだ一瞬ひらめく刑事の目ひらめきを追う一瞬の記事となるたくましい子の肩幅にむくいられ老母の肩動きつかれた灸の跡肩寄せていがの中にも栗二つ押し込めばなんとなかなと満員車押し売りは吠えつく犬を飼っている父の忌が近いと風が背を押す夏バテの歩幅を秋の風が押す一と押しが足らぬ男の破れ傘末席が逃げの打てない念を押す怒り肩枯れて矢目立つ今日

満江 水煙 喜栄子 春雄 流石 裕 勝水 軒太楼 風子 京子 栄 ノブ ひさ子 リチエ 為一郎 安雄 清子 充之介 芳子 巡歩 久道 正朗 房子 多賀子 青湖 夢酔 昭二 よしこ きみえ 代仕男 緑之助

川柳後楽

井上柳五郎報

糸たれた時から無心つきを見るトンボ釣太郎花子の物語魚心知つて釣師の投げる餌まっしぐら義理人情が進ませぬまっしぐら若さに怖いものが無しまっしぐらの亀は勝利を疑わず子定ではもう家が建ち庭ができ子定した預金の利息が付いて来ず悪友に明日の予定は無いと言ひ子定などないから人生おもしろい子定には入つてなかつた倦怠期休肝日の予定がくすれ二日酔富士山も活きているよと揺れてみせお迎えにハンドル預け安来節定年になってハンドル妻が執るハンドルは今日も無事故で明るい灯祈る手へ愛を届ける神の私語高槻川柳サークル卯の花河瀬芳子報この仕事終えるに旅に出るはなし仕事だと言つて麻雀して帰る職安の仕事を選ばない財布ロボットに寝首欠かれている仕事仕事場に神棚がある町工場挨拶は野良着のままのパパでよし自販機が仕事帰りの道にある水仕事する時女らしくなるパチンコの釘をなおしている仕事風鈴の音が聞こえて仲直り風鈴に母の童話が聞こえます夕立が来るか風鈴騒ぎ出し

照路 草風 玉水 玉水 秋月 哲郎 佐加恵 智彦 拓治 美智子 文平 柳五郎 吟平 金吾 浄美 桃風 スミ子 彰一 百合子 和友 紫香 高風 春風 眉水 鬼遊 草木 満喜 多賀子

— 89 —

川柳ねやがわ

高田

博泉報

長男の食事さらいも祖母のせい
枝豆で長男と呑む生ビール
長男が生まれ老舗の風みどり
履歴書を知らぬ長男農をつぐ
考える振りで居眠りする課長
辻曲る迄の行儀を訪問着
箒目も奇麗に寺もお盆前
行儀よく並んでたこ焼売れ残る
友は病梅雨前線北上す
座りだこ影をひそめて老いている
夕暮れの道路に残る三輪車
考える楽しさもあり本閉じる
釣り糸を垂らしノルマを考える
年寄り乗せてくれない遊園地
小錦の愛嬌徐々に憎くなり
病床で保険の目減り気にかかり
飲み屋から借りたビール傘が増え
長男に親を頼んでそれつきり
考えなく弱点にふれたがる
同性の視線がショートしています
無愛想な男捨猫飼いはじめ
一流のお店で食べる麦とろろ
弁舌さわやか結論はけたまま
アドバース老母の考え光り出す
満期金入った目出度さフルムーン
どまんなかへ投げた私について来い
嫁ぐ娘へ母は行儀の贈りもの
長男が一番長いトイレット
長男で損や五男でなお損や
真ん中の社旗へ小旗が寄ってくる

淳朗 速水 良三 一途 おさむ 静江 光子 光子 あやめ 君子 波留吉 とし 藍子 一鬼 勇太 権太 佐和子 千鶴子 吉峰 杜的 一進 創吾 勝美 曲ん手 紀代 森川春子

保険金あてにします腰かじり
長男は先手を打ったことがない
屑籠に考えの跡溢れれる
お悔みに来て家ばかりほめて
長男が少しづつさくなくなった
窮屈な生活を強いる保険好き
考えが堂々めぐりするばかり
共白髪裏切るようにハゲて来る
地球儀をぐるっと回して考える
ゴキブリが走る行儀言うれず
行儀よく坐って可愛けのない子供
お行儀が良いの悪い犬のこと
奈良の鹿頭をさげる事を知る
行儀から始め竹刀で殴りあい
月見草がなばれそのうち雨も止む
死んでから貰える保険だけ残り
塗箸へ行儀の悪い豆が逃げる
保険金貰えぬ程の小火で済み
金魚鉢長刀鉾の見える窓
高柳川柳サークル卯の花 河瀬芳子報

晴風 冬葉 ときり まさお 博泉 亜成 亜也子 頂留子 英千子 吉之助 敬山 萬的 重鈍 あいき 柳宏子 紫香 薫風 高子 一郎 房子 静江 年二 作代 泰弘 よ志子 千枝子 英子

朗らかに主婦代行が来てくれる
朗らかな青空白球弧をえがく
朗らかき今日は皆にわけましよう
花冷えも羅漢はいつも朗らかに
ほがらかな子に人生のピンチ笑われる
朗らかに笑った写真に手をあわせ
朗らかに生きまひよ考えようですヨ
この席は妻が来るよと嘘を言い
空席がだんだん増える終着駅
空席がありまず歌舞伎座の前に立ち
空席をがっちり押える紙袋
陽の入る座席ばかりが空いている
空席に座ればイビキで落着けず
空席へ来た帽子が置いてある
空席へ盲導犬を連れた女
誘う人いや誘われない人もいや
電話口身体具合い母は読み
仕事やめ疎遠になつていく暮らし
沈黙が続く訣はそこにある
まぼろしの森は童話を食べている
死ぬときは一緒にの友の通夜にいる
そこまでの義理とは人は言うけれど
ボスが動き出す根まわしは済んでる
茶をたてる夫婦へ稲妻通り過ぎ
里帰り土佐の南風を嫁がさげ
敵は常にうしろへ回り夏がくる
夏の好きな姉が西瓜を提げて来る
安もんの金魚で雑魚と仲がよい

白次 栄子 悦子 百合子 光代 暢子 凡九郎 曲ん手 花代子 佳秋 彰一 高子 とおる 紫散 節子 逸子 陽露子 如洲 (河) 芳子 陽露子 スミ子 佐代子 伊三郎 春風 年代 鬼遊

11 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	6 日(金) 午後1時半より 役・祈り・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田渕定人 句会費 300円 投句料 60円切手 3 枚
川 柳 わかやま	8 日(日) 午後1時より 追う・面影・渦	和歌山県民文化会館 4F 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手 3 枚
西宮北口	9 日(月) 午後1時より 平気・姫・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手 4 枚
八尾市民 川 柳 会	10日(火) 夕 6 時より 事情・家来・忘れる・茶	八尾市立労働会館 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川 柳 塔 ま つ え	14日(土) 午後1時半より 沈黙・すれすれ・荷物	慈 雲 寺 松江市和田見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
堺川柳会	14日(土) 午後1時半より 狙う・熱・根・年金	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
もくせい 川 柳 会	16日(月) 午後1時より 眼鏡・消す・ピアノ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1-3、5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卵 の 花	19日(木) 午後1時より 領収書・責める・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電鉄高槻下車歩5分 〒569 高槻市明野町15-27 上原 逸 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
南 大 阪 川 柳 会	19日(木) 夕 6 時より 明け暮れ・係わる・ささやく・大層	寺田町高松会館 J R環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
南海電鉄 川 柳 会	19日(木) 夕 6 時より 神木・元値・抜穴	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 南海・近鉄・地下鉄各難波駅下車高島屋東南角 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株) 不動産管理部管理課 廣井季柳子 句会費無料 投句料60円切手1枚
川 柳 東 大 阪	28日(土) 夕 6 時より おばさん・沈む・布団・町	東大阪市社会教育センター 2 階 近鉄布施駅下車北へ5分長堂小学校隣 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14 齊藤光利 句会費 500円 投句料 60円切手 3 枚
駒つなぎ 川 柳 会	30日(月) 夕 6 時より 必ず・けじめ・禁物・満期	寺田町高松会館 J R環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11津守柳伸
富柳会・川柳ねやがわは市民川柳大会のため例会はお休みです。		

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内
原稿送り先(メ切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)
住所変わっています 〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

●募 集●

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りです。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

一月号発表表(11月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栞選	水煙抄(10句)黒川 紫香選	愛染帖(3句)橘 高 薫風選	課題吟(各題5句以内)
「松」 石田 清泉選	「驚く」 吉原 紅月選	「妥協」 神夏磯 道子選	

二月号発表表(12月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栞選	水煙抄(10句)黒川 紫香選	愛染帖(3句)橘 高 薫風選	課題吟(各題5句以内)
「負担」 石川 侃流洞選	「霜」 稲田 豊作選	「飾る」 山下 みつる選	

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋を(使用ください)。

11月の常任理事会は2日(月)

定価 五百円(送料50円)
半年分 三千二百円(送料共)
一年分 六千三百円(送料共)

昭和六十二年十月二十五日印刷
昭和六十二年十一月一日発行

編集兼 西 尾 巖
印刷所 藤 原 童 心 社
〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川 柳 塔 社
電話(〇六)一六九一四番
振替口座大阪8一三三三六八番

本社11月句会

日時 11月7日(土) 午後6時
会場 メンズファッションセンター3階
東区内本町一 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

兼題 「座りだこ」 黒川 紫香
「うらおもて」 宮尾 あいき
「九官鳥」 河井 庸佑
「皿」 辻 白溪子
橘 高 薫風選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守

会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
各葉毎に裏面に必ず氏名明記。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

12月の兼題 「錯覚」 「狸」
「化粧」 「終り」

12月の本社句会は7日(月)

『夜市川柳』募集

第6回「帽子」 神平狂虎選

第7回「目」 赤木和子選

投句先 千593 堺市堀上緑町二九一二 河内天笑方 堺川柳会

締切 12月末日

編集後記

※十月の「賞発表」と授賞句会が終ると、今年締めくく

りの十月月号と来年度の展望に備える。今年は同人名簿の作成を、年賀状に間に合わせるため、編集部はじめ同人部は多忙を極める。

※例年華やかな賞の受賞者は、今年もそれぞれバツの花束を抱いて感激の面持ちだった。私は、栗玉幹の最終の選の半ば、やつとの思いで会場に駆けつけた。

※その日は熊本で有働芳仙句集「風ぐるま」と水田俊子歌集「夕虹」の出版祝賀句会があり、都合よく出席出来た。同席した八代市の佐野ト占氏は若い頃奈良在住であった由、麻生路郎の直弟子の風格に接してうれしかった。芳仙氏に「風車

静止のときもまたすらに」と祝吟を贈った。氏は私と似て、肋骨六本切除されている瘦身だが姿勢がいい。

殺伐とした都会に住む私と違って目が澄んでいる。風車の動き働いている時よ

り、じつと沈思している方が、ご自身充実されるであろう。静謐の人とお見受けした。

※水田俊子さんは昨年の田柳塔賞受賞に來阪されていたのでお会いしている。亡夫を思う「逢はざれば記憶すら夕虹のさだかならざる虹を探しをり」を一読して、日野草城夫人温子の「七夕や死なねは夫と会えぬなり」の心境そのものだと感じ、卒直に祝辞の中で申し上げた。皮むけは白桃の汁じたりで夫とのくらしを居ることなし。つく

りごとでない歌ばかりだ。アメリカンフットボールの試合で日本一の京大とまみえた息子のチームは、一敗地にまみれた。それから一週間後、息子は入院して精密検査を続けたが、結局脳内出血のあとをきれいに

する手術を受けた。その間の心柄はこたえた。月の内上目数を数えるカルチャーの教室へも、時には病院から通ったが、私の体重は三十九斤となり白髪が増えた。

路郎、霞乃阿先生の霊前に合掌して生駒へ行く。そしていつものようにアートさんに月づけられる。「薫」

▼日本の旅・世界の旅・と新聞やポスターが旅へ誘ってくる。その気と金さえあれば、地球の奥側へだって連れて行ってくれる。旅行ブームは豊かさの象徴でもある。そのさきがけをな

したのは、農協企画の積立旅行や市場の福引旅行だったのではないだろうか。▼借り切りバスでのフロゲラム通りのツアーには、日常

生活から抜け出した解放感はあるが、それは旅行と謂うビジネスであつて、旅とは言えない。

▼ある一日、千葉県をトウイブした。鈍子から利根川沿いに車は北上する。川幅は広く、水量は豊かである。ゆるやかな水の流れを

見ていると、三波春夫の「大利根無情」が、脳裏によみがえる。天保水滸伝の舞台になった佐原の街に車は入り、専へ、キロほどの香取神宮に参る。権現造り

の立派な拝殿と珍らしい思ひのり本殿が続いている。▼目的は本殿の裏にある茶店「寒香亭」の名物だんだ

だった。どんな一皿の客を相手に七十歳の香取竹さんは、火のない練炭火鉢を前に昔話をしてくる。

茶店の窓からトホホが出入りする。土産物の木月に香取神道流と焼印が押してある。そういえば、家原下伝ゆかりの土地でもある。

▼旅はあまり好きではないが、その土地の魚屋や八百屋の店先を覗くのが好きである。そこにはその土地の生活が並べてある。き

タリで我が家までお経をあげるに來て下さるお寺さん。若い頃、高野山で修業を積まれ、五十を半ば過ぎた今もなお青年のように若々しい。話題が豊富で、政治、

経済から国際情勢、最近のハイテクに至るまで実に幅広い知識と一家言を持っておられ、お経は短いけれど、お茶をのんでの世間話は、いつも長くなってしまう。

。香取日も、こんなことをお話しした。

「どこの学校でしたか、卒業式の記念写真に、校長先生と並んで担任の先生がジャージの普及着で写っているんですね。生徒にとつて一生に一度の晴れの写真に、これはいけません。教室で教えるときは勿論のこと、キチンとした服装をすべきです。」

たとえばジャージ姿の坊さんか、お経は本物なんだから恰好なんかどうでもいいと言つて世間に通るでしょうか。

まず形から入ることが大事。標を正すとは、そういうことだと思ひますよ。

合実は、何年か前、親戚に法事があり、導師のお坊さんが綺麗に整髪されていた。その化粧品の匂いが、ひどく場違いな感じがしたという経験がある。そこで、

そのことを話そうかと思つたが結局やめた。話すことをためらわせた理由は自分でも分らない。史

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマンと
フォーマルと

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 **オースケ**

〒540 大阪市東区南新町1-13
☎ 06/941-8015

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ



ほうらい
蓬策
TEL641-0551